

マヌー	島	モクブニ	大島	ウーウエー	泣
アカアカ	笑	ヘレヘレナ	顔	ポー	頭
ラーイ	額	イフ	鼻	レヘレヘ	唇
ワハ	口	ニホ	齒	ペペイヤオ	耳
クエマカ	眉毛	ラプー	腹	ウーハー	股
ヲロヲログイ	すね	ヲーブーソープワ	足首	クリ	膝頭
ポーヒビ	肩	リマ	手	ヘアヒリマ	手首
クエリロ	臂	ミキアワ	爪	マナマナヌイ	拇指
マナマナクヒクヒ	人指	マナマナミキボイ	中指	マナマナビリ	無名指
マナマナイキ	小指	ポリボマ	掌	ワイユー	乳
ヲーブヲーブワ	くろふし	クレクレワワイ	かゝど	ブルブル	すねの毛
ワイ	頬	アイ	おくび	ブカイヒー	鼻の穴
ババーリナ	耳の穴	クーツ	脊	ウミウミ	髯
ボカベベヨ					

クツクツ	衣	ロレバアイ	ツボン	ハルレ	下着
アイカラ	襟	ポーマ	カフス	ババレ	帽
モーイ	臥る	アラ、	起る	カマー	靴
プヲキ	衣	バヒモーエ	寢處	ヘレヘレナ	顔色
キーカラ	髻	アヘヤ、ライ、ヘレ	何處へ行	クリクリ	黙れ
ポワカヒ	月曜	ポアルル、	火曜	ポワコル	水曜
ポワハー	木曜	ポワリマ	金曜	ポワアヌ	土曜
ポワブーレ	日曜				

在留日本人の
状態

ホノル、府に在住する日本人は之を二派に區別する方適當なるべし即ち一の奉教家として他の一種は無賴黨と稱すべし而して奉教家の一派は大抵多少の資産を有する者にて中に白人と軒を並べて商店若くは旅店等を開き各自獨立に營業なし居る程なれば品行の如きも頗る注意し酒烟草を禁せる者も尠からざるより隨つて白人並に土人等よりも信用を博し耻かしからざる生活を爲し居れり尤も奉教家中にも資産なくして人々備はれ生活する者無

きにあらざれども斯る輩にても能く主人に仕へ絶えて怠惰亂暴等の舉動あるを見ず然るに彼の無頼黨の一派に至つては勿論資産とて有る輩もあらざれば孰も他人に雇はれ一週間の勞役を以て二弗乃至五弗の賃銀を得るときは大抵次の一週間は爲す事もなく徒ら酒食を耽り其の醜行往々見るに忍びざる者あり而して彼等常に奉教家の一派を嘲りて愚直なり吝嗇なり徒らに金錢を崇拜して散ずるを知らざるは支那人よりも太甚しなご云ひ居れども何んぞ知らん彼等自らこそ醜態を臚列して國辱を招くとは殆ど支那人と軒輊無きに至らんとするを然れども茲も最も喜ぶべきは彼輩と雖も國法に觸れて罪囚となる者絶無と云ふの一事是れなりとす余が監獄に至りし時も獄中支那人の數多きとは土人に超ゆるも日本人は唯だ僅に一人のみにして是れとても窃盜犯の如き破廉恥罪にはあらで争鬪の爲め又繋がれたる者ありと云へり是故に凡そ本邦人たる者は奉教家は勿論無頼の徒に至つても土人の信用を受くると支那人に勝る萬々なり又白人と雖も軍艦の水夫等往々泥酔して亂暴を爲すよりは是等の輩は土人の厭嫌擯斥を受くると甚しく爲めに白哲人全体にも影響を及ぼしたると白人の當國に跋扈するを惡む所より土人の一体は白哲人よりも寧ろ本邦人を敬愛する

の情あり

在留支那人の
状態

又當國に在る支那人に隨分盛大なる商店を開き紳士流の生活を爲す者も尠といふ可ら亦中には其の生活の状態頗る疎末にして一見する時其甚だ貧困なるが如きも其實豊富なる資産を藏蓄する者あり要する支那人の大概相應の財産を有せざる者はあらずと云ふ然ればホノル、府のルースワットに於ける大なる商店に孰れも支那人の所有にして即ち支那人の商店あるが爲め此街のキング、クイン二街の如き白哲人在留の市街と其隆盛を競ひ居れり而して支那人中に斯くまで豪商の多きを見れば彼等の白哲人と同じく本國より資産を携帶して渡來したるが如く思はるれども其實決して然ることなく渡來の初は素より貧困の賤夫にして傭工に従事し日夜孜々として些細の金錢を貯蓄し其より漸々身代を仕上げたる者にて其の忍耐の強固なる實も驚くべし又支那人が資金を作るの方法は種々ある中に其最も奇なるは三斗入り位の「ツック」袋を携へて山中に入り「ホルスピ」樹の實を拾ふて之をホノル、府に持行き賣却し一袋に付二十五仙の價を得るとあり但し此實は何人にも一日に三袋位を拾ひ得る由されども馬飼料は充るものなるを以て土人は之を拾ふを非常の

耻辱と爲し居れり然れども支那人の更は是等の事より頓着すると全く獨り其利を壟斷し居ると云へり

同二十日 本日は布哇を解纜するとなり居たれば本艦は午後一時より汽鐘に點火し同五時十七分には整備旗を掲げて比叙艦に信號をなし同時二十分より前進微速力にてヒロ港を發す少頃又して半速力に變じ港口を出で航海灯を點じ東南東二分の一、南方に向ふて走る同七時又至り甲板又立て回顧すれば遙よヒロ港の燈臺を西四分の三、南七哩の、距離に認むるのみ更は針路を東南東二分の一、東に變ず八時又至り再び東方又變じ汽力を帆力に換ふる準備をなし同十一時全く汽關の運轉を止めて檣上に總帆を揚ぐ時方に二の風力にて東北微北より清涼の夜風來る同十二時又至り風東北に變じ艦休は東南東四分の一、南又向ふて徐々進行す此夜正子寒暖計七十八度晴雨針三〇、〇五を示し天氣靜穩にして波浪起らず海面鏡の如し

同二十一日 午前八時甲板に出れば布哇の島影を海雲杳茫の間に見失ひて四顧すれば唯だ天水粼粼として相接するのみ是に於て太平洋中の我が並州と全く別を告ぐるに至りけり此

欠

MISSING

是にても同島の魚類に富める一斑を證するに足るべし

イングリッス港

同三日 午前七時鮫島艦長井上航海長並に士官數名第二端船を以てイングリッス港内を視察するの準備に着手す余も亦幸ひに其の一行に加はるとを得たり本艦の碇泊せし場所より端船に帆を揚げしる折悪しく逆風よて四度以上マガラざれば着港するを得ず行くと二哩よして風益々吹き募り浪立つと山の如く端船之が爲めに直行待す初め右舷に風を受け岸に近くと僅に一丁許にして再び轉じて上手廻をなし又左舷風を受けぬ此の如く乗ると數回漸く港口に達したり一行の衣服は浪の爲めに盡く濕ひ一度は帆力餘りに強くして遂に帆索を斷絶し船身忽ち傾きて波を拯ひ殆ど顛覆して魚腹を葬られんとせり杳々茫茫たる太平洋を木葉も管ならざる端船にて帆走を試み恙なく港口に達し得たるは偏し航海長其人の技倆卓絶なるに依れるものなり斯くて港口に入ると土人争ふて出迎へ一行の上陸するを見て椰櫚の生汁亦ぞを呑ましむ島主イングリッス氏大に悦び案内して先に立ち残る隈なく島内を見物なましめたり就中椰櫚油の原料を製する所と海鳥の糞を細粉に製する場所への輕便鐵道を設け其の土人を使役する勞働法等は頗る整頓なし居れり島主の談話に據れば物産は無盡藏な

れども唯だ採收する人員の少きに困むと云へるは左もあるべし又水底は到る處も地を穿つと三尺以上よ及べば清泉滾々として湧出せり余嘗て英國人ハーデー氏に聞く洋海中其の深さ百尋以上の底地は處々に泉脈の迸出するものあり元來珊瑚蟲は此の洋海中清水の泄洩する所を選びて栖息するものなり故に該蟲の清水の所在に隨ふて窟房を造り次第に堆積して海面に露出するに至る偶々珊瑚窟を穿破すれば毫も鹽味を含まざる清水を得るは即ち此説の例證とするに足れり云々、午後五時一行と共に歸艦「此日は天長節なれば午前より祝砲を放ち三橋共に國旗を掲げたり又該島より携へ來りしものは菓實數種、山鶴五羽、小鶴十五羽、鴨一羽、ゴブベ」四五十羽、千鳥七羽外に魚類等まで直ち調理し午後七時まで艦内一統遙に祝杯を捧げて萬歳を呼び歡を盡して晚餐に就きたり

ハニング島の位置並に地勢

本島の位置は北緯三度五十一分二十六秒西經百五十九度即ち我が日本の南東四千二百哩餘の所に在り而して其の幅員は西北より東南に亘りて長さ二十哩近く東北より南西に亘りて四哩あり又其の周回二十四哩餘れども陸地は其幅の廣き所にて一哩、狭き所の半哩よ過ぎず其狀恰も帯の如く蜿蜒海水を抱きて墮圓形を成す其中央の内海よして外面

に即ち大洋なり内外の海水相通する所は該島の西南端に一港口を開くのみ其港口の兩岸相距ると二丁餘周回十八哩の内海より此港口に吞吐する潮流極めて急に其の速力ハ六「ノット」ありと云ふ故に船舶の該港口に入らんとするや必ず満潮の時を以て進む其出るや又退潮の時を以てす扱此港をイングリッス、ハーボツと稱するに即ち島主の名を附したるなり港口より東方に向ふて進入する五丁許の所を碇泊場とせり其廣さ四丁深さハ三十六呎あるを以て千噸迄の商船の自由に出入碇泊するの便を得べく現に英國の艦隊は該港を以て太平洋碇泊所の一とせり該碇泊場は例の珊瑚礁を以て之を環繞したれば（礁上を浸す海水は深さ十七八呎より六七呎に至る）波濤起らず其の港内の安全なるは恰も盆水に異ならざるあり又イングリッス港より海岸に沿ふて西北二哩の所に一岬ありビグチル岬と稱すビグチルは即ち島主の長子の名なり此岬より更に海岸に沿ひ進と一哩の所は弧狀に開きたる一灣あり其の左右に珊瑚礁斗出して大洋怒濤の勢ひを殺げり之をホワラーの碇泊場と稱す巨艦のイングリッス港へ入るを得ざるもの多く來りて碇泊するを常とす即ち我が金剛艦の投錨せしも亦此の碇泊場なりと知るべし

本島の氣候は冬季九十度前後、夏季九十度以上と及ぶ晝夜絶えず驟雨兩數度來りて暑熱を洗ふに依り健康を害するに至らざるも偶々驟雨無きの日は太陽赫々岩礁を燒きて其熱堪へ難し故に皆林中に入りて納涼す樹下草を藉すれば清風來往して人の肌膚を爽かます以て三伏を度るべきなり林叢中或は三町四方程の小野ありて草色常々青々たり歩いて其の中央に至れば沮洳にして土を其の表面に裝するも過ぎず歩々靴を没す草間所々も瀦水ありて小魚を生ず其深さ僅々一二寸許り想ふも此の沮洳の沼澤も幾十百の星霜を経たる後は乾燥固結して眞成の陸地と化すべし蓋し本島の海面に露出せしより其年代久しからざるに依り未だ地質の幼稚なるを免れざるも遂には成長して隣比なるクリストマス島の如く喬木鬱鬱たる島嶼となるを疑はず余現々本島の植物を悉く探究せしに僅々二十一種に止れり亦以て其の地質の幼稚なる一證とするも足れり又本島の地質は白粘土にして日本の陶土に類す即ち海濱の白砂と珊瑚礁の碎片とを處々々々礁巖突出す滿島叢生するもの椰檜樹にして枝幹重疊人をして容を得ざらしむ林中の小野には其苗生ず土人曰く椰檜の繁茂するに隨ひ野を狭めたりと、動物は蚊蠅の類多く陸上には蛇を見ず唯だ蟹極めて多く其大なる者は南瓜程あり又別に一種宿借りの蟹あり皆其の左の剪は大に右の剪は小にして左の三分一に過ぎず然るも造化の巧妙なる各自に其用をなさしむ即ち左の大に之を屈すれば其尖頭を過ぐるも右の之を屈すれば恰も口に接するの便あり故に左剪を以て採りし木實をば右剪に移して後に食ふを常とす其睡る時は身を貝中に縮め例の左の剪を以て貝口を護衛する恰も榮螺の蓋の如し又該島に群がる海燕は其大さ殆ど鷓鴣と異ならず中に鷓鴣より大なるものあり海上に浮ぶ魚を見れば中天より眞倒に海中に投じて之を掴むと鷓鴣のし且本島の地は海面を抜く幾々六七尺の高さにて山なく川なく所々も池水あり全く塩味なきを以て海鳥群集して之に就き其鳥糞は該島産物の一として毎歲數萬弗の收入ある趣さあるが今後數十年の後とて之を採り盡すに至るまじと云ふ又外海もハ松魚、鯛、飛魚の類極めて多く中には一丈以上の鮫あり人若し鉤を下せば一時間に數十尾を得るは容易なり殊に灣内の巖礁には雜魚充滿し手を以て掬すべし鳥類は大概昨日の穫物に外ならざれど其多さと驚くべく金剛艦の水兵ハ左手に麵麩を捧て鳥を誘ひ寄せ右手に棒を持ち飛び來る鳥を打落すも二三時間に數百羽を獲たる程なり

島中の動物

島人の風俗

島内の住民は凡三十人其内男八人女七人其餘は幼稚なる兒女のみ島主加比丹イングリス氏は蘇格蘭人として二十年前に八九人の男女を連れて來住せし者なるが同氏の齡は七十餘歳と覺しく鬚髮皓白なるも身体肥大恰も壯者の如し其の長子はジョージ、ビグテル、グレックと稱し齡二十八、次子はゼームス、グレックと稱し齡二十其他の島主の連れ來りしサンドウイツ島の土人なり島語の英語とサンドウイツ語を用ふ、島主の家屋は二層樓の洋館造りにて納屋物置場はマルシヤール土人の家屋と同じ又本島へは年内に六月と十月二月英艦の來るありて物産の輸出入は此二期止まれり然るに今や圖らずも日本軍艦の來りしに依り嶋人の喜び大方ならざりし又余は島内を巡覽する爲め一人の案内者を備ひたりしが此者は元來布哇人にて其の談話曰く今の島主の來住まで本島の全く無人島なりしかば島主の香蕉餅菓樹其他食用又供すべき植物を移植したり然れども島民の常食は芋薯「コブラ」(椰屑の乾固したる者)と魚鳥の肉にて穀類の常は口に入れずと云へり又嶋民の島主と同じく耶蘇新教を信奉したり余が上陸せしは日曜日なれば安息の宗規を守りて誰れ一人案内に備はれんと云ふ者なし余の何人か余に對して慈悲の善行を施す者な

きやと問ひしかば島主は始めて其僕を貸し呉れたり余の乃ち其の報酬として銀貨一弗も手巾を添へて與へたり

婚姻は三人以上の保證を立て島主の面前にて神に誓ふ但し離婚は嚴禁たり新婦産育する時は夫婦之を介抱す産後三日を経れば皆赤子を懷みして歩行す子を育つるに人乳を用ひず「コンデンス、ミルク」を用ふ然れども本島開始以來絶えて小兒の死せし者なしと云へり、本島の法令中一種奇異なるものあり即ち屋内に火爐を設くるを禁ずると家屋を距ると三十碼の外に非ざれば火小屋を置くを許さざるの事なり其の理由は該島の樹木と云へば椰樹より外に無く是れとても柱の外に用をなさず是故に家屋一たび火を失せば遠く米國より其の木材を取寄せざるを得ず且之を運搬するに半年毎に一度來港する英艦に依頼するとなれば其間全く豚小屋同様の家に起臥せざるを得ず又幸ひに木材早く到着するとも其價の非常に高きを恐れ斯くい火の用心を嚴重すると島主の物語りなりし故に食物の煮焼をなすは例の家屋より三十碼隔りし火小屋に嶋内の婦女相集りて幾個ともなく爐を列ね食物を燒き立て、之を持ち歸りて食するを樂みとせり又島民は椰樹

の外皮を剥きて繩を作るに其久しく朽ちざるい株柁繩の及ぶ所はあらず其の毛皮の部分
 は軍艦製造の材料(即ち艦材と艦の外部を包む鋼鐵との間に填めるものなり)となす然れ
 ども島主の其の製法を秘密として問へども實を語らず余は一見して之を本國に輸入せば
 軍艦の材料に適當なるを知れり其の時藏場は小屋と住家とに論なく孰れも天井一面に此
 繩を釣しわり暫く茲に附記して我が海軍當局者の參考とす、因に記す余の島主に颶風の
 來る時期を問ひしと全く颶風なしと答へ且つ物語る様米國メキシコ灣の如きは毎年颶風
 の來る期節あれど地は颶風と云ふべきものに逢ひし事なし現に見らるゝ如く島内に
 は風を遮る山もなく又峯もなければ林中風に折られし枝なきまでも強風の無さを知らる
 ゝにわらずや此地こそ真に太平洋中の太平島あれど島主又語りて曰く勿論洋海中の島地
 なれば時として烈き風あり就中十二月より一二月の間に吹くものゝ重きに雨交りにて其
 力も強し又七月より十月迄は好天氣打續きて十月より又雨勝とあれど其の氣候も非常
 の劇變なきは本島の位置好きが爲めなりと誇りたり
 此日午後七時本島を發してサモワ島に向へんとす便宜の爲めは漁走の準備をなさず直ち
 に碇泊場より帆走にて發し其の針路を南南西と取れり

同四日五日 兩日とも別に記すべきの事なし

同六日 午後八時西經百六十三度四十二分の處に赤道直下を經過す時に寒暖計七十一度な
 りし大抵赤道直下は風なけれども此の航海には太陽は十五六度も南緯に在るを以て總帆を
 揚ぐる程の風力あり甲板上に勞動するも苦熱を覺えず頗る愉快なりし此日艦内例は依り赤
 道祭の事あり

赤道祭の事

抑々赤道祭の事は英艦にては一同正服し甲板上に整立し水夫もされ士官にまれ最も其
 度數多く赤道直下を經過せし者を推して赤道の神となし金紙を剪りて星形を作り其額に
 戴かせ面部をば眞黒に塗るなり扱其神となりし者は右の如き奇異の打扮にて後櫓の頂上
 より降臨まし〜甲板上に整列せし士官水兵に向ひ一々汝は赤道を通過せしとありやと
 問へば何年何月何日通過したりと答へ且其の保證人の證明を得て宴席に就く又今日始め
 て通過すと答ふる者には神更に難問を發し首尾よく之を答ふる者は去て宴席に就かしむ
 と雖も答辯の出來ざる者の神直らよ水を浴せかけて戯れ笑ふ又露艦にては已に赤道を通

過せし航海の履歴ある者は一所に集合し始めて赤道を通過する者をば一人づゝ呼出し「
ウインド、セール」即ち空気を甲板より瀛關室に送る布製の風袋にて其長さ八九間より
十間もあり幅も亦三人位の並び行くを得べし」を潜らしめ袋の外より繩の鞭を渡りて
多打ちて急ぎ潜り抜けしむる杯なかくの面白味ありと云ふ我が日本の軍艦には未だ其
の慣例あらざるより爲め何かな一趣向思ひ付かんと即ち左の一狂言を任組みたり先づ
其の赤道の神となりし者は下士官某にまして已に赤道を十二度まで経過したる人物なり
此神先づ艦首より艦尾に至りて測量臺の前に直立し其の左右に二人の女神之に侍す一
紙の羽を蒙りて鶴を扮し一は真正の龜の甲を負ひて龜を擬す艦長士官の來り拜するや神
は左右の女神に命じて「ブリキ」製の勳章を授與し畢りて神更に微妙の音を發し航海中
一同能く其職を盡し敢て怠るとある勿れとの訓告をなし艦長一同に代りて答辭を述べ
其より神の設けの座に就く時に神様の御迎へとて繰り出し來る異形異体の者共には獅子
あり虎あり蛙あり牛あり神輿を擔ぐ力士の一隊あり奇人の集合隊と號するありて殆ど百
鬼夜行と一般とよみ笑ふ聲は太平洋の波濤と相和したり斯くて神の座に就きし後始めて

赤道を通過する者一人づゝ呼び出し何か踊れと命じ踊る事の出來ぬ木強漢は憐れや航海
長より水浴せの罰を受くるあり巡航視察の田中大佐を始め劍舞するあり手踊するあり布
哇土人の「フラフラ」踊を真似るあり夜半過ぐるまで歌ひつ舞ひつ爲め天涯積日の客
愁を一洗するに至れり

同七日 本日より十九日に至るまで事の記すべき無し

同二十日 去る十七日より晝夜驟雨頻に至り電光の閃めくと間断なく天地暗黒にして迅雷
艦上に轟き渡り最と凄しき有様にて余も何となく安眠するを得ざる程の空模様ありしも今
朝に至り少しく穏かくなりたり午前七時三十五分サモワ群島の内なるマヌイ島を左舷の艦
首に望む午後七時漸く左舷の正面三哩許に同島を見て夜に入りしが該島にも住民ありと覺
しく山上山下若くは海岸に點々として火影ありて遠近相映じ其の跳擧最と面白かりし、九
時十分頃烈風急來る爲めに「ツライスル」、「スパンカア」を悉く絞りし須臾にして吹
き止みぬ

同二十一日 此日のハンニング島を發せしより凡そ十八晝夜を経て其の航程は一千一百八

十五哩を進航したり即ち午前二時天測に依りてチユチユイラ島は近きを知り始めて汽艦に
 點火し同六時より總帆を卸して瀛走に換へたり午後一時將に同島海灣に入らんとしてアラ
 ラ岬とアヌー島（該島のアラオ村の東岸に在り）との間を過ぐ乃ち該島を左舷に見て進航
 すると三哩にしてフガイツワ海灣に到る同灣は風無きも波のウチリ大にして艦体の傾き二
 十度及びしとあり更に進航すると三哩半許右舷にブリーカーの岬を望む是れ即ちバンゴ
 バンゴの港口にして怒濤巖を衝きて雪と散り銀と砕け霧々として萬雷の如く一望人をして
 心慄せしむ其より同岬に沿ひトゥウエル巖を左舷に見つゝ艦首を東北東に折りて進めば更
 に船首に當りてグランビユース巖の在るあり乃ち艦首を北北西に向け進めば忽ち白屋と
 稱する天主堂を右舷の艦首に望む更に西北西に轉じ又正西に向ふて進めば則ち碇泊場なり
 （此等三時三十分なりし）海底の泥沙にて深さ十九尋、港口より海水灣環して深く斗入し
 たる爲め頗る安全にて假令洋中に颶風起るも碇泊場の船舶は僅に之を檣頭に感ずるのみな
 りと比叙艦の己に六日前に入港なし居りたれば互に甲板より立出で相呼んで拍手喝采す其喜
 び知るべきなり回顧すれば西方のバンゴの山嶺連亘して屏風の如く全港を圍繞し
 翠色滴らんとするの状なり

○サモワ島の記

本艦の同月廿七日までバンゴバンゴ港に碇泊し同日午後五時頃に同港を抜錨し十八時間に
 七十四哩の海上を航過し翌廿八日午前十時ウボル島のアビヤ港に入り更同月三十日まで
 同港に滯泊したるを以て其間余の本群島に於て見聞したる事實は時日に拘りらず左に記述
 すべし

サモワ島の地勢

余は是より本島の風俗習慣等を説明せんとするに當り先づ本島地勢の一斑より始むべし抑
 もサモワ島の南緯十四度三十分に起り十三度四十分に盡き西經百六十九度二十分より百七
 十三度及びる海面に點布する群島にして其中著きもの三島あり其の本島はウボル島と稱
 し周回百十哩ありて海上より之を望む二三千呎の高山七八嶺駢立して殆ど大陸を望むと
 一般の光景あり嶋内又は港灣十二三を有し其の北方に向うて開きたる海門の港灣をアビヤ
 と稱す全島の首府にして島王之に住し政廳所在の地なり

アビヤ港

本港中央の測點の南緯十三度四十九分四十四秒西經百七十一度四十五分なり而して港内の廣さの其の東西と南北共に一哩餘にして海灣を一目すれば港の形を成さざるが如く北岸は港口を開きたるも唯だ其の海灣へ左右より珊瑚礁斗出したるのみ此礁とても礁面の水上に露れずして潮水を被れると六七呎の下に在り常に北西の風洋中より吹き來りて港内爲めに波浪高く碇泊の船艦晝夜動搖して洋中に在るに異ならず軍艦の碇泊場は深さ十尋として海底泥沙なり而して市中の山を背にして海に面し其の東西は椰樹叢生して大氣清涼あれば殆ど人をして熱帯地方に客たるを忘れしむるの快あり當市は布哇のホノル、府は次々太平洋中の大埠頭として米國と濠洲の間に往復する郵船時々本港を経て桑港に至る産物の「コブラ」を第一とし何萬噸を一時に輸出するも缺乏するの憂なく又極めて安價なり又眞珠貝われども土人採收の法を知らざれば未だ物産とするに足らず、小商店の市中に軒を並べて百數十戸あり皆獨逸人にて土人を妻妾にす其商賣の品の衣服、指環、腕環、其他の裝飾品にして土人賣るを専業とせり之を横濱に比すれば大抵其價七八倍なるべし然れど右の獨逸人等は一朝事あれば銃を執りて起ち土人を驅りて戰場に號令する

ると云へり、旅館は二軒あり孰れも一泊の料上等五弗、下等一弗半を要す別に食事「クラブ」の旅館あり一食の料一弗より五十仙までなり其他小屋に旅館の看板を掲ぐる者多しと雖も多くは猥褻の蠻習を存すと云ふ

ウボル島の東南四十哩にしてチュチュイラ島あり周回五十哩其山の最も高き峯は二千三百五十呎に及ぶ島内は數ヶ所の港灣あり最も良港と稱するは即ち島の南側なるパンコバンゴ港とす

パンコバンゴ港

本港はチュチュイラ島の中央に在りて港口を東南に開き喇叭形をなし其莖形の左に折れ入りたる極端にして左右の最も狭き所は三「ケープ」に足らず港内は在りて青山四面を環繞して港口を認むべからず且つ其山は直に海岸より突出して峻巖削るが如く土人に非れば之を攀る能はず故に市街を開くべき平原なく土人は僅に數畝の海岸に棲息するに過ぎずして廣き場所も一町許なれば土人の家を距ると數尺にして無數の喬木森々天を刺し白日猶は暗く大なる蝙蝠の常に飛び居るを見る程なり

又ウボル島の西方に十哩の海峡を隔て、相對するサワイ島あり此の群島中の最も大なるも

のにて周回百三十哩小舟を入るべき港灣なきにあらざるも大船を泊すべき良港なきが故に其の土地の繁昌を見るに至らず其他マヌイの三島あれども孰も周回十五哩以下にして居民は百餘人過ぎざるなり又本群島の海岸頗る魚介も富み且つ鷹及び數百種の海鳥あり家畜に豚鶏の類あり食用に事を缺かず菓實の香蕉、椰棗、橙橘、麵飽菓等にして「タロ」芋は殊に多く土人之を常食とせり

サモワ内亂の顛末

余のアビヤ港に上陸するや三四軍艦商船打ち交りて破壊し或ひは波底沈み或は礁上に横りて滿目荒涼たり己よして市街を散歩すれば屋柱に點々彈痕の印するを見る土人に就て之を問へば即ち昨年一月國王マリヤトナ、アルベバと假王マリヤトナ、マタアハとの新戰場なり蓋し本島開闢以來未曾有の慘禍に罹りたるものありと知られたり余は義侠の癖自ら禁ずる能はず教會に至りて其狀を質さんとて進む途上恰も一人の教師と邂逅して共且談じ且歩して教會堂に至る、其の教師の名をペール、デ、エーと呼び己に二十年前より本島に滞在し能く當地の事情も通せり余大に喜び師に就きて其の顛末を詳に知るを得たり乃ち翌日を約して歸寓し再び教會を訪ひしに師は一人の佛語に通ずる奴隸を貸し呉れしに依り之

を案内として市内の近傍を縦覽し午時に近き頃マタウ村の酋長の宅に休息し晝食す酋長の野蠻には似ぬ篤實の男子にて芋或は菓實等を取り出して頻りに余を饗し談熟して夜に入り遂に其宅に止宿なしぬ

抑々本島の内亂と云ふは土人の間も起ると雖も其實は全く獨、米兩國の確執にして土人の不慮の災厄と逢ひたるものと云ふべきなり初め本島に滞在せる獨國領事ハ一片の書を携へサモワ王マリヤトナ、マタアハの家に到り王に記名鈴印するを請求せりマタアハ王の

何を記せしやを知らざれば直ち之を受取り明朝まで記名鈴印し置かんと告げ獨國領事を返したり此夜恰も米國領事館に在る者遊歩して王の家を到りしかばマタアハ王は偶々前刻の事を思ひ出し獨逸人より請取り置きし書を取り出し米人に示し記名鈴印の請求ありし事を具さに語りければ米人は此書を一見して大に驚き此の王が國を擧て獨逸に委するの誓書あり王若し此書に鈴印せば此國は遂に獨逸人の有となるの外なき旨を懇々諭しければマタアハ王は大に當惑して然れば此の請求を如何せんと相談せしむ付米人は王を勸めて即夜之を獨逸領事に返却せしめたりき獨逸領事は其の鈴印なきを見て大に怒り且つは英米人の



サモアの島

サモアの島

1141

1141

木下尚江

内必す此策を妨げし者ならんと察し如何にもして當初の目的を遂げんと思ひて翌日強て
マタアハ王に迫りしも王の更に之に應せざれば遂にサモワ王の親戚にして王位を繼承す
べき資格を有する者を求めバイエ港に酋長たりしマリヤトナ、アルペバと云ふ者を探り得
て直に之を立てサモワ王とせり而して又獨逸領事の頻りにサモワ島には二王あり其の
來歴を以て之を考ふるにマタアハ王は眞の王に非ずしてアルペバこそ此島の眞の王たる旨
を主張して之を往復しアルペバは家具衣服等を與へて之を手馴付け遂に假王アルペバをし
て彼の書に調印せしむるを得たり是より頻りにアルペバは勢力を興へんとを謀れども
土人の歸依する者少きを憂ひ遂に土人のアルペバに歸依せざる者も遂に之を驅ち責む
るに至れり而して國內の事に立入る事日に月深くなるを以て英米人の殆ど之を坐視する
能はざるに至る唯だ憐むべきは眞王マタアハは自ら未だ禍己の身も及ぶを覺らざりし、一
日獨逸領事は理不盡にもマタアハ王の家の前に建てありし旗竿を持ち去り之をアルペバの
門前に建てたり王始めて恐懼し之を米人は謀りしに米人の王を勸めて之を獨逸領事に詰問
せしむ獨逸領事の傲然之に答へて我の眞王と約して此事を斷行す何を假王の詰問を煩はさ

んどて更は應ずる色なきより米人の王の訴へに依りて試みに之を獨逸領事は照會せしに獨
逸領事のサモワ島の眞王アルペバより本島保護の依頼を受けしを以て假王の勢力を削ぎ眞
王を助けて舊權を恢復せしむる旨を回答せり是に於て米國領事を始め在留の米人は切齒扼
腕せざる者なくサモワ島に叛逆人現出せりと唱へアルペバは自立して王と稱しつゝマタア
ハを凌ぎてサモワ島國をば他國に賣る叛逆の罪狀明白なりとてマタアハ王に勸めて之を襲
いせければアルペバの不意を撃たれて大に狼狽し遁れて舊地バイエ入りて急を獨逸の軍
艦に告ぐ獨逸領事の假王却て眞王のアルペバを襲ふたりとの名義を以て陸戰隊を上陸せし
めマタアハ王を伐たしむマタアハ王之を避けて海上の孤島に入る米國軍艦之を聞き亦マ
タアハ王を救ふとの名義もて再びアルペバを襲ひつゝ大にアビヤ港も戦ふと二三度に及び
し後ち土人の耳慣れぬ砲響も肝を消し皆遁れて山中に隠れ遂に一時全く獨米兩國の戦争と
いなりぬ依て火を放ちてアビヤの市中を焼き獨米兩國の軍艦互に其の雌雄を決せんと云ふ
に至りければ英艦の艦長及び英國領事は爲めに仲裁の勞を取り此戰遂に止む是に於て英獨
米の三國皆本島に關涉せざる事に定め其より二ヶ月間本國の示令を待ちし後各々本國より

の命に依り皆和解し英獨米三國より各々三人の委員を出し本島を保護するの約成り事漸く平ぐを待たりけり依て假王アルバへの其會長の任を奪ひ舊の旧宅を興へてアビヤマ住せしめマタアハ王を迎へ來り再び其位に就かしむ士民爲めに安堵の思ひを爲したりと云へり

アビヤ港の慘状

斯くてアビヤ港は内亂漸く鎮定せしより山中に遁れたる者は日を逐うて故宅の墟も歸り干戈を抛ち魚鼈を網し國政財政其舊に復すと雖も其の瘡傷の血痕未だ乾かず兎角する中に隣島よりの小商船も數艘入港して漸く物産の生意を復しつゝ新土地を開き處々に家屋の新築を見るに至れり然るに一夜東北の猛風大吹き起り波濤山の如く海濱の小屋は之が爲めに盡く破碎せり半夜に至り風勢益々激しければ碇泊の各國軍艦は皆濼鐵に點火して非常出港の用意をなし居る内に一陣の颶風來ると見るや瞬く間、早既に港内の商船は十餘艘陸に吹上られ乗組人の負傷少からざりしが遂に碇泊の軍艦も皆錨を引陸に吹寄せられ水兵等必死に働さ力を盡し或は更に錨を増すもあり或は急馬力を加へて港内を遁れ出んと狼狽甚しかりしに一番に有名なる米艦「トレントン」號の忽ち錨を引陸に吹寄せられ港外に吹上られ次で獨艦二艘も礁上に觸れて顛覆せり斯くと見るより英艦は早くも錨索を斷ち港外

に出んとせしが並び泊せる米艦と帆檣相支へて動く能はず流石に英艦長は之を見て艦の動搖する機に乗じ隣艦と帆檣相觸る時に止まり少しく開けば進みつゝ此の如くすると四五度にして初めて隣艦と離るゝを得て辛くも港外に出るを得たれど風勢頗る迅烈にして其全速力も駕し一時間に漸く一哩を前進せし程なりしと云ふ又跡も残されし米艦の脆くも陸に打上げられ悉然破碎して纜に其の船體を遺すのみ翌朝に至り港内を見るに一港内の船舶悉く破壊して海岸に堆積し水兵士官の死亡する者其數を知らず岸邊に漂着せる屍を拾ひ集めし者のみよて百五十餘人を得たりしが或は手足を斷ち或は身体半ば存せるものありて實に目も當てられぬ慘狀なりしと聞く斯く人禍天變の打續きたるより目下と雖も漸く舊日繁華の十分の一も復したるに過ぎざりや

假王アルバの風采

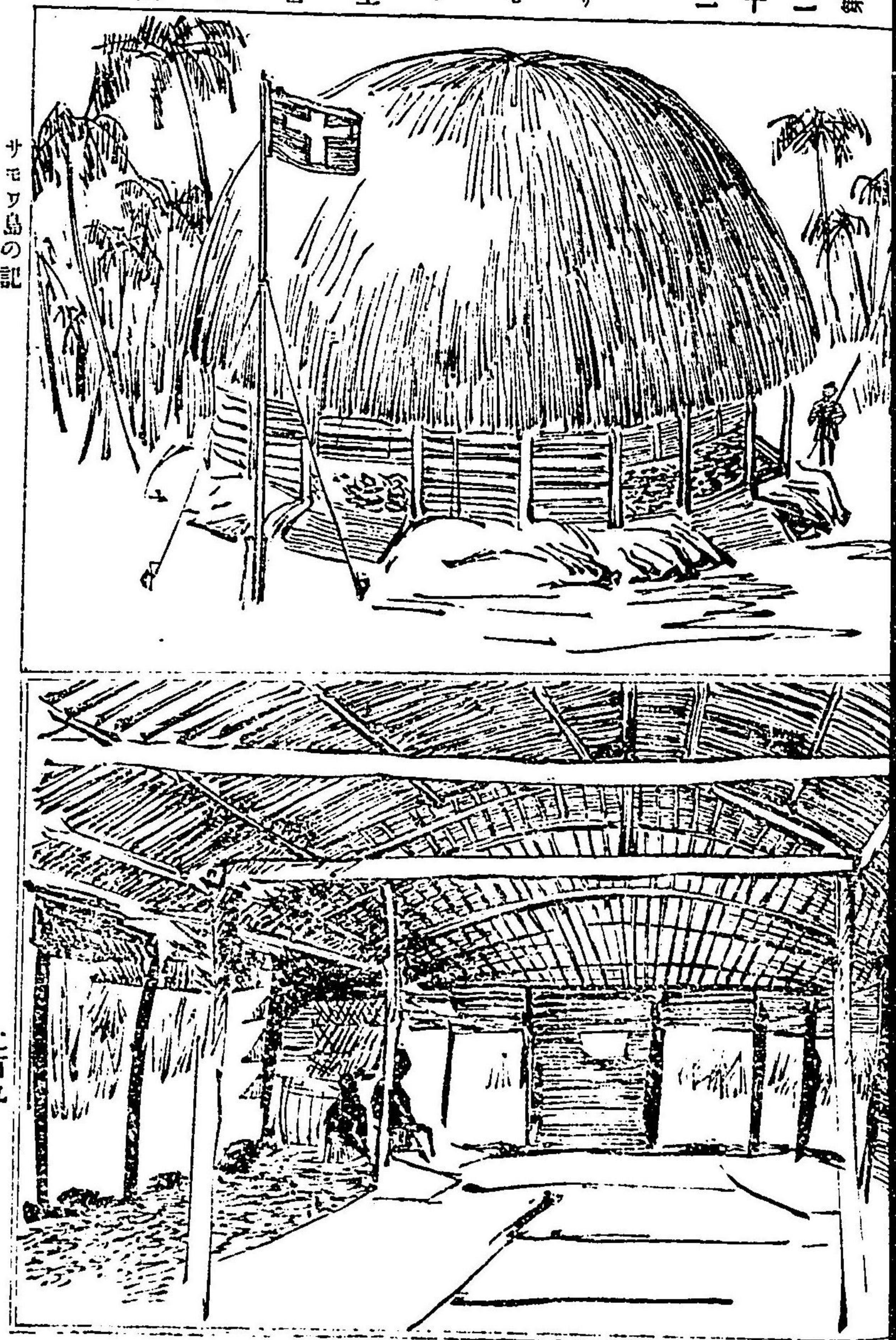
一日假王アルバを訪問せんとて土人に王宮まで案内させたり王宮はアビヤ市の西方に在りて其門の左右に數百株の芭蕉を種る洋風の建物一箇に土人の家三ヶ所あり侍従の如き數十人ありて其の容体の通常の土人と異なり玄關に入れば一人圓卓に凭り書牘を檢し居りしが余の入り來るを見るや直ちに起ちて禮をなし名刺を乞うて之を冊子に記入したり暫くお

りて一人又奥より出で来り少しく待たれよと述べて椅子二脚を持出し一を余と奥へ余の椅子の側には一人跪き居れり此は余の爲めに來りし通辨官なり然れど少しく土人風の英語を話し得る位なり斯くて王の徐々として出で来りしが其の待遇甚だ感慙なり余竊に王の容体を窺ひ見るに頭髮雪の如く方面より肥大なるが舉動沈靜にして自ら風采あり其齡の五十許も見えたれど余は試みに春秋幾許ぞと問ひたり王の打笑ふてサモワ島には歴日なし時々外國の賓客も同様の問を受け迷惑なれば寧ろ何十歳と其容を定め置かんと思ふなりと戯れたり又王は日本人の來訪の辱きを謝する旨を屢々述べし未余はサモワ島の國情を探りしよ王の多く其答を避くるもの、如し唯だ國事を議するが爲め二回の大會議を開きたり其際の英より三名、米より三名、獨より三名出張すと云へり余は問答畢り別を告げて外に出づれば一望盡の如く耶樹林中に洋人の樓居相映じ或は池水を透らすわり風に連れて琴語錚々遠近相和し人をして坐し其身の新戰場を経過し來れるを覺えざらしめたり

僞王アルベアの宅より行くと一哩許して樹木叢生せし原野を過ぎつゝ又一哩にして十字形を畫し一大旗章半空に翻り其下圓形茅屋あり是れ即サモワ島の眞王マ

サモワ王の宮
殿並に王女の
事

圖の宮王ヲモサ 二十二第



サモワ島の記

リヤトナ、マタアハの宮殿なり此建物は本島無雙の奇觀にして其の構造の廣大なるは奇異なるは實に人をして驚歎せしむ其の周回凡そ四五十間にて屋頭の高さ三丈餘あり而して其の中央は三大柱を建て周圍に六十本の柱あり其柱は樹木の皮の儘にて用ひ棟梁は皆枯木を横へ之を支ふるに枝ある枯木を柱にして其上に架し之を繩にて縛りたるなり屋の背くに椰葉を以てし其床は白石を以て疊みなし所々に「パンダナ」の敷物を延べ其だ瀟洒なる雅致を存せり(室内には別に裝飾もなく又彫刻もなし)又宮殿の裏手に三箇の家屋あり王の近臣之に住し百般の裝飾純粹なる南洋風なるに却て余の目を喜ばしめたり余の歩して殿前に至るや二十歳許の一婦女出で來れり余の禮を施して王の所在を問ひしは此所は王宮としてマリヤトナ、マタアハの彼に在りと指しつゝ余を導きて内に入らしむ此婦女は即ち王女アガタにて天主教の信者なるが天資聰明にして能く其の教理に通じたる余の曾て宣教師より傳聞し居れり却説余の王女の通辯により王に謁見す王の大に喜び椰棗の實を出して饗應しつゝ王は金剛艦の事より談偶々日本の國勢及び日本が曾て外人の干渉を受くるの憂なさを羨みて止まず兎角する内金剛艦の士官も來り謁しけり余は先づ王女と教法の事を

談論せし後目下の國情如何を尋ねしに王女は愁を含みて嗟嘆し嗚呼我がサモワ島の遂に獨逸人の手落ちん乎現に英米獨三國の保護を受くると稱するも其實は獨逸人の干渉日一日に増長して殆ど底止する所を知らざるなり英人は殊に政度上に就きて我國を導き又米人の土人の教育も興つて方あり今土人羅馬字にて自ら事實を書記し後世に傳ふるを得るに米人の賜なるべし又獨人は全力を開拓經營に盡くし新道路新市街を造り山中の避暑場に至るまで之を築けり妾は獨逸人の干渉は好まざるも土木の功の復た没すべらざると思ふなり又我國は在留する各國人の氣風を評せんは俊爽にして愛すべきの佛人なり遠ざかる如くにして近く迫り居るは英人なり慈悲心より眞に我國を撫育するの心あるは米人なり功を唱へ恩を假して内訌を煽動するは獨人なりと其の語氣凄然として自ら亡國の慷慨を抱きたるは余をして爲めに感激して去る能はざらしむ其の才識と云ひ議論と云ひ之を南洋の女大夫とも稱すべきものあり因に記す前年佛國宣教師の土人に喰ひ殺し者あり又佛人七名屠殺せられし事あるも佛國軍艦の來るに及んで敢て復讐の擧をなさず其の屠殺者をも訓化するを勉めしより遂に佛國を慕ふに至りしと左もありぬべし且つ土人の獨逸人を視ると恰も仇敵

の如く余の其の小屋に小銃彈藥の貯あるを見て何の爲めにするやと問ひしに皆他日獨逸人と戦争するが爲めなりと答へたり余の親しく目撃したる一事を證せんに獨逸軍艦の恰も我が金剛艦と同時に來泊せし事ありしも土人の物を賣りて行くもの僅に二十名に過ぎざりし余其故を問へば皆答へて彼の獨逸なりと又土人の米人を愛すると極めて切よして米人の爲めよ如何なる勞力をも厭ひざるなり港内棧橋の右傍に數萬噸の石炭、山の如く堆積せり余試みに何人の所有ぞと問ひし彼等答へて米國軍艦の需用に供す敢て他國人をして手を觸れしめざる様常に嚴重に保護すると云へり亦以て土人の米國に對する感情の一斑を知るを得べきなり

佛國宣教師の土人を感化したる話

本島土人を感化して開化の域に導きたるの天主教宣教師の苦辛與つて力ありとす其の宣教師師の即ちホレスチニー師にして其身は佛國巴里に生れ齡三十三歳にして其身を天神の犠牲として蠻煙瘴霧の南洋に渡來し菓實を食ひ草を藉きて起臥し赤脚奔走して耕作を教へ道路を開き其他言語文學の教育に至るまで晝夜寢食を忘れて倦むを知らず同氏の人となり温和にして沈勇あり能く土人の剛暴を馴らして洗禮を受けしむるに至れり（因に記す同氏より

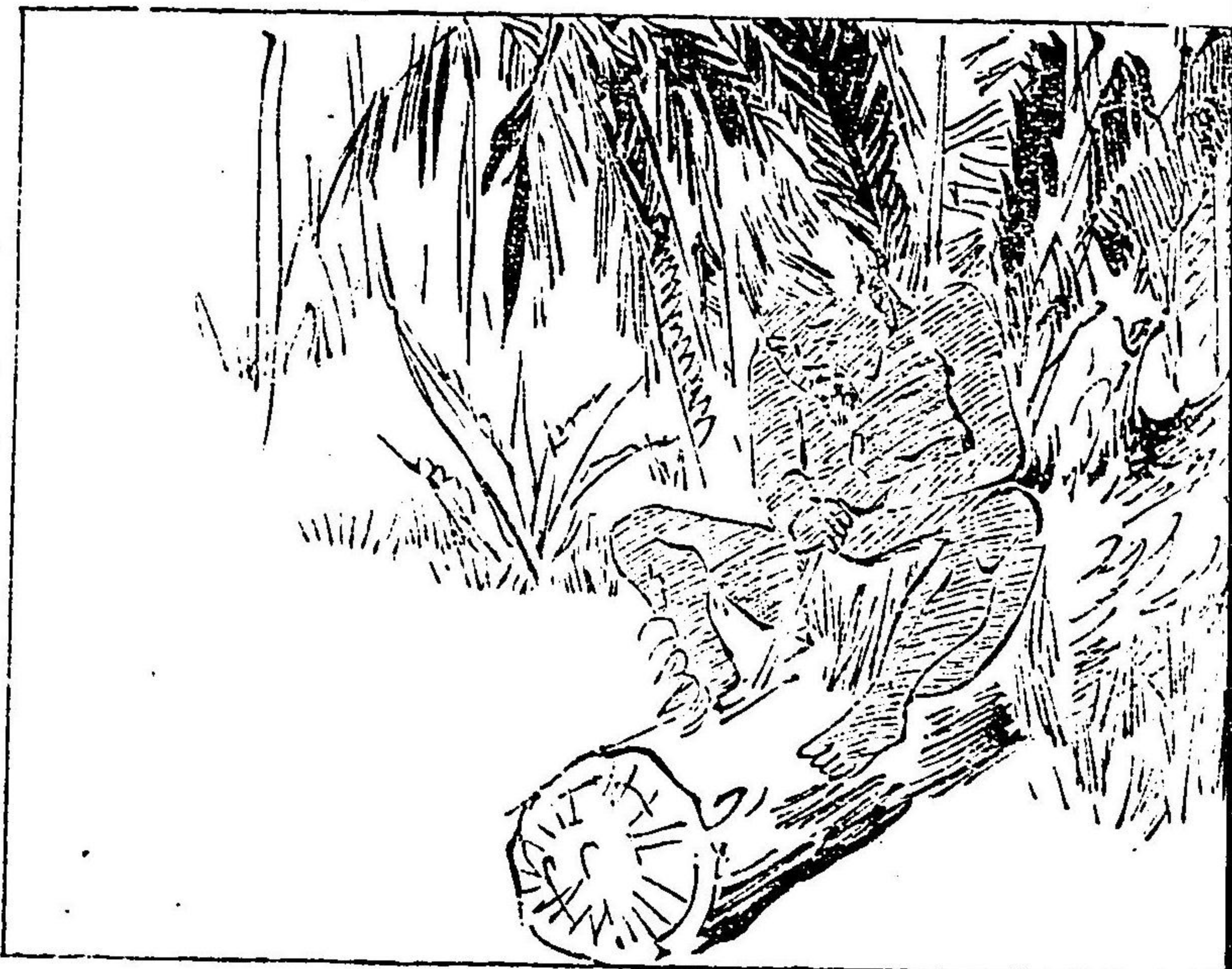
先に渡來せし宣教師は現今ヒージ島のレブカに移住せるパール、ブレヘレー師なり其齡七十九にして前後南洋に四十餘年間在留せり最初渡來せし頃には屢々土人に襲撃せられ或は林中に潛み海上に浮び其の性命を危くせしは幾十回なるを知らざりしと今を距る四十年前に在りては土人皆山中若くは海岸に群居して部落をなし男女共に長髮裸体野獸に異ならず所謂弱肉強食の有様にて互に不意を襲ひ子女を掠奪し壯者を囚虜し之を柵に繋置と豚の如く毎日二三人引出し屠りて之を食ひ未殺されざる捕虜は柵内に於て同胞の殘肉を食ひ已も亦遂に屠り食はるゝを常とせり而して二三十年以前より漸々に宣教師の感化により其の性質を變せり最初ヂエーと稱する宣教師あり一日危険を避けて山中を跋涉せし溪流の源頭に蠻婦の介抱を受けて病臥したる一土人あり蠻婦の部落の近傍に夫を置く時忽ち捕虜とあるの恐れあるより夫を負ふて深く山中に入り時々此の溪流に水を汲みに來る者にてありしなり同師は早くも其婦の良心に富めるを知り之を説かんと近きし蠻婦は異体なる同師の來るに打ち驚き疾く走りて林中に影を隠し同氏は此所を立ち去らば相親しむべき機会なしと思ひ日の暮るゝまで溪流の傍に立ち居たりしに其婦再び水を汲みに出で

來りて同氏の未だ去らざるを見るや又大に驚きて走り隠れたり斯くすると殆ど數十日に
 して蠻婦も始めて同師の害心なきと安んぜしもの、如く水を汲みに來る毎に見馴れて敢て
 畏れざる様になりしなり去れど同氏は言語を通せんにも其道なれば試みに携帶せし小麦
 の粉其他の食料を蠻婦に恵み與へたり斯くて蠻婦の夫は日を経るまゝに病全く癒えしか
 ば深く同師の徳に感じて常々隨行する事となりぬ其より何日となく互ひに言語も通ずる
 に至り日用の便利を得たるのみならず其の夫婦は遂に同氏の感化に依りて洗禮を受け夫は
 ジョワン、婦はマリヤと命名せしが最初蠻婦に逢ひしより今日迄十九ヶ月を費したりとは是
 れぞ天主教の本島内に行はるゝ嚆矢と知るべし

燧木の法

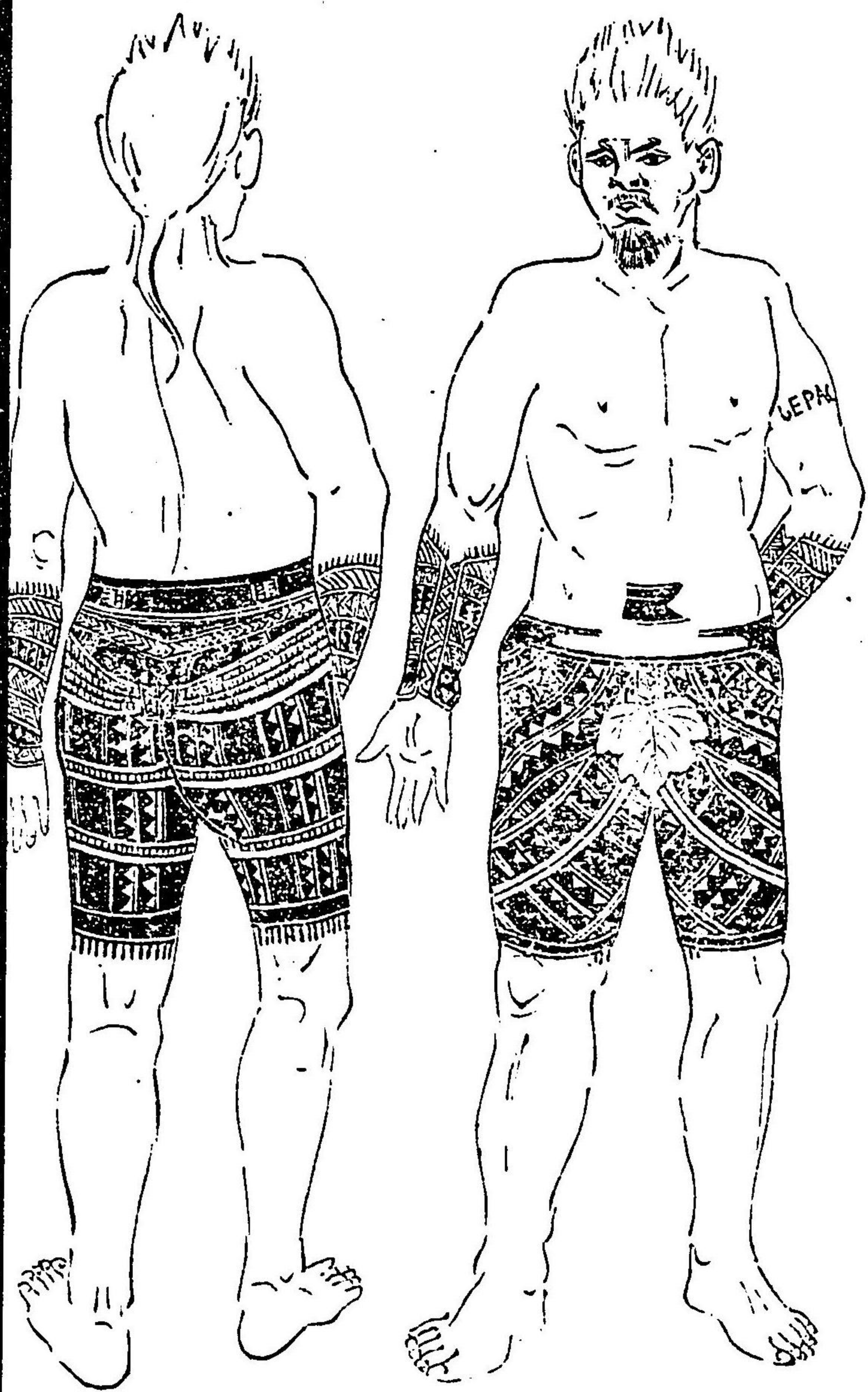
土人は最初山中に穴居し火食を知らず然るに彼の支那燧人氏の故事に符合する燧木の法
 り土人之を「フフフ」と稱す其法は一の「コウ」(我邦の桐樹に似たり)と呼べる木を長さ
 三尺回許り一尺程のもの硯の如く窪き溝を作り他の「コウ」或「アウイ」と呼ぶ木を幅五分
 厚さ三分削り此よて恰も墨を磨るが如く幾度となく彼の硯の如く窪き所を磨擦すれば漸
 く磨り減され粉末を生ずるに至る土人其時一層力を入れて磨擦するに隨ひ遂に粉末の黒く

文身の法



サモワ島の記

第 焦げて火を出す余は其の木片を貰ひ受け
 二 自ら試みしに火を生ずると容易なり即ち
 之を艦中に持ち歸り更に艦中に有り合せ
 三 たる他の木よて法の如く試みしに是亦火
 を出すと容易なりし想ふに燧人氏の法も
 木 亦土人の發明と相距ると遠からざるべく
 聖人なりとの尊崇は勿体なしとて艦中の
 燧 人々互に打笑ひたりし
 の 土人の前年まで殆ど人倫の別なく一男
 として十婦若くは十二三婦を擁し又一婦
 として二三の夫を持てるあり甚しきは父
 子兄妹枕席を共よして禽獸と異なるとな
 かりしも近時の宣教師の感化に依りて已



サモア島の記

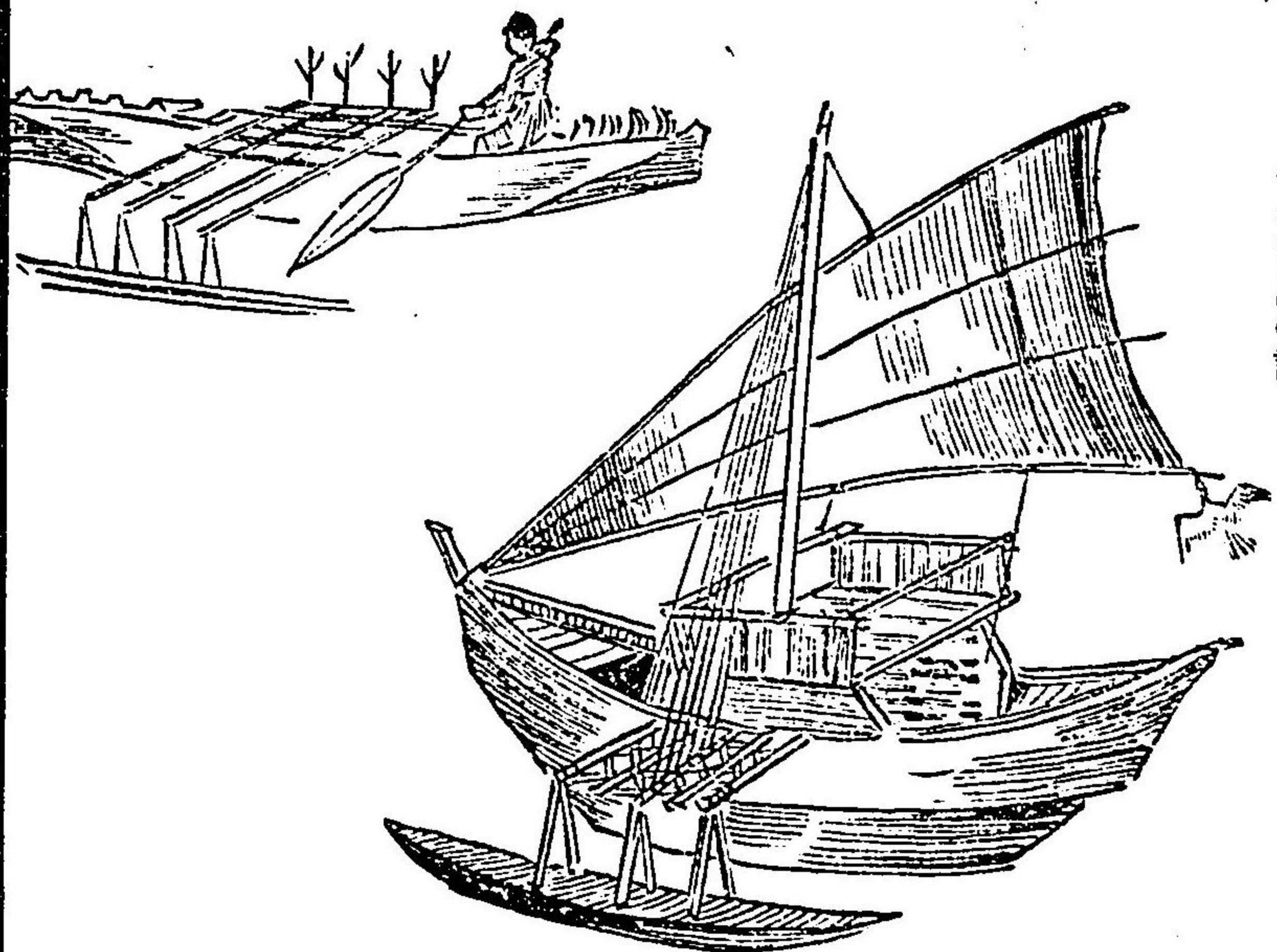
の腕に數夫數妻の名を跡する者なきに至れり抑々土人古來の風俗として妻を娶れば必ず其名を右の腕に跡し妻も亦夫の名を右の腕に跡して偕老同穴の誓を表せり故に跡を一見して其誰の夫たり妻たるを知るべし而して其の夫婦の間に兒を擧れば則ち亦夫婦共其兒の名を左の腕に跡し其の兒も亦父母の名を跡す又夫二人あれば二人の名を跡し再嫁する時も亦然り斯くの如く名を跡するは廿年前羅馬字を習ひ覺えし頃より一般に流行し今に至りて衰へずと云ふ又其身体の跡は全く衣服に換へて文るものにして恰も手套と襪を着くるが如く却て裸体よりい見苦しからず

男女結婚の期

余試みに土人に向つて何歳にて結婚するやと尋ねしと十一と答へしかど此は餘りに出放題なりと思ひしが彼等には固より暦日の記憶なければ自ら其何歳まで婚するを知らざるも無理ならず大概春心のつきし頃より結婚する者と認むるなり其後宣教師より聞く所に據れば男女の結婚期の十二三歳あり唯だ忌むべきの一事は土人最初の結婚は多く中年に至り其妻色衰ふれば之を離別し再び少婦を娶る者あり故に宣教師は百方説諭して覆水盆は返らしむるの事もあれと往々甲教會の所管地より乙教會の所管地に移りて更に娶るの弊を生ずるも

サモア島の記

第二十五号サモア土人船の圖



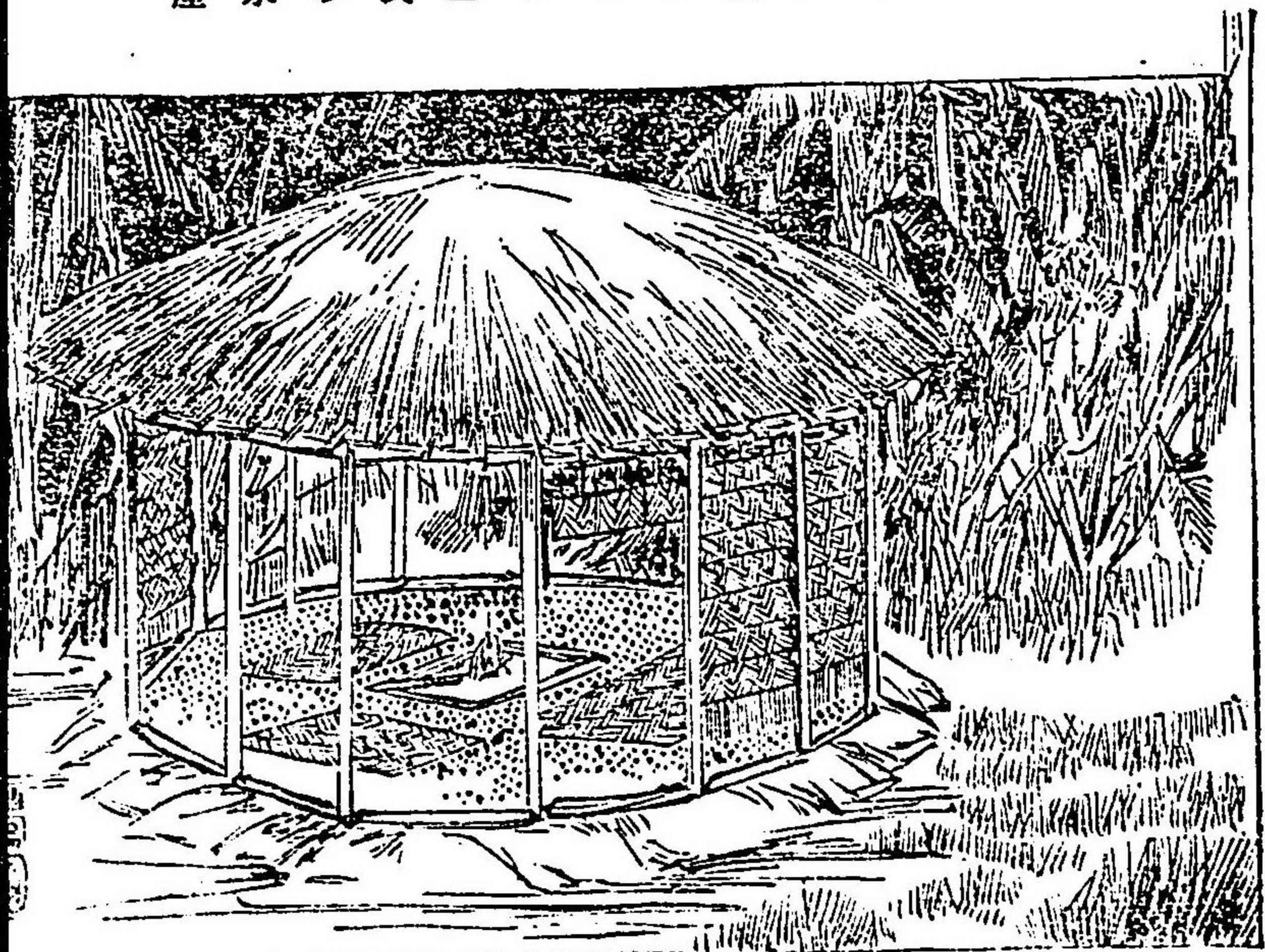
サモア島の記

困却せりと

土人の船を見るに大洋を航するに適すべきものならず然れど二三十年以前の諸島に往復せし事もあり又ヒージー嶋土人と戦争せしと聞きたるに如何せしやと余は親しく父老に就て尋ねしに古代の大船を造りし事あるも今の時々寄港する汽船の便にて諸島へ往復するを得れば非常の手間を費して大船を造くるの無用なり且近來は大船を要する程の戦争もなきより次第其の形跡を見ざるに至りしなり古代は五十人乃至百人位の乗組むべき大船を浮べてソロモン、ニウカルドニヤ、ヒー

ジー等の諸嶋も航海なしたりと此の大船は大木を空處に穿ち之を船底とし其上に材木を添へ其状恰も船橋の如く數個の船体と共に浮ぶ様に造りたるものにて其雛形今も空しく小兒の玩物として存するのみ又船を造くるに一切釘を用ひず繩にて綴ぢ固め其帆は「パンダナ」の葉にて作れる蓆として帆繩の毛にて組みたり之を作るに用ひし及物は孰も鈍角状をなしたる石斧なり其工の困難想ふべきなり又小艇の其首と尾は鰐魚の齒の如く又櫂の如きもの數基を附け積みたる荷物の容易に船の左右より海中に滑り落ちざる様に豫防せり島内一二の財産家は洋風の小型二三艘を所有し帆走として洋中へ出る事あり在島の外國人等が郵便を送付せんとする時の水平線に濠洲より桑港に向ふて航行する郵船の汽煙を認むるや急な帆走端艇にて洋中に出で之を待ち合せ互に其の郵便物を交換し郵船の寄港せず其儘別を告げ去るを常とせりと云ふ又パンゴパンゴ港内に便利なるの通船の一事あり大概日出より日没までの艦の周圍に土人の商ひ來る小艇絶えず蟻集し上陸を命じ又陸より歸艦するにも「ハンケチ」にて招けば一錢をも投せずして其用を辨するに不自由なし元來本島の錢の取引なし「ハンケチ」又「シャツ」の古物を以て土人の物品と交換するなり

第二十六圖 サモア島の民家の屋



サモア島の記

本島土人の家屋は各島土人の建築せる家屋との非常に其の構造を異なす總て通常人間の思想より起る家屋の構造は文明野蠻の別なく皆方形なるを以て常となすものなれども本島土人の家屋は限り悉く圓形の構造なり故に其の家屋を遠見する時は其狀恰も椀を伏せ並べたるの觀わり而して其構造法は先づ地面より數寸或の數尺の高さに地盛をなし其上に圓形又は楕圓形に繩張りをなし其の繩張りに隨つて柱を建て土臺を据う其柱の總て生木の技を拂ひ其儘掘立になし桁を其の枝に架し繩にて縛る（土人は繩を縛ふことを知らず

故に繩を造るは皆三ツ打或は四ツ打になせり）其より弓形の曲木を以て屋根下地を圓形に附け細木を連ねて「コマイ」をかき椰楮の葉或は甘蔗の葉を以て圓形に屋根を葺く四面は開放にして夜の戸を鎖さず椰楮の葉を以て萬籠の如くに組み其下の葉末を残して篋の如くし之を鏡の草摺の如く軒より地に垂下して雨露等を防く又家床に白石を布き詰め其上に椰楮の葉を以て網代様に編み成せる敷物（其形「アンペラ」席の如く精巧見るに足るべし）を延べ坐臥す家中は箱二三あり腰巻等を入れ置くものにて土人の外出する毎は自身鍔を帯び肌を離さず又室の中央に火爐を設く方形にして二尺許常に焚火をなし魚鳥の類を燒くの用に供す器具の箱類を除くの外は皆梁木に鉤を付けて懸下す故に天井を仰ぎ見れば草篋、蓆、鎗、弓の類より「フランコ」壺桶の如き百般の器具を懸け連ねあり、土人に食器なし椰楮の葉を以て皿と盆に換ふ偶々舶來の皿等を得れば秘藏して相誇れり又鍋釜の類更にあく唯古石油罐にて物を煮るを見受しのみ故に余等土人に興ふるに日本風に煮たる芋若くは魚類を以てすれば舌打して賞味し且何を以て製したりやと問はれ就も覺えず失笑したり且土人の小兒の如く砂糖菓子類を嗜むと甚しく之は少許を興ふるも感謝を述べて止まず

尤も「レモン」は土人の嗜む所にして「キボロ」と呼ぶ其他又「バイン、アツブル」あり土人は亦之を嗜む此は「マニラ」より舶來せしものなりと云ふ殊に奇とすべきは土人の金銀貨を多く蓄ふを以て富と云はず菓實累累たる山林隴畝を所有する人を目して富豪とす故に其の土地の廣漠なるに拘りらず各々所有主ありて路傍の一類の實も妄に摘み去るを許さず或時外國人上陸して山中に入り菓實を摘みしに依り忽ち土人の怒に觸れ打殺さるゝの奇禍又罹りし事あり其状は狂犬の噛むが如く近づく可からず（因に記す余の本島に滞在中日比叙艦の少尉候補生數名士官數名と共にバンゴバンゴ邑の山中ある村落に入りしに土人等數十人群を成し棍棒木槍等々以て襲撃を試んとせしかば士官等の早くも之を覺り避けて立歸りし事あり其後余はフアガドコ邑に在る佛國宣教師フォレスト氏に此事を語りしに師は本島内部の土人の未だ外國人に迫るの風習を脱せずと雖も其の何か土人の意に觸るゝ舉動ありしなるべしと云ひぬ依て之を聞知せしと全く候補生の一人が路傍の菓實を摘採せしを怒りて斯る振舞ふ及びたると分明したり古人國に入り大禁を問ふの格言は以て余等航海者の紳に書して可なり）又何人の教へしにや土人一種の紙を製するを知れり其の材料は我邦と

同じく梶の木を用ふ其厚きと毛氈に比すべく雨露潮水に浸して敢て破れざると布の如く汚れたる時は洗濯するを得るなり故に土人之を用ひて敷物或は腰巻とし氈を以て種々の模様を畫けり其畫くとを「クシクシ」と呼ぶ又煙草の畑あり余は現に日出より日没まで炎天に晒されて虫を拾ひ取り其の培養に丹精を盡す者を見受たり亦以て本島土人の怠惰あらざる一斑を知るに足れり而して其の煙草の製法は根本より二葉目の葉を採り來り温灰の上に炙り先づ其の濕氣を去り之を席に包み一日程置きたる後更に之を暗室に懸けて陰干よし香氣を洩らさしめず之を喫煙するは適宜に摘り取りて掌に圓め芭蕉の葉を陰干よせしものにて之を卷き「シガレット」の如くにして火を點す其味頗る強くして余等の口より適せざるなり

「ウラの事」

土人男女を問はず婚姻家督其他名譽を表すべき時より村長より花環を受くるなり之を「ウラ」と名づく之を受くる者の身体を充分に裝飾して自から船棹を手も持て其の披露に練り歩き親戚朋友の其後に附添ひ唱歌しつゝ來る其の附添人の最も多きを以て己の名譽とせりと云ふ右は付一場の奇談あり外國人上陸すれば必ず其の宿所を定むるの習慣ありて是を

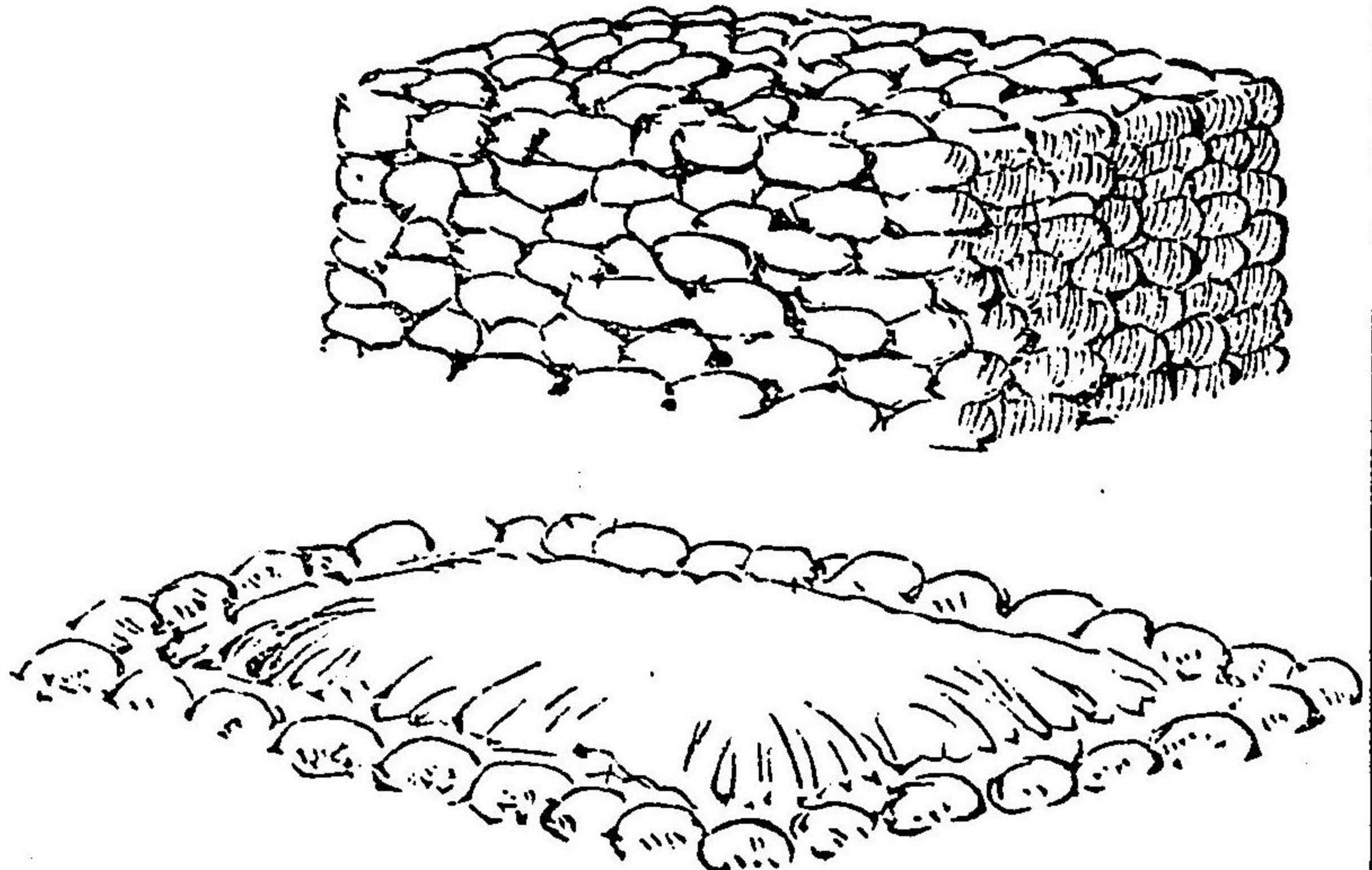
「フレンド」の約を結ぶと云ふ此約を結べは必ず「ウラ」を首に掛くるを常とす余も最初の中
 の窮屈を辛抱して此「ウラ」を首に掛け居りしかども肌は障りて五月蠅さゆゑ一寸取除き
 て座上へ置きし余と「フレンド」の約を結びし家内の者の孰も不平の体にて余も對して
 其の舉動甚だ冷淡となれり余は怪んで其故を尋ねしに土人は却て「ウラ」を脱したるは如何
 と詰りしより扱はど始めて心付き之を取除けての悪しきやと問へば土人打笑ひて未だ知り
 申されぬか此「ウラ」は終日首に掛け置くものなり「フレンド」の面前に於て之を脱するは全
 く破約を表するに當れば何卒元の如く掛けて給はれ左なき時は近隣の者共に對して面目な
 しと口説き立てられ余の迷惑ながらも罪なきに首枷を入れられし心地したるも最と笑しか
 り

神の祝並に葬式

土人は古より神なる者を知らず唯草木百菓を造りて土人に與ふる者は神なりと云ふ者あれ
 ど別に神形を造つて之を禮拜し捧物等を爲すとなし又一般の土人は喬木怪巖などを禮拜せ
 り其の式の箕踞して右の手を額に當て黙禱するなり其他大魚の怪談を説く者あり其は海中
 に大魚ありて何時か人間を食ひ盡すとあるべし然ども今日は未だ出現せず而して此魚の太

土人の頭髮

第二十七圖 サモワ島土人の墓



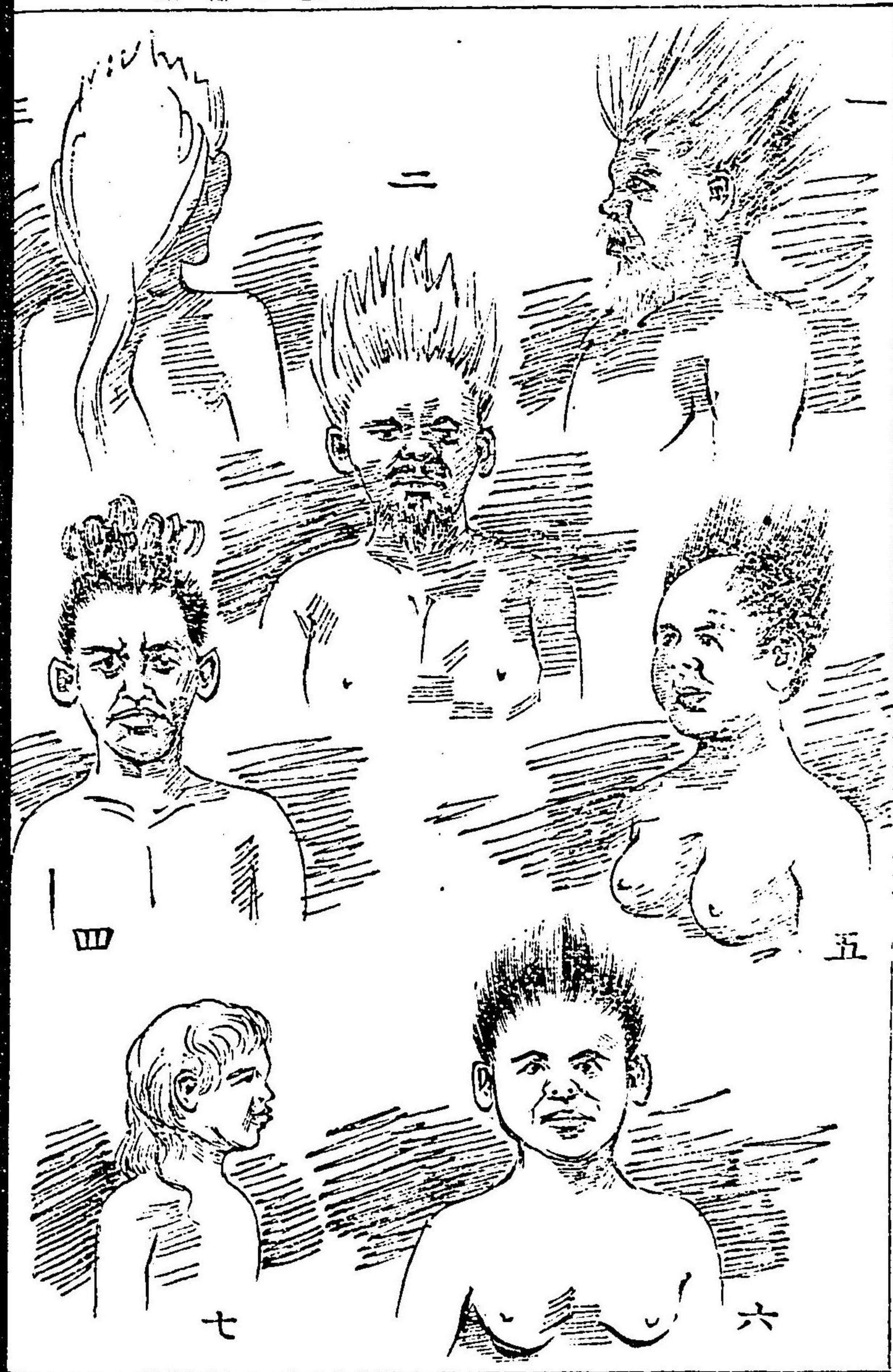
サモワ島の記

古の時代に一たび現出したる事ありと云ふ又土人
 其の死骸を埋むるを知りし四十以降の事にし
 て舊俗は水葬をなせしのみ今も海濱を穿てば往々
 骸骨の貝石混じあるを發見せり扱て又現在の土
 葬は土中を掘らずして地上に死骸を載するに足る
 べき石壘をなし其上に死骸を仰臥せしめ其の周
 圍より石を棺の形に積み築くなり往古土人の狂
 暴なる父母妻子に死別れて泣き哀む者あれば互に
 之を嘲りたるより他人の前にては勉めて其悲みを
 忍び隠したる程なりと云ふ
 余の太平洋を縦横に航行し無數の島嶼に上陸し各
 種の土人に接せしが獨りサモワ島土人に限り他島
 に比類なき一種特別の風習あるを發見せり即ち土

人の頭髪是れなり大凡野蠻は皆頭髪の風なぞ一定して種々の工夫を爲さざるものなるに本島の土人は限り様々に己の頭髪に工夫を爲すの野蠻中に一種の風習を有せるものと云ふべし之を土人の父老に問ふに本島の年月なきを以て何年前といふ事は知る能はざるも宣教師の渡來以前は土人は皆被髪にてありしが宣教師渡來後(大凡四十年以降)宗教を信せし男子の皆短髪とされり然るに女子も之を學びて遂に男女一様の短髪と開化せしを始めとして漸々に或の油を塗り或は白堊を塗りなぞするに至りたりと其重なるものを圖するに左の如し

第一圖は老人の風なり其の頭髪長さ五寸餘にして栗色の頭髪を椰櫚の油に草根の打潰したるものを混和し之を濃く塗り逆立たしむるを常とす、第二圖は壯年男子の風にして海中に生ずる珊瑚蟲の窩を取り火にて焼き恰も石灰の如く細粉となし之を椰櫚油にて煉り以て髪を堅く固め白き頭巾を戴きたるもの、如くせり然に一夜を過れば其の白堊の大半は脱落するを以て日々早朝に之を塗り固め常に皓白にして汚斑なきを以て好とす而して後頂に七八寸程の長さある髪少許を垂下す其の意味を問ふに古へは土人皆此を被り居りし事を紀念す

る爲めなりと答へたり又頭髪を垂下する風の第三圖の如し第四圖は小兒の風にして小兒の頭髪を剃せるものあり或は鬘の如く頭の前部に方一寸許髪を残し其餘は短く剪みたるあり是も同じく古代の風の少部分を残し置くものにして一目するときは面色赤黒にして蒼色の頭髪を鬘の如くに立てたる様は宛がら妖怪の假面を付けたるを見る心地せり、第五圖の妙齡の婦女に問々ある風にして日本の野郎頭の如く前部を剃り落し左右の小鬘の毛を逆立たしめ其髪の長さは五六寸程にして間々此鬘に草花などを挿したるあり或は白き「ハンケチ」を以て後鉢巻をなす者あり然るに此の鉢巻せし者の色黒き額も白の鉢巻して野郎頭なれば婦人とは更に思われず恰も日本古代の荒武者を見る心地せり、第六圖は已に婚せし婦人として其の頭髪の男子と同様に五分より一寸程は薙り居れり然れども男子の如く白堊を以て塗り立てるとを爲さず只だ椰櫚油を付けて上部へ掻き上げ毛は皆逆さに立ち居れり中の男子にも白堊を塗らざる者あれば初めて此地に上陸せし外國人は最初の一一目して男女を辨する能はざる程なり、第七圖は小女の鬘にして一目する所にては大概十歳位までの女子の皆鬘の如く頭髪を生れたる時の儘にして修めぬゆゑ其の振亂れたる様は牧馬の鬘の



サモア島の記

如く而して母の膝に臥し寄生蟲を取らする所は實に猿猴の深林に棲息せるを見るも異ならず本島の土人はアビヤ港に住するもの、外の大概斯の如し只アビヤに住する婦女などは洋風を學びて頭髮を束ぬるあり或は組みて長く垂下する者あり然れども此等の執も外國の出嫁人に養はれたる妾婦又は奴婢などにして土人の群を脱せしものなれば衣服も袖あき上衣と袴を着し左のみ醜からず斯る洋風を眞似居る者は僅々數十人あるを見たるのみ

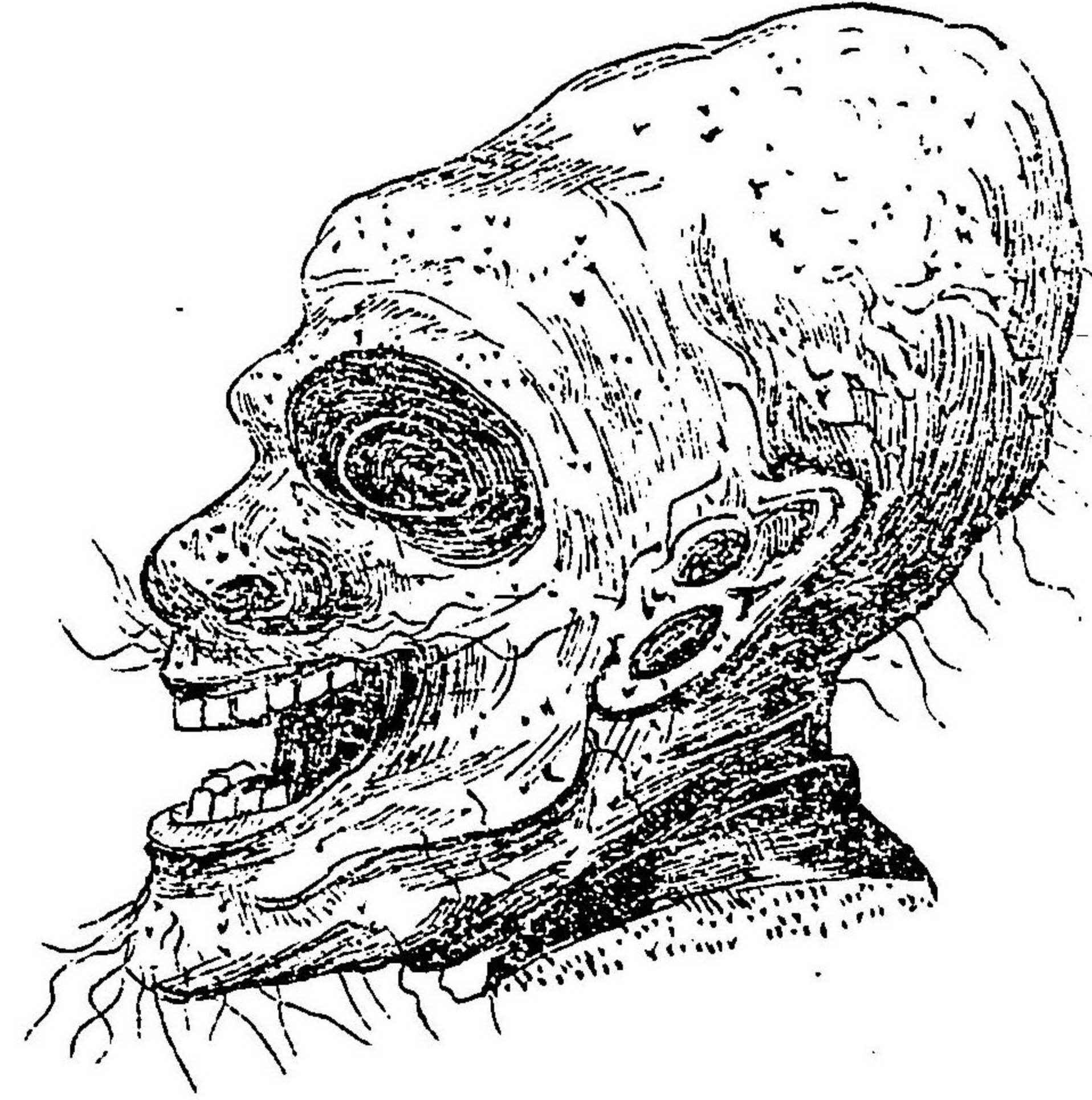
人體を以て製したる飾物「タンブア」

アビヤ港に今を距ると十五年前に獨逸より移住したるコルチー先生と呼べる大醫あり余は其名を聞き訪ひたるに先生の最も懇切に植物動物等の事を教へ呉れたり扱て先生の住居は普通なる西洋風の建築なるも其の内部は土産の敷物を延べあり又門前屋後へ栽るに種々の奇草異木を以てしたれば四時花を見ざるはなく殊に其書齋の如きは大氣清涼にして坐臥体に適するを覺ふるなり先生は目下南洋群島の博物誌を編纂中にて今より二年の後に大成の見込なりと云ふ而して其の書齋に於て下圖の如き男女の飾首を置くを見て余は大驚きつゝ其の來歴を聞き得たと左の如し

今を距る數年前までは本島並びにニツカルドニヤ島ソロモン島の土人の此の飾首を一個に

サモア島の記

第三十節 飾り首ノ圖

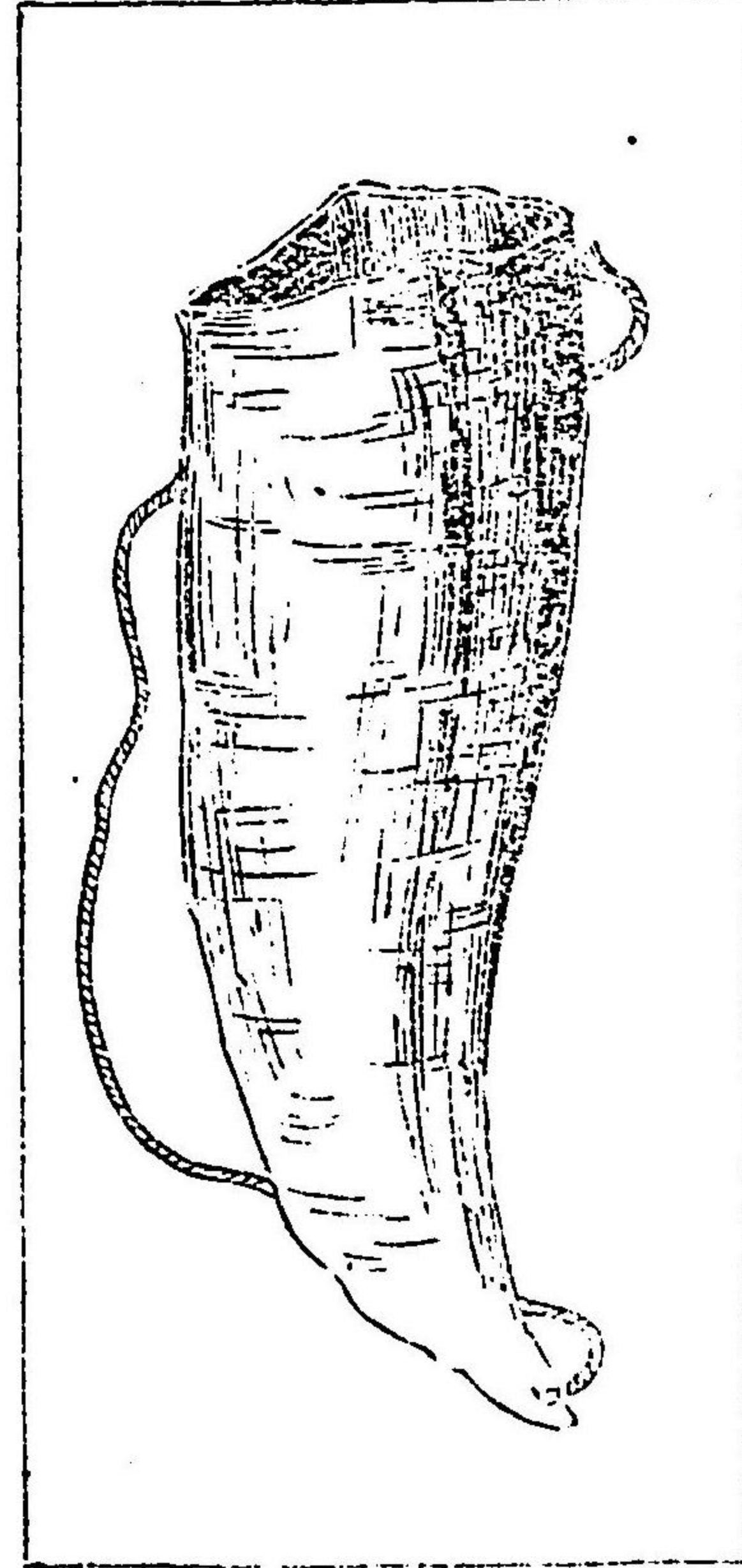
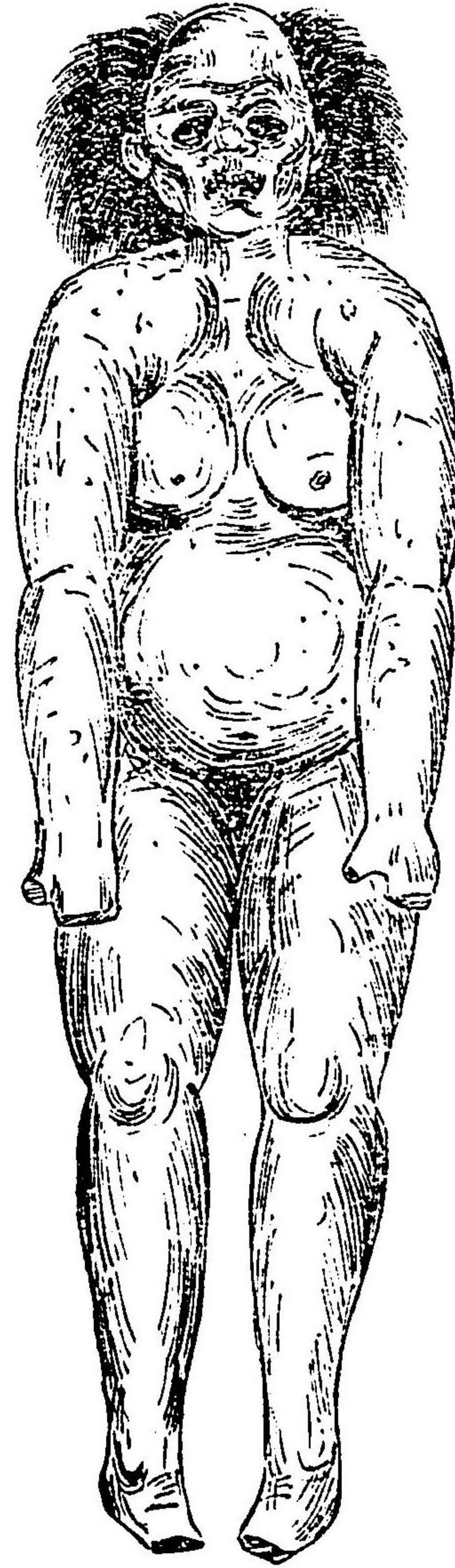


サモア島の記



二百三十一

第二十九節 アナンタ及ミラノノ圖



サモア島の記

二百三十

ても多く所持するを以て名譽とし恰も勳章と同一の價直を有せり其の飾首を置くの位地の
 恰も我邦の家屋に於ける承塵の釘隠しと一般なり又全身を干し固めたるものを座の一隅に
 立たせて飾り置くなり曾て聞く全身の飾物を製するに其の材料とする捕虜を生きたがら
 んとして其の背部に二本の棒を當て之を縛り付け林中に乾きたる砂を以て小丘を作り其上に
 之を仰臥せしめ野蟻の餌となす日を経るに隨ひ右の捕虜の野蟻の爲めに其の身体の膏血を
 吸ひ盡され空しく枯死して皮骨のみを餘すに至る其の慘酷の狀の思ふもなかく愚ふこそ
 (前)圖せる全身の飾物の女子にて製したるものなり)又此飾首の即ちニツカルドニヤ人の
 作にして其の製法の概略を記るさんに先づ其首を斬りて林中の蟻多き所へ砂を盛りて其首
 の膏血の滯りなく落ち枯る様にして首を按置し例の蟻に漸々其肉を喰ひ去らしむ而して
 蟻をして其の皮膚を傷けざる様と晝夜其側に番を置き首の斬り口より肉のみを喰ひ喰はし
 め全く其肉を喰ひ去りたる空洞への椰櫚の皮毛の間に含みある「キルク」様の粉を探りて
 之を詰め元の容に稍々似せしむるなり土人の之を大赭色に染むるは「ククイナット」樹
 の液汁を絞りて染む試みは手を以て染めし上を撫づれば恰も雨濕の爲めは強ばりし靴の皮

の如し又其膚は一面に針穴の如き小穴ありて染汁之に浸込み無數の小點を成せり土人の捕
 虜となりし者が此飾首を製せらるゝと當り其命を償ふの一法あり彼の「タンブワ」と云ふ
 ものなり是は逆戟鯨の牙にして是を一個會長に献ずれば赦さるゝなり古來の慣習として此
 「タンブワ」一箇の三人以上の土人の命を償ふべき價値ありと云へり右の「タンブワ」は全
 く土人の部落間に通用する最貴貨幣の一にて結婚の結納も之を用ひ「タンブワ」なけれ
 ば終身娶るを得ず而して此牙二本を有せる逆戟鯨は猛烈無二の魚にして之を捕ふるより殆
 ど龍鬚の珠を探るよりも危険なりと聞く余は右の「タンブワ」を購ひ求めんと欲して百方
 搜索して漸く一個を得て歸朝の土産とせり

聖馬利大寺觀

南洋群島にて有名なる聖馬利大寺觀の中心に在りて佛國宣教師四名之に居り其
 の首座の一名は目下羅馬の大會に赴きて不在なり宣教師の孰れも慈仁に富みて土人之を
 愛慕すると父母の如し余のアビヤ港に碇泊中一日各教會を廻り四字の堂を巡拜したり市中
 の西端に童貞院即ち尼寺あり土人の生徒七十名あり教師自ら案内して其生徒を養ふが爲め
 又開拓せし田畝を一覽せしむ其の蒸畝は高丘平野に亘り盡く香蕉を種う菓實四時斷えず遂

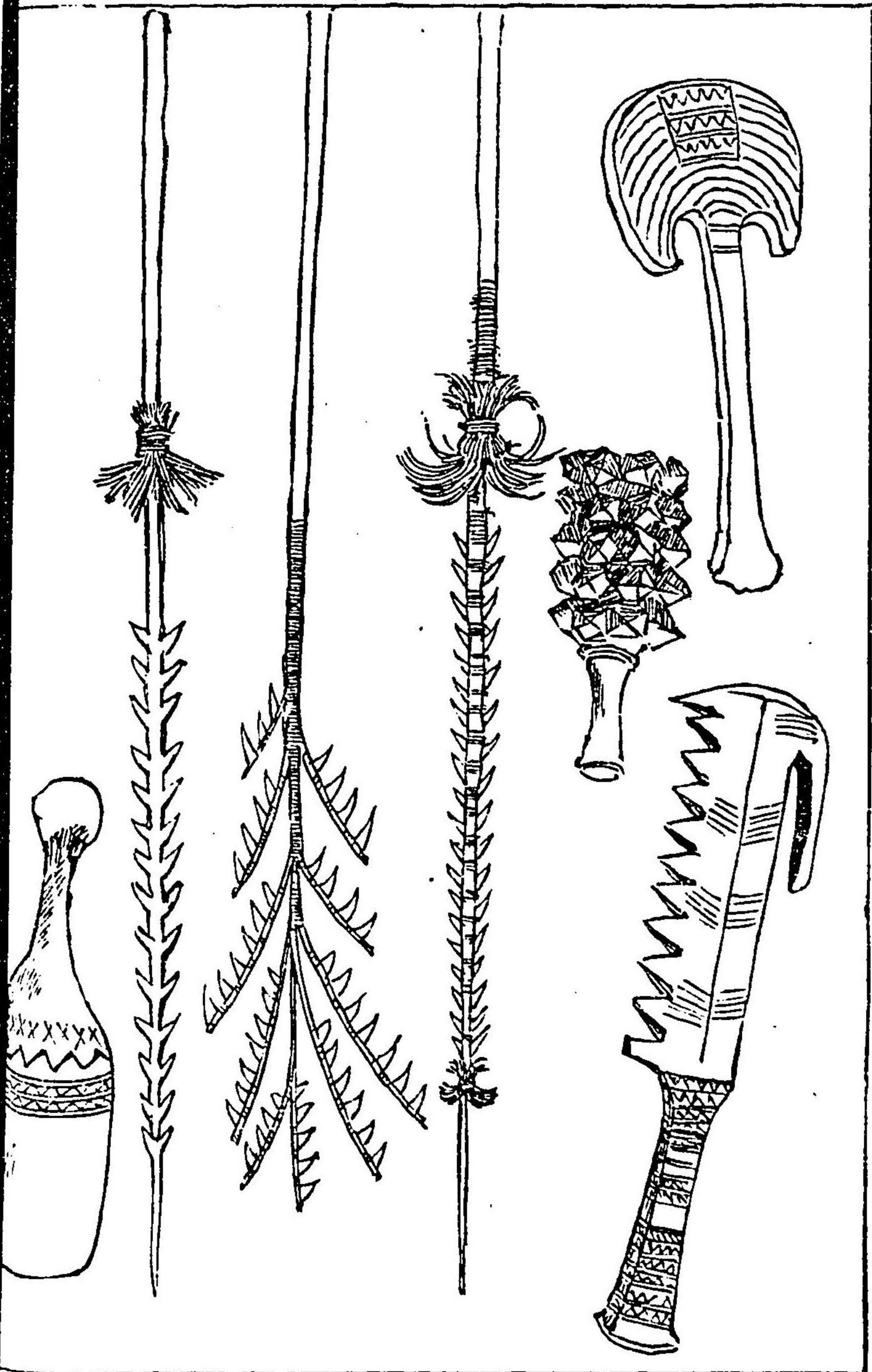
りて水田に至れば芋葉繁茂して一望際なし凡そ四哩の面積ありと云ふ更ふ山上に登るに美麗なる堂宇あり緑樹環繞して涼氣衣を襲ふ下と少許にして聖母馬利亞の金像（銅製にて鍍金なり）を建立す像の前に一口の噴水あり其高さ丈餘に及ぶ朝夕に土人の供する花卉異香紛々たり其より芭蕉叢裏の小徑を下り尼寺の裏門に達せしに四壁天井其他廊階に至るまで悉く鐵木（土語「ヤカ」と云ふ）を以て之を作り其の光澤人目を眩せしむ又白鶴あり馴れ飛んで行人の肩に止り暫く去らず更に二大講堂を見る又教課頗る整頓せり其北に耶蘇の像ありて記念碑の上より立つ高さ一丈五尺餘（銅製鍍金）にて宏壯偉麗稀に見る所のものなり余は扇子を教師に贈りしに大に喜び永く日本人参詣の記念とすべしと云へり今夕馬利大寺觀に至り「カバ」を纏せらる其の信徒は顔容柔和にして頭髮黒く亞細亞人種に髪髭たり、又余はバンゴバンゴにても天主教會を訪ひし土人の信徒九名居りて可なり教育を受けたるもの、如し此教會の近傍に幅三尺許なる平坦の道路を作り之を沿ひて人家あり小市をなし其正面に教會堂屹立するも工事未だ落成せず其の工事は宣教師自から土人を使役し着手中なるが全く竣工までには二年餘を費すべしと云へり扱て其の其建築法は土中より埋没せる珊瑚礁の碎片海水と土の爲め「セメント」の如くなりたるを採り砂石に混和して用ふるなり恰かも螺螺砲の貝殻を造ると同一の理法に依るものあれば其の堅牢精緻なる知るべし右の教會堂の即ち學校にして堂の南に七間の大家屋あり此は未婚者を置く所にして男女を區別したるの土人の別を知らしめんが爲めなりと聞く

古武器と刑具

土人古來の武器には抛鎗と杖鞭との二種あり今は其形を模造して之を賣ふ來遊の外國人其の奇異なるを喜び争ふて買ひ求め土産物とせり古は石或は貝にて之を作りしゆゑ一本の武器も亦ても非常の高價なりしかども今は器械に不自由なく容易に之を模造するにより其價も低廉にして一本「シルリング」位なり然れども古への實戦に使用したる武器の如きは土人も亦之を貴重して外國人の手に渡すを欲せざる由又人の背を横に打つ刑具の杖あり鐵木を以て造る其頭大の一尺五寸、中は一尺、小の六寸あり大杖は打たる者は死刑なり中杖に打たる者は半死半生となり小杖に打たる者は大抵は不具の身となると云へり（因に記す刑罰は其他は終身幽閉の刑あり暗黒中を投じ置き死に抵るまで出すを許さずと聞けり）

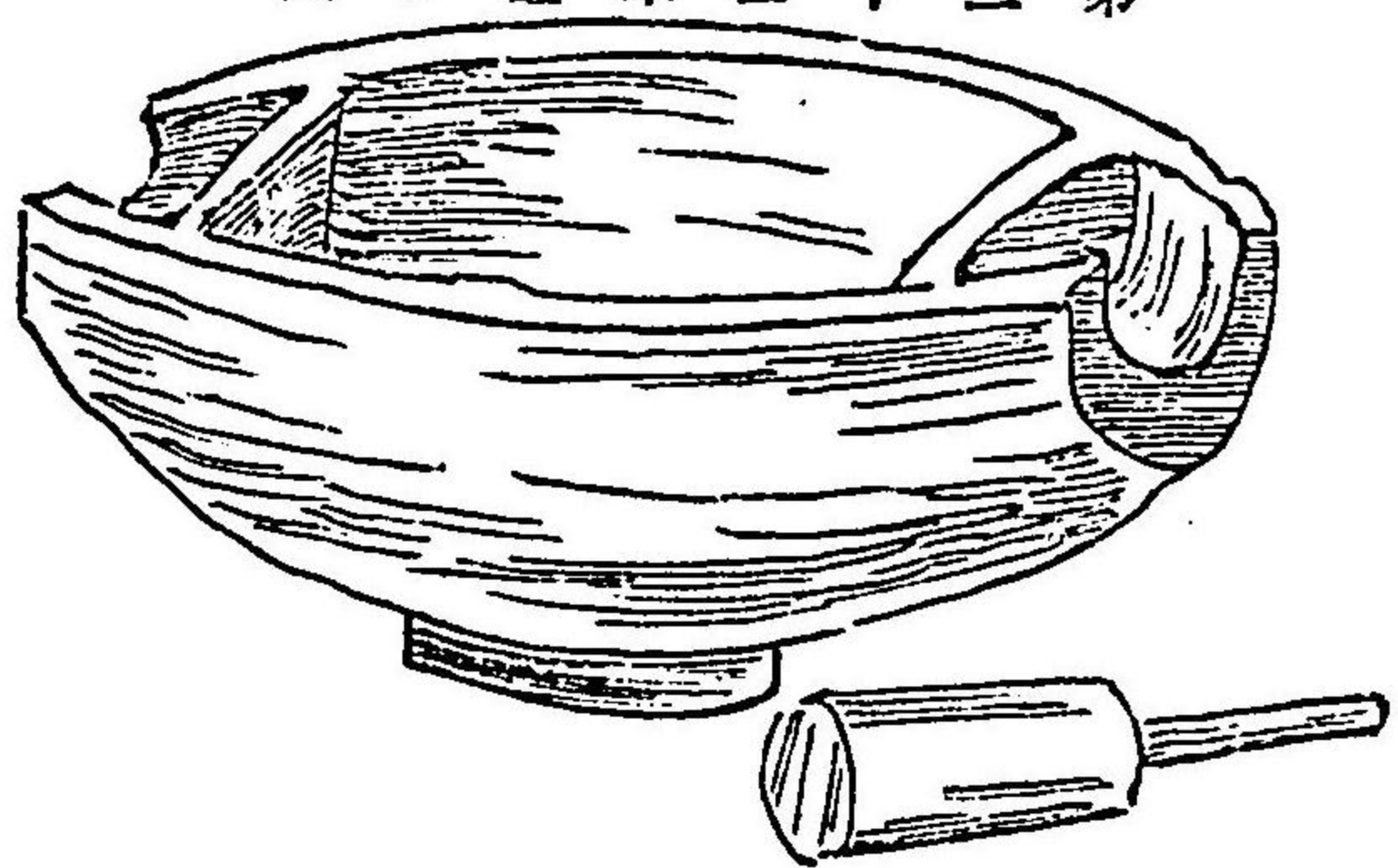
木鐘

本島土人の木にて一種の鐘を作る之を「ロンゴ」と稱せり其製の大小一ならず大なるものは



サモア島の記

圖ノ鐘木二十三第



長さ七八尺幅二尺餘小あるものは長さ二尺幅七八寸あり古は之を作るに火に焼き貝或は石を以て作れる斧の如き及物にて焼炭となれる部分を掻除きて空洞となせしも近年は刀或ハ鉄槌等に削りて作れり其形は第一圖の如くにして其の材料ハ重に「ヤカ」と稱する木を用ふ此木は我邦の楠木に類せるものにて其質堅緻能く久しきに耐ふ之を第二圖の槌(土語バカと云ふ)にて打つときは木魚の如き音を發し其響は一哩以外又達す本島の酋長は孰も此木鐘を所有して戰時或は總て衆人を招集する時に之を亂打するを常とす又當時は天主教會の庭前にも之を備付ありて日曜日なると信徒を集合するの用に供せり

「カバ」の禮式

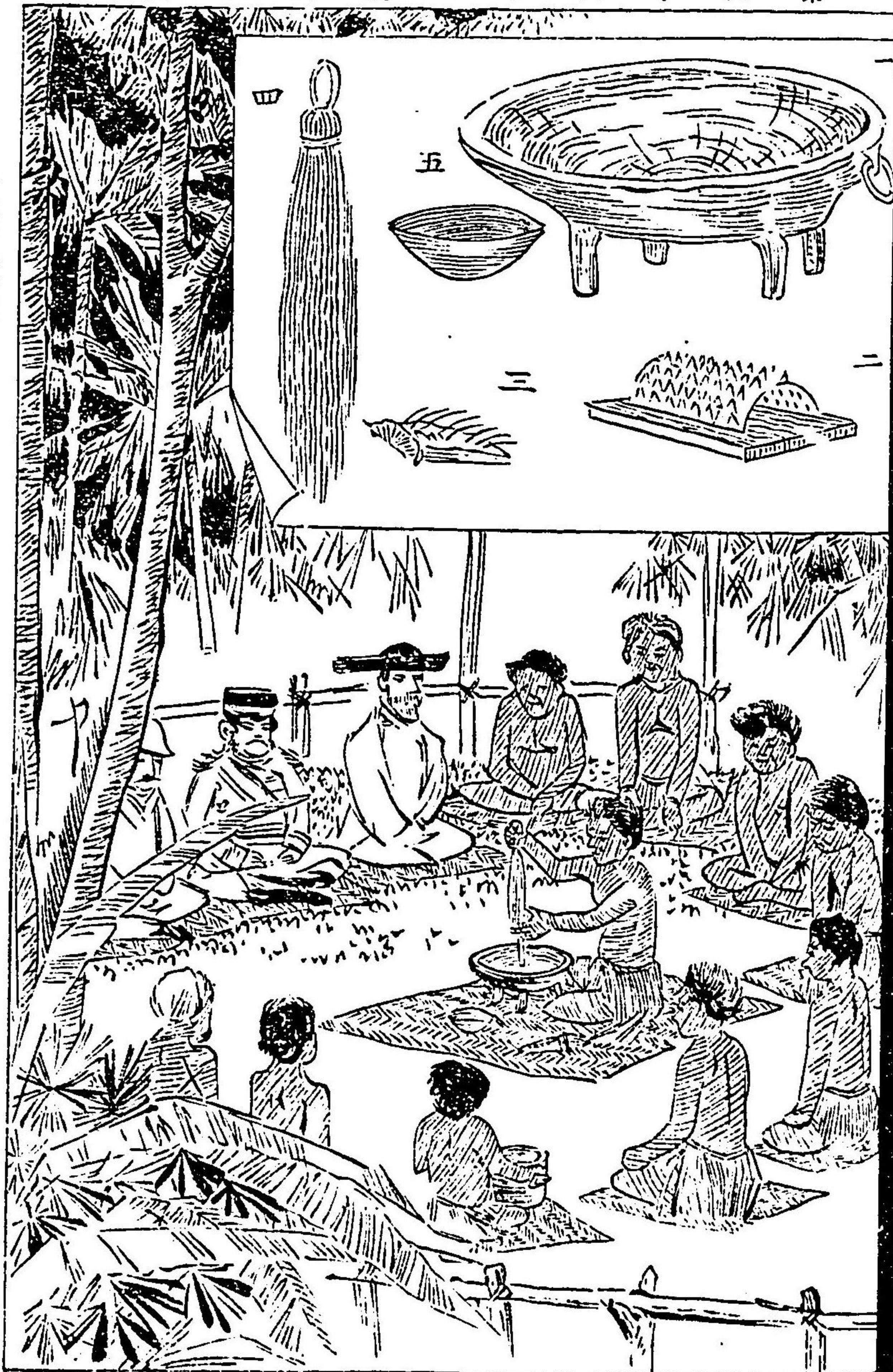
本島土人は「カバ」と云ふ飲料を嗜めり之を飲むに禮式ありて其の禮式は我邦の茶の湯の式に似たり今其の由來を聞くに古代婦女を掠奪し來る時とか或ひは戰ふ勝ちたる時又ハ他の部落に侵入して食料又すべき奴隷を虜にし來る時に祝意を表する禮式なりしと然れど今ハ

サモア島の記

珍客を饗應し或ひは日曜日「クリスマス」、元日等を祝する爲めに用ふ却て説く今を去る大凡四十年前までは土人頗る猛惡にして未だ教法の化を受けず弱肉強食の活劇を演じ他の部落を襲ひ虜となし來れる者ハ之を繋ぎ置て日々一人或ハ二人を死して食ひ又婦女の容貌美麗なる者あれば之を奪ひ來りて女奴となす其愛せらるゝ者ハ他人の肉を喰ひ日々唱歌踏舞して主人又媚ふるも愛衰ふるどきの忽ち石にて打殺され豊肌空しく盤中の餐も上る故に腕力逞しき者は常々一部落の長となり虜囚數百を常に繋ぎあるを以て其の財産とし富有は誇れり其の男女の獲物ある毎に此「カバ」の禮式を舉行せしものなりしが斯る慘毒の蠻俗は已に消滅して此の禮式獨り存し却て優美なる名譽を南洋中に傳ふる如きは抑も亦一奇ならずや而して其式を用ふる道具及び其式の概略の圖の如し

第一圖の「カバ」の粉を水に混和し飲料を製する鉢とす其木は「イフ」或ハ「フヒレ」等の樹にて作る其木の質は我邦の「タガヤサン」に似て一層緻密なり其大さは徑り一尺餘もありて形は我邦の木鉢又四本の足を附けたるが如し其鉢を「カゴワ」と稱す古きものは數百年の時代を経て家に傳へ之を使用すると云へり又土人の之を作るには貝と石にて穿り作るものなれ

第三十三カバ禮式ノ圖



ば其の一個までも全く成るまでの數ヶ月の時間を費さざるを得ず故に大切之を保存し戦争の時などにも此の木鉢を奪ひ來る者其者の大将を縛り來ると同一の恩賞に與るなり此器は我邦にて古への武士が甲冑を所持すると同様の重寶にして一部落の長とある者は其の家柄よりして必ず之を所持せざる可からず戦争等の時に此器を奪ひ去らるゝときは非常の恥辱にして爲め一部の大長たる神聖の權利を失ふと恰かも支那傳國の玉璽と一般なり故に一度敵に此の重寶を奪はるゝは於て必ず身を抛つて再び取戻すを常とす遂に取戻す能はざるに至れば自ら慷慨悲憤堪へず慟哭して海に投じて死すと云ふ然れば此の重寶に一々由緒あり何家所持の「カゴツ」(即ち木鉢の名)は古來著名の英雄誰々より相傳せるものなりなごゝて人々評判する事なり扱て此木鉢にて「カバ」を飲むの禮式を舉行するの概略を記さんに先づ一番に此の木鉢を其席に持出すときは客は異口同音に之を賞揚して置かず以て主人は對するの禮とせり其譽め言葉は「バヒカイ(有難う)イヤウ(賞める時に用ふる語)ウクウク(黒さ)レレイ(寶)カゴツ」(木鉢)と云ふなり其義を意譯すれば誠にハヤ立派なる御道具とて製せられし飲料を頂戴致し大慶至極に存すると云ふに在り又主人は賓客の譽め

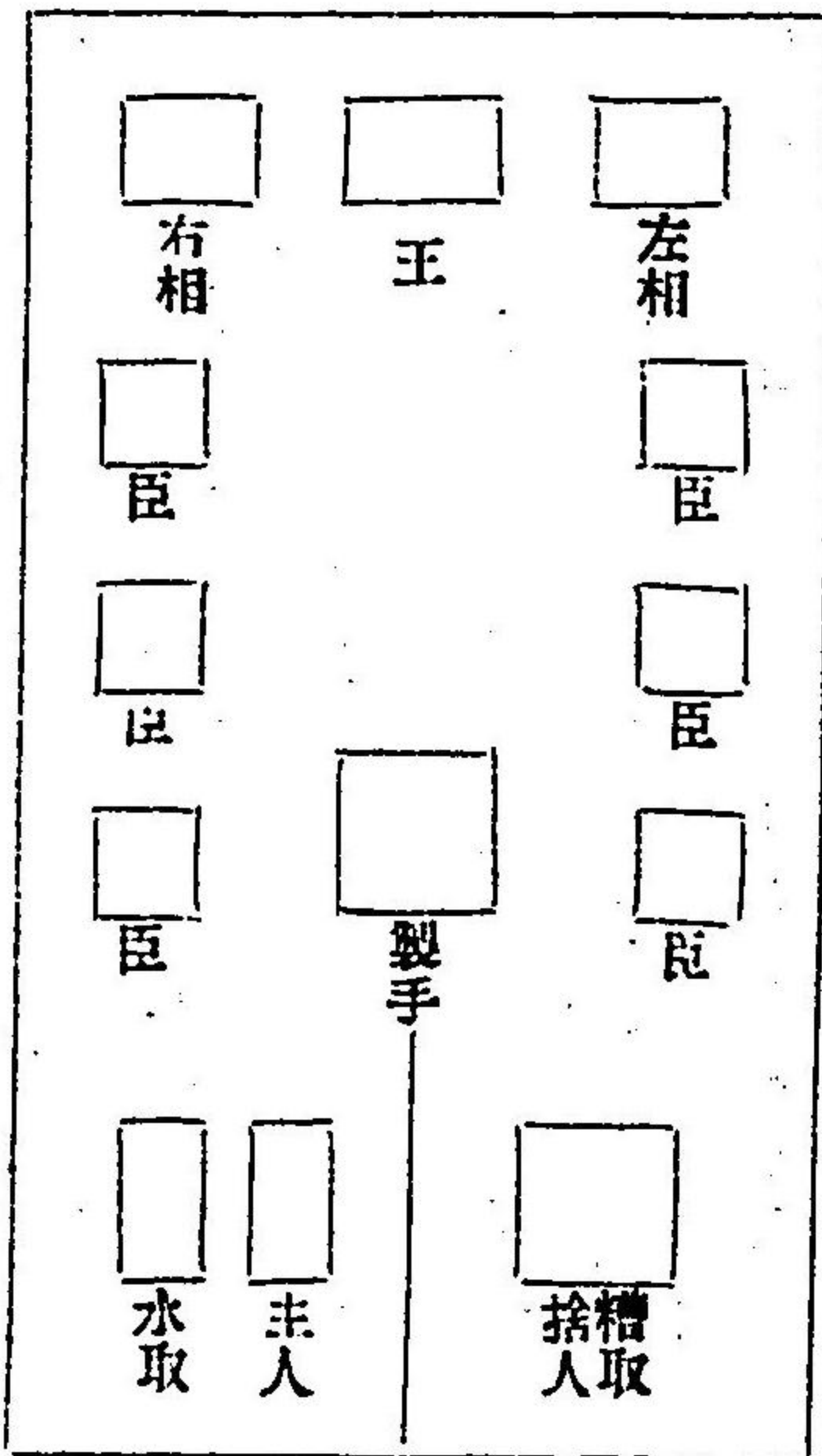
言葉に満足し之を撫でつゝ誇り示すを以て禮とす又此の木鉢の年久しく使ひ込みたるもの内部は「カバ」の脂にて恰も眞珠貝の如き光澤あり我邦の茶人に見せても随分愛玩すべき價値を有せり、次に第二圖の器を持出すは「カバ」の乾したるものを粉末とする器にして其使用法の恰も我邦の山葵卸を使用すると同様なり、次に第三圖の「カバ」の根を持出す此圖は即ち「カバ」の根を日に乾したるものにて之を第二圖の卸道具とて卸すときは細末なる粉となる此「カバ」の粉を水に入れば其水恰も白酒の如き色と變化す但し飲むときは皆其粉を漉し取り只白き汁のみを飲むものなり即ち之を漉し取るに第四圖なる恰も我邦の茶釜を房にしたる如きものを用ふ其の材料は蔓草の皮を剥ぎ取り之を麻を晒す如くに晒し細裂して作りたるものにて之を以て「カバ」の糟と水とを漉し分るときは糟は皆此房の毛の間と止る故汁の中に糟を混する憂ひなし又糟を漉し取りし後の此房を以て柄杓に代用するなり其の仕用方の此房は充分汁を含ませ第五圖の椀に絞り込むなり又第五圖の椰楨の核にて作れる杯にして此杯も成るべく古物を貴び其最も古きものは非常の高價にて賣買す且つ主人が此杯を持出して賓客に示すときは賓客は同音に之を「レレイ、ウバツ」と呼ぶ即ち立派な

る杯よど賞め稱へるなり其時主人も亦意氣揚々として之を座中に誇り示すを以て禮とせり
 想ふに我邦の茶の湯の式も或は南洋の蠻俗の傳來せしものなるべく恨むらくの千の利休を
 地下と呼び起して余が一場の演説を聴聞せしむる能はざることを呵々」扱此「カバ」の味の微
 しく苦味と辛味を帯び頗る口腹を爽かならしむるの効あり（同島に滞留せる獨逸國の醫師
 コルチー氏は此「カバ」を評して曰く暑氣を拂ひ胃を健にして熱帶地方に缺く可らざる飲
 料なり然れども此の飲料の製して三時間以内は飲むべし三時間を過ぐるときは少しく酸味
 を生じ飲む者をして泄瀉を感せしむと云々）余も此根を求め自ら製して常々飲用せしが實
 に能く渴を療し胃を健にす最初余バンゴ港に接近せるフアングドゴ部落の天主教會
 まで佛國宣教師ホレスチー氏より之を傳習せり凡そ島中に住居する者は土人と外國人の別
 なく家毎に「カバ」を貯へざる所なきを見れば是れ亦熱帶地方の清涼散とも稱すべし決して
 之を尋常の遊戯視すべきにあらざるなり

是より「カバ」の禮式の事を説くべし余が此の禮式に與りし十一月廿六日にして明日愈々
 バンゴバンゴ港を出帆する筈なれば鮫島金剛艦長の余を通辯として佛國宣教師ホレスチー

氏宅へ告別の爲め赴かれしに同師の大に喜び種々饗應の末ロアと云ふ村に連れ行き同村の
 酋長宅にて休息したりホレスチー氏の日本帝國軍艦の艦長來臨せられたる旨土人に傳へ
 ければ土人の喜び大方ならず爲めに近隣の人々をも招待し有名なる「カバ」の禮式を舉行
 せり此酋長はホレスチー師の一番弟子にして少しく教育もあり殊に教理に通せるを以て師
 も特別に愛顧を加へ師の數年前まで自ら住居せられし宅を與へて住せしむる程ありと故に
 其の内部も存外に清潔にして空氣能く流通し途中の苦熱を忘れたり兎角する内席の成りし
 旨報知ありしに付き設けの席に行き見たるに圖の如く席を正し座を就かしむ

第三十四カバ禮式の圖



製手は「カバ」を
 飲料に製するの役
 なり

此時王位は在りし鮫島艦長、右相は余、左相は佛國宣教師ホレスチー師又臣の座に就きしは土人にして同村の學校教師等なり座定まるとき製手役出で来る主人命じて座に就かしひ製手座に就て手を拍つと四五次大に呼んで曰く「カバ」今より製し候と此の拍手の後は一人も語を發せず黙して只其手並を見て居るなり此時止むを得ず用談する事あれば低聲にて囁くのみ妄に笑語せざるを以て禮とす扱て「カバ」を製する役は當りたる者は彼の第二圖の器を第一圖の器の上に架して之を据ゑ第三圖の「カバ」の材料を其上に置き庭に出で恭しく水浴し身を淨めて入り來り笑踞し手を洗ふと一度其手を洗ふが爲めに水取役をして水を入れたる桶様のものを持ち來り客の前にて手を洗ひ右終つて「カバ」の根を卸し初むるなり已に悉く粉となる時即ち之を第一圖の器に移す之を見て水取役は第五圖の杯にて客の數に充る丈の水を第一圖の器に汲み込み能く混和して其水の米磨汁の如く白色を爲すを度とし手を出して糟取捨役に向へば取捨役は第四圖の房を探りて居ながら投ぐるを製手の手は受けて之にて糟を包み絞る乃ち取捨人之を捌きて房の中に含蓄せる糟を落し又製手に投げ渡すと始めの如く再三の後木鉢の中は糟を見ざるに至れば謙んで之を主人に報す主人

の手を拍て何にやらん土音にて歌ふ(蓋し「カバ」は成るの義なるべし)一同之を和し皆手を拍て同音に右の歌を誦ふて後膝を打ち手を拍つて満足の意を表す此式全く終て主人は笏様のものを手は採り立て童子を呼ぶ童子來りて命を待つ主人は其時「今採りて王は獻せよ」と命す童子の例の杯を持て製手の前に立てば製手の彼の房即ち麻を束ねたるものに「カバ」の汁を合せて之を杯に絞り込む童子兩手を以て王位に在る人の前へ捧げ至り兩膝を地に就け跪きて之を奉る王位は在る人左右の手にて之を請け呑み終つて之を童子に授く主人又右相に勸めよと命す童子命の如くに行ふと順次あり遂に總客飲み終りて其殘餘を杯に移し以て主人に與ふ主人受けて呑み終り賓客は向ひ「豈佳ならずや」の語を發すれば一座同音に聲を揚げて「レイアイ」と呼ぶ至極結構と云ふ事あり此時一同主人と共に互に「カローハ」と云ふ事を誦す互に相祝するの義あり是よりして火を持來り煙草を喫し初めて常の如く雜談を爲すに至れり鮫島艦長も意外なる禮式を見たるを喜び深く感謝の意をホレスチー師に述べられ余も共に告別して歸艦したり

土人の言語

サモロ島の記

本島土人の言語を有すれども文字なきを以て羅馬字にて之を綴る今其言語の一斑を左に掲

トベシ

カシ	一	ロア	二	コル	三
フアー	四	リマ	五	オゴ	六
フイク	七	バル	八	イバ	九
シフル	十	シフルマルカシ十一	十二	ロアシフル	二十
セラウ	百	カマー	父	キゾー	母
ラウソ	兄弟	コアガゲ	姉妹	ケイゲ	娘
カガカ	人	カマー	男	ナワ	女
マナバ	夫	マフワメ	妻	マクワ	老人
アイキ、	稚兒	ウル	頭	マカ	額
イシヨ	鼻	グク	口	ニフ	齒
ラウラウハイバ	舌	ラグク	唇	カリガ	耳
アラフアウ	類	アバ	髻	オウア	脛

ソ、	乳	カウアウ	肩	リマ	手
リマカマ	指	モクア	爪	リモ、クア	拵指
リマカマ	人指	コア	脊	マガバ	腹
バエ	足	アロヒバエ	足首	リンマ	手首
ラウル	毛	ブケ	臍	ラアー	大陽
マシガ	月	フホク	星	サペー	海
ワラ	道	ワイカフヘ	河	スワバイ	海水
キグ	雨	ナビリ	風	ベアオ	雲
ポー	雷	パアヒ	電	アツヒ	火
ワイ	水	ラーウ	木	コイ	金
バラパーラ	土	イエ	白	イエモーム	赤
ウクウク	黒	エヌエヌ	黄	ブルブル	青
アウリ	正午	クラコ、ヤウ	昨日	クラゾカヤウ	明後日

モガ、ヒ	一昨日	ルアサウ	今日	カヤウ	明日
アツフヒ	夕方	カイアウ	朝	ヨレ	鼠
マウガ	鳥	ラーゴ	蠅	ロイ	蟻
バア、	蟹	オーチ	羊	マイレ	犬
フシ	猫	ソヒア	家	フラ	敷物 <small>(草にて編)</small>
シヤツブ	敷物 <small>(紙にて製せる)</small>	グワカ	黄色の金鳳	ニユー	椰梢
アソ	枕	クシクシ	縞	オツフエー	竹
アルウ	麵麩樹	アイガ	橙	キホロ	檸檬
ブラツク	魚	モアー	鶏	フラアマアー	鶏卵
フチアラウ	菓物	イエフルフル	木綿	イエシリツカ	絹
ロンゴ	木鐸	チヨウカ	砂糖	フアラ	鳳梨
ブレ	貝	グルラ	小舟	フラーラー	大船
マヤ	網	カ、ウ	文身	パイ	薬

マイ	病氣	アエクバ	水腫病(足部の)	クアピオ	疥癩
カレ	肺病	ワバコー	百日嗽	キ、ビ	刀痕 <small>(腫物を避くる爲め、肌に刃痕を作る)</small>
ラーソミ	臘臍	コモグ	しやくり	カレ	咳嗽
エエイ	おくび	フアマガ	欠伸	ソロソロ	手巾
コグ	焚く	イヨエ	然り	モエ	寝る
ワラ	起る	オゴフ	坐する	アカ	笑ふ
カギ	泣く	アボク	與へる	アウマイ	下さ
オキ	死	ソバリ	生れる	ケンマガワイ	好む
ケンモツチ	嫌ひ	サウヤ	來れ	アルベレイ	去れ
アーイ	食ふ	イグ	飲む	レイ	宜し
レアガ	宜しくない	レレヲ	熱い	バラギ	呉れよ
アポー	早く	レリマカウマカウ左		レリマカウガマレ右	
ルマ	前	クーン	後	フアレフアレキムお通りあ	

バルク 貫つた カロツフア お早う ゴーフハ 左様なら

パヒカイ 有難う ペロベカ 玻璃 ラグロアハ 草色

土人の踏舞

本島土人の踊は「ムリバイバイ」と云ふ其意味ハ柳腰を春風ニ動揺すると云ふ義にして野蠻の常として随分猥褻なる踊の手なれども總て風俗を観るには歌舞を以て第一とするものなれば左に記載して其一斑を示すべし先づ服装より説かんに頭部ニ忍草ニ類せる葉をもて作れる輪を冠り其葉の長さハ垂れて肩に至る其翠亦す葉の中ニ紅白の花を挿み頭髪を蔽ふて見えざらしむる程なり胸部或ハ首ニは貝を以て綴り成せる珠數様のものを纏ひ腰部にハ草或ハ葛籬等の皮を以て製せる我邦の平麻の如きものにて作れる腰篋を帶ぶ其長さハ膝に至る程なるが殊ニ猥褻なるは其腰篋は極めて解け易く結び付け踊りの最中ニ解けて地に落るを主とせる事なり而して踊子の常に未婚の處女にして常頃十七八歳の眉目美しき者を選み少くとも十人程雁行に立ち左手の拇指を右手にて握り出来るなり見物人老若男女ども一同に聲揚げて先づ喝采し其美を賞めて止まらず其の調子を取り樂器を打ち始むるを待てり又其の樂器と云ふは土語ニ「ロンゴ」と唱へ「カーガル」と稱する大木を長さ三尺程ニ切り其内

第三十五イマイイ踊ノ圖



部を空洞にして之を打つときは恰も木魚の如き音響を發するもの一つ又是れと同様の製として二尺程の物一つにて程好く大小鼓相和して打つ其の調子の恰も曲搦きの白の調子に似たり扱て其樂を始むると同時に見物人は皆一齊に聲を擧げて地歌を始むれば踊子は圓の如くに兩手を伸べ或は縮めて胸に當て而して左手の拇指を右手にて握り締め或は開いて左右の足を揚げつゝ代るゝに足踏みを爲しつゝ踊りて回る中に腰部の箴は漸々解け始むれば人々手を拍ち一層聲を勵まして歌ひ踊る者の一層体を動かし足を揚げて踏舞し遂に腰箴をば振落し全身裸体となり見物人の前に迫り來り少しも恥る色なし此時我が金剛艦の士官も見物せしが流石に驚き避けて去らんとせしに踊子は却て面白きと思ひ跡を追ふて來り殆ど捕へんとするの勢ひに士官は益々避易し堂々たる日本帝國の武人が敵に後を見せたりとて歸艦の後大笑となりし今其の踊の地歌二関と左よ掲ぐ

あうゑ　れ　ふわわ　むり　はらばら　あうゑ　れ　ふわわ　むりば
 おれ　あさ　ささ。　おれ　けいげ、

らばら、　れ　いゑ　おれ　けいげ　おれ　あうゑさ。
 あうゑ　れ　ふわわ　むり　らうめい、あうゑ　れ　ふわわ　むり
 らうめい、　れ　いゑ　おれ　けいげ　おれ　あうゑさ。
 あうゑ　れ　ふわわ　むり　らうめい　れ　いゑ　おれ　ていぬ
 おれ　あま　むる。(此歌の意解すべからず)

かまれか(未だ黙せざる人)　けいげ(未婚者)　おやで(愛する)　おい(汝を)、
 かまれか　けいげ　おやで　おさ。
 あうまい(持て來た)　あり(枕)　れい(好き)　かまれか(未だ黙せざる人)、
 あうまい　あり　れい　かまれか。
 かまれか(未だ黙せざる人)　けいげ(未婚者)　さうや(此所に來れ)　もゑ(臥せよ)
 かまれか　けいげ　さうや　もゑ。



サモワ島の記

退散するなり
 本島の産又蝙蝠の一種あり之を飛狐
 と稱す小笠原島も此の種屬あれども
 本島の産の如く巨大ならず其の顔色は
 恰も狐の如くにして翼は黒く毛色は狐
 色のものあり或は黒と狐色と斑を成す
 ものあり牙の長さは五分もありて宛な
 がら狐に異ならず只舌は頗る長くして
 口中に收め得る能はざるより常に三分
 程の口より出し居れり深林に栖息し晝
 夜の別なく隨處に翱翔せり人若し山中
 深林の内を跋涉するときは遠近より飛
 出るなり然るに圖の如く枝に垂下し居

わか、わか(笑ふ貌) わか、わか(同上) かけを(我が愛人) わか、わか、

わか、わか わか、わか かけを わか、わか。

此他に勇壯なる男子の踊りあり其歌は左の如し

かりやがゑー(抛げ鎗を以て刺すと云ふ意) かりやがゑー(鎗を刺され

てと云ふ意) てく、れく、てく(跛となりて辛くも通ぐる様の意) かりやがゑー。

又此圖はアビヤ市の土人が「シバ」土語)と云ふ一種の踊りを爲す處を寫せしものなり同

市の近郊より此踊の爲めに馬場の如き舞場を設けありて祝典の日に當り酋長より其命を下

す時は土人は男女とも勇みて此所に集合す當日土人の各々競ふて美麗なる裝飾を着け隊を

成して場の東西に屯し號令に隨つて東西より各一隊づゝ大鼓に和して足踏みしつゝ出で來

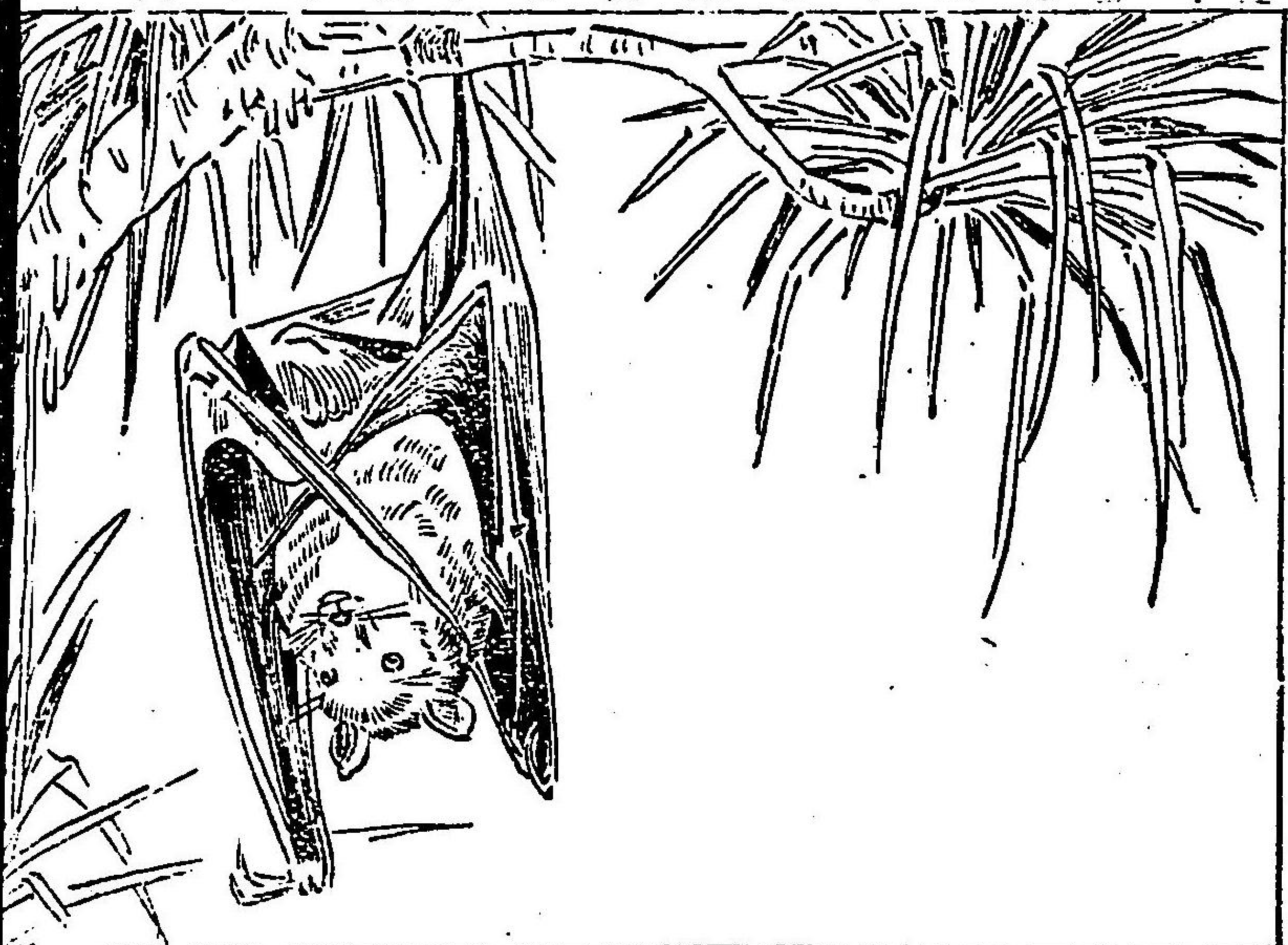
るなり其の東西より進行する様へ恰も兩敵相迎ふるが如く適宜の距離に至ると認る時隊長

と覺しき者一人武器を振上げ大聲を發して敵の隊列に向ひ何か言葉を掛ると敵方にも大將

然たる者現れ大聲を發して之に答へ其より又大鼓を打ちつゝ進行す斯くする事數度、次第

に接近して遂に東西の二隊混雜して一團結となり茲に踏舞を初め男女とも大聲にて放歌

第三十七飛狐に掛るの圖



る故其將に枝を離れんとするとき先づ身を前後に搖曳して運動力を付け充分機勢の付たるとき枝を離れ恰も大石を抛げたる如く二三問程の身を其儘に飛し其間翼を開きて羽ばたきを爲し飛行する故折々森林の中にて揺曳して枝を離るゝとき他物と衝突し死するとあり又常々枝に棲む時は己の翼を以て全身を包み恰も黒き風呂敷包を枝に掛けたるに異ならず其物を喰ふときも倒まゝ垂れしまゝに翼に附きたる爪を以て食物を握み喰ふ又糞する時徐々と翼の端に附きたる爪を上げ枝に掛けて尻部を附きたる爪を離し立てに垂下し糞し終れば又再び尻部に附きたる爪を枝に掛け裂

す其の舉動如何にも落ちつきて敢て驚き躁ぐを見ず好んで香蕉を喰ふ故に屢々香蕉の畦に於て土人に打殺さるゝ事あり

○ヒージー島の記

十一月三十日 本艦の本日午前十一時比叙艦と共にアビヤ港を發しヒージー群島に向ふ先づ南緯十三度二分西經百四十七度十七分の點を指し針路を南西二分の一西と定めて前進す今回の航路は季節柄無風の線を航するとすれば總て凜走を以てし帆走法を用ひざるとに決し十二月二日に至り豫め着島の時日を算し且つ該群島の大島小嶼點布し隨つて航行し危険なるを以て速力の半速力を以てするとせり同月五日午前九時ヒージー島のオバラウ島に着し同島の東端にあるレブカ港に入港せんとす時に一艘の小艇あり英國の國旗を立て余が艦に向ふて來る故に暫時進行を止め何事ならんと聲を掛けしに知島事よりの依頼なりとて前橋に黄旗を揚よと云ふ這ハ本港の定則にして船中病者の有無に拘りらず必ず黄旗を揚げて入港する事なりと云ふにより其の請求に應じ黄旗を揚げて入港すれば忽ち醫員來艦して

病者なきを證す依て黄旗を卸し上陸の支度を爲す

サモワ島よりヒーシュー島に至る迄の海路ハ六百餘海里西南西にして我邦より大凡四千海里東南に當れる島なり當時の季候ハ十二月上旬なれども正午は華氏八十四五度海水の温度ハ八十度前後なりし今本島一年の季候を記さんに春夏季は八九十度にして秋冬ハ大概九十度より九十五六度に至るとあり然れども驟雨等風の數次熱を洗ひ去るとあれば左して堪へ難き程の事もなく強風時に起ると云ふも其の風力の我邦の暴風の如くならずレブカ市中の家屋建築の甚だ華奢なるを見ても知るべし又地震ハ斷じて無しと云ふて可なり本島に永らく住する英國知島事の談話に二三年前至つて輕微なる地震一次ありしのみと余が該島に來りし頃は恰も降雨の季節なれば晴雨定りなく上陸中も雨衣を脱する事なかりしは實に困却せり

本艦は同月八日までレブカ港に碇泊し同日午前一時三十分拔錨して西へ向ひ航すると八十哩餘にして同日午後四時ウイチレバ島のスバ港に到着し更ニ十四日間同港に滯泊したり其間余の兩地に於て探聞實見したる風土人情ハ前項サモワ島記事の例に倣ひ左に掲録

する事とせり依て先づ其の地勢を概説せん

ヒーシュー島の地勢

本群島の北緯十五度より起り二十三度に至り西經百七十七度より東經百七十五度に亘れる海面に點布せる三百餘の群島にして其内大なる者ハ只三個のみ餘ハ皆海上の點石の如し其最大なるものをウイチレブと云ふ周回二百哩あり

スバ港

本島の南端ハ良港ありスバと稱し即ちヒーシュー群島首府所在の地とす該港の中心ハ市街に建てる「ナムブカラウ」會堂とし南緯十八度八分三十秒東經百七十八度二十五分十秒なり其の地勢たるや北方に連山龍蟠し南方に海灣築張せり其海門の廣ハ東西三「ケープル」南北四「ケープル」其の海門の左右ハ峻々たる珊瑚礁なり海門入りて進むと半哩許礁邊に一箇の燈明船を置けり更ニ東方に折れて行く半哩にして始めて其の碇泊場に達す市街の中央より波上へ斗出せる一大棧橋を設けあり長さハ三哩餘もありて其の立派あると我邦の永代橋に異ならず土人并に印度人は此の棧橋の上ニ露店を開き菓實菜蔬等を賣るを見る市街ハ三角形をなし其の右手ハ宏壯なる厦屋の聳へたるハ即ち有名なる「マークス」商會なり煙草酒類器具雜貨等を陳列して航客の需めに應ず其他猪肉等の食糧

并ぶ布帛の類を購ふも亦此商會にて悉く辨ずるなり之も次ぐを「エ、エム、プロザク」商會とす右の二商會より東南一哩程は高樓傑閣鱗次櫛比して一大街路を開く是れ皆歐米人の住宅にして書肆、藥舖、俱樂部、旅館、一として具へらざるはなくレブカに比すれば其の繁盛なると數等の上により又市街に在る一大旅館の南洋各群島の古器物及び貝類を蒐輯して旅客の縦覽に供し其の食料の朝「シルリング」、晝「シルリング」、晚「シルリング」半よして別に上中下の等差あり調理の敢て拙からずして味よべさるもの多し又港内在留の歐米人は政廳の上等官と一二の紳士を除くの外皆此の旅館に就て會食するを常とせり猶ほ此地に二旅館あるも之に劣ると數等あり

其次をワヌワレブと云ふ周回百三十哩此の二島の土地廣大にして數十哩の大河四方に流通し山嶽高く聳えて樹木多く沃野數ヶ所ありて頗る物産に富めりツイチレブ島の東端に添ふて周回六十哩程の一島ありオバラウと云ふ

レブカ港

本島の東岸にレブカ港あり西は峻嶺を帯び東の海に面し南北の珊瑚礁蜿蜒海水を擁して一港形を成せり港内は方三哩の廣さあり最も安全なる碇泊場にして大艦巨船の出入す

る處は幅三「ケーブル」長さ二哩餘のレカレカと稱する珊瑚礁を右にし幅二「ケーブル」長さ一哩あるムバラウと稱する珊瑚礁を左にして其間に五百「ヤード」程の幅なる船路あり其深さ十七八尋に達す此の兩礁の間を航して礁内へ入れれば浪穏かよして恰も鏡を拭ふたるものゝ如し、余太平洋洋間の島嶼を實踐する殆ど百に近し然れども其の碇泊場の平安なる斯の如きは未だ曾て見ざる所なりレブカ港の市街も亦山を帯び海に面し海岸に沿ふて道路を通じ各國の領事館あり知事の代理廳ありて頗る繁華の地なり且つ七年前までは本港に英國の知島事政廳を開き全島の首府たりしを以て道路平坦にして其廣さ十五六「ヤード」に及び馬車東西に通じ建築も教會學校旅館等に至ては頗る見るべきものあり全群島の面積の七千四百平方哩にして内百島の土民居住し其口數大凡十一萬餘あり抑も本群島は英國の所領にして政廳には知事并に數名の役員を置き別に行政立法の二會ありて知事を輔佐す又各酋長には従前の如く土人を支配するの權を與へ中に政府より若干の俸給を給與する者ありと云ふ

本島知事の略

余の始めてレブカ市に上陸するや先づ獨逸商人ホーダー氏の商店に到りたり氏の當地に於

て有名なる商人にして店を當市に持ち住宅の市中より一哩程南方に寄れる丘上に在り氏は十餘年前本島に移り來りて能く土人の情に通ずるに依り今の土人の太く欽慕する所となり布帛其他の要用品の凡て同氏の店に就て購求するを以て商賈頗る繁盛あり余一日同氏の別荘に遊ぶ氏は玉突室に余を延いて相共遊戯し又自轉車にて運動し種々心を盡して響應せられたり殊に美麗なる庭園にて百千の花卉を植ゑたる間に奇石を敷き珍禽奇獸を飼ひ一目其の風俗を知るに足れり同氏の話に聞くに西曆一千八百七十四年英國政府初めて知事を送りて本島を占領せしものにて其頃當港の此ローヂー島の主府の如く市中の北端なる「グリーン、ライト」(青色燈臺)の邊に政廳を建てたるものなり之れが最初の知事は英國海軍大尉ハミルトン、ゴルドン氏にして同氏は五年間此レプカに在りて知事の職を執り博く土人を愛し大に人望ありしが千八百六十九年代理知事を置きニウブリタニー島に行きたり其後六年を経て千八百七十五年サー、ダブリウ、ジー、デボー氏第二の知事となり英國より來つて民を收め最も収産に心を盡せしが千八百八十年國命に依り本國に歸りたり氏は島務を執るに仁慈の處置多く爲めに本島の風俗を一變せし程ありしが英國政府は之を知らず

却て氏を歸國せしめ代るるサー、チャールズ、ミチエル氏を以て第三知事となす然れどもミチエル氏の任に來つて未だ一年ならざるに種々の風説起り遂に其職を盡す能はずして歸國せり其後三年間は代理知事を置かれしが千八百八十四年サー、エフ、ビ、サー、ストーン氏知事に任せられて今日に至れり(サー、ストーン氏は我が軍艦にも來り余も氏を訪ひ滞在中度々往復せり)氏の知事任せらるゝや即年政廳を隣島なるウ井チレブ島のスバ港に移したるが是より當港の景氣は大に衰頽し會て五六年前に市中の戸數千五百戸の上に出しも今の皆政廳と共にスバ港に移轉して僅々七百戸に過ぎずと云へり

因に記すサー、ストーン氏の本島に四十年前より滞留せる人なり氏の初めて渡來せし英國軍艦の南洋航海を試みし砲船員にて本島に來り病を以て上陸し其の軍艦の出發するも臨みて猶ほ未だ癒えざりしかば遂に止つて保養を加へ漸く壯健に復したるが其時既に兵籍を脱し居れり氏の初より文字あるを以て英國領事館に書記の職を掌り漸次土人に馴るゝに隨うて大に愛慕せられ其より本島は廣く庭園を作りて島内の植物を蒐集せしが原因にて後ら終に植物學に志し當今一家の植物學者とはなりぬ英國政府が該島を占領し

知島事を派遣するに當りて氏に已に二十有餘年間も本島に在りて能く方土の事に通曉するを以て毎に知島事の廳に在りて事を處し來りしに千八百八十四年第三知事ミツチエル氏が其職を失ふや英國政府の直に氏を擧げて本島の知事とはなせるなり氏が當地に知事となりしより土人及び在留商人孰も望を氏に屬し島内能く治まり今に至るまで一回だに知事に對して不平を訴へし者なしと

ロヤールホテル

其よりローダー氏に同伴して「ロヤールホテル」に到る此「ホテル」はレブカに於ては第一等の旅館にして随分立派なり客室の三十有餘ありて室内の裝飾品及び敷物等中華美を盡しあり其の室内に飾り付けある煙草箱手箱等ハ日本製の蒔繪の漆器を用ひ又花瓶も總て日本産磁器を用ひ殊に上等室にハ七寶燒のもの多く尙ほ竹細工等の物を多く並べ立てあり其故は當地に來る外國人の日本に來りし者少なく又本島への日本産は輸入無きを以て態々濠洲のシドニー等より取寄するものなれば其價の高きと品の目新しきを誇るが爲めなりと併し窓掛食卓掛等に未だ日本の織物を得ざるは遺憾なりと「ホテル」の主人は語りたり是れに依りて見るに當地へは昨今初めて日本品の輸入ありしものなるべきが孰も價格は比し

六

レブカ市の大

て甚だ粗質なるは怪むべし、此家には玉壺五六盞を備へ又球抛場あり音楽室あり其他種々の遊戯場の設けあらざるはなく音楽室にハ少女の樂を能くする者を居らしめ客の求めに應じて奏樂唱歌せり故に此「ホテル」に在るの間は自ら長き航海の勞を忘れ恰も都會に豊年を渡るの心地したり余ハ此時ローダー氏の友人にして同じく獨逸國の商人なるレブカ市の大シヨトツ氏に面會せしが氏も本島に數年滞留せる由なり氏の語に曰く昨年十二月當市に大火ありて一時ハ市中大半燒失せしにより大に不景氣を來たし本年に至り少しく挽回せしも本年又々大火ありて市の中兵數十戸を燒毀せしと本島の未だ煉瓦石造の家なく木造のみなれば我邦と同じく出火の節ハ消防方甚だ困難なり併し漸々石造の家屋も増加すべしと云へり、次の日同市外山中にある「カトリック」教會附屬の病院を見物せり、レブカ病院と云ふハ病室六間ありて藥劑室はサンダ、シヨワシナと云へる女教師居れり寢臺及び被衾の類は頗る清潔にして百事能く整頓すと雖も目今同市は醫師不足にして隔月にスバ病院より大醫巡回し來り三週間逗留するのみよて平素在留せる醫師なしと尤も同市の風土の良き爲めよや入院者少なく當時余が見しときは僅に二人の患者あるのみよして彼のサンダ、

レブカ病院

水浴場

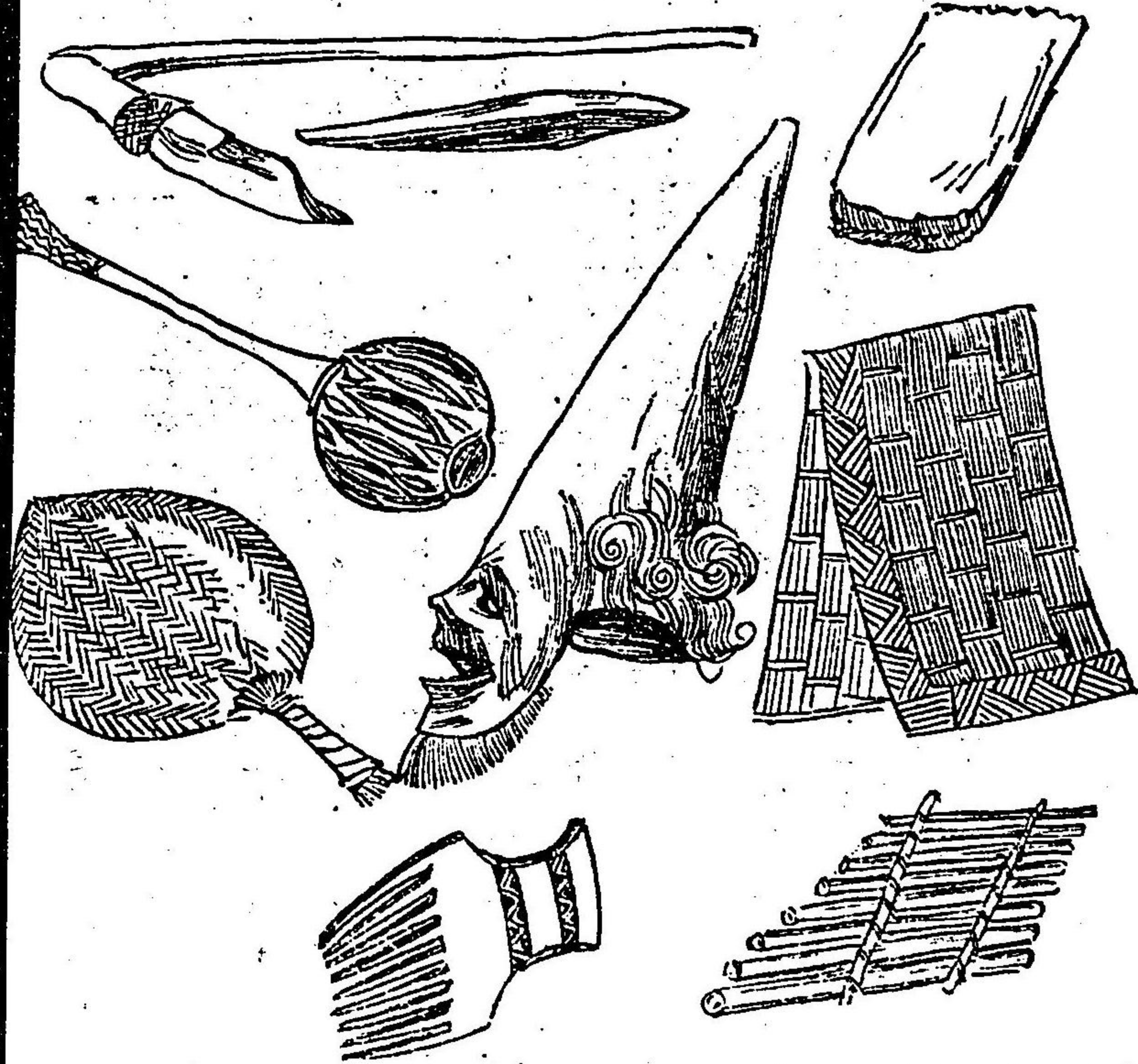
シヨワソナハ該病院の主劑として醫道に委しくよく自から懇切に患者を取扱へり入院の食料及び要費を問ふに看病婦其他什器の借料、藥品、食費合せて一日の價六「シルリング」にして病室六間患者十五六人を容るべく且上中下等の差別なく間々難病者あるときハスバ病院より大醫の來るを待ちて診察を請け其の指揮に隨つて治療を施すと云ふ、病院の門を出で、右より一小徑あり行くと半町許にして一の清き湧泉あるを見る奔流岩に激して飛ぶ玉の如く碎くるは雪の如し熱帶地方にてハ最も水を喜ぶとなれば土人の其流に沿うて小屋を營めり又行くと半町餘にして枯木もて作れる門あり英文にて水浴場と記したる額を掲げたり門を入て左右は叢竹生ひ茂り小徑屈回せるまゝ歩み行けば方三間程なる小亭あり浴者の衣服等を置く所として二名の土人常に掃除番を爲し居れり水浴場は其の小亭に接して東に水道を開き西と南北との巖壁高く香樹雜草翳鬱として圍繞し恰も幕を引くに異ならず其の絶壁より三條の瀑布を噴下す瀑布を受る所は稍々十間四方もありて「セメント」にて風呂の如く作り其中を游泳するを得水清く氣清うして一たび此所を遊べば浩然仙に登るの心地なるべし水浴するに制規ありて猥り入浴するを許さず日々午後三時より四時までは女子の入浴時間とし午後五時より夜までは男子の入浴時間とす又土人の入浴するを許さるより全場頗る清潔なり余ハ暫く此所に憩ひし後浴場の裏に一徑あるを認め行くと一町許り獨木橋あり橋下水清く樹木鬱蒼風光絶佳あり橋を渡れば一村落實り家々皆垣に花卉を植ゑたれば到る處芳香袖を襲ふ又多く鸚鵡を養ひ能く馴れて人語を學ぶ此地にては時々鸚鵡會を開きて一の樂みとする由又別に稼穡の業を取る者なく住民の孰れも閑雅淳朴の風あり蓋し日々の衣食は天産を以てして餘りあるにより唯斯る好事にのみ耽りて消光する者ならんか余ハ舊路を取りて歸り來り又も監獄の門に入る土人の巡查出で來り所々望み任せて案内せり牢獄の幾個所となく巡見したれども絶えて囚人なく悉く空室なれば罪人の何處も在るかど問ひしに罪人は三ヶ月前唯だ一人之れ有りしが今は放免せられて此の山中の村に住せり其他は未だ罪人と云ふ者あらずと答へたり、刑罰の法を問ひしに巡查の罪人を捕ふれば連來りて直に暗室に押籠め三日若くハ一週間留置さて後ち放ち還すなり是より重き罪人は無しと答ふ實ハ其の風俗無懷葛天の世とも云ふべきなり其よりホーダー氏の宅を問ひ氏の集めたる本島古代の器具等を見たり今其最も珍奇なるもの數個を寫圖して左に掲ぐ

本島古代の器具

本島古代の器具

土人穴居の跡
並に家屋

第三十八圖 本島古代の器具



ヒジ島の記

第九圖 ヒジ島の土人及家屋



ヒジ島の記

二百六十九

二百六十八

本島の土人は昔し穴居せるものと覺しく山谷の間に往々穴居の跡を發見するとあり其最も何人の目も觸るゝものハスバの市中より西レツの部落に至る海道一哩にして山手の平地より八尺程高さ所にあり入口の幅も高さも三尺程なれど内部は方二三間もありて中々大なるものなり余ハ土人を案内に連れて此穴に來り内部に入らんとせし土人は驚きて余を引止め古人の穴居せし跡へ入るときハ絶命すべし

其故を問ひしに昨年も西洋人一人本島に來り種々調査を爲せし序古人の穴居の様子をも探らんとて穴に入りしが其儘出で來らず案内者は穴の口に十二時間程待ち居りしが呼べども問へども應せざれば恐るゝ窺ひ見るに音もなかりしかば多分命を殞せしものならんとのとなり斯る變事もありたれば決して入る勿れとて強て止めたれば余は遂に内部を見る能はず其外面の全く日本古代の穴居の跡と毫も異なる所なく己に近年までも間々土人の穴居せしものありし趣きなり然れば熱國たるも拘へらず土人の住屋の今も穴居の形と能く相似たるものあり家は大概間口二三間奥行四五間もあるが小屋掛なれども入口は竊に一人の身を通ずる丈まで餘り厚さ六七寸程の板壁を草木の葉で封じ一方口の外より一二の窓を開きあるのみ故に裡に入りて見るも穴居と多分の相違なく大概周圍を樹葉或は茅葎の類にて圍ひ屋根は椰梢の葉にて葺けり會長の宅は棟木の所に長く角を尖出せしめ茅葎にして我邦伊勢神廟の建築法に髣髴たる處あり但し柱梁等は丸木を其儘用て釘を用ひず繩にて綴合せたるあり、本島土人は會長の宅に會する時又は長老の前に出る時に額と兩腮を濃黒く塗るを以て禮とせり故に會長の住居せる近傍の土人は何時會長に逢ふやも知れざる爲め墨灰

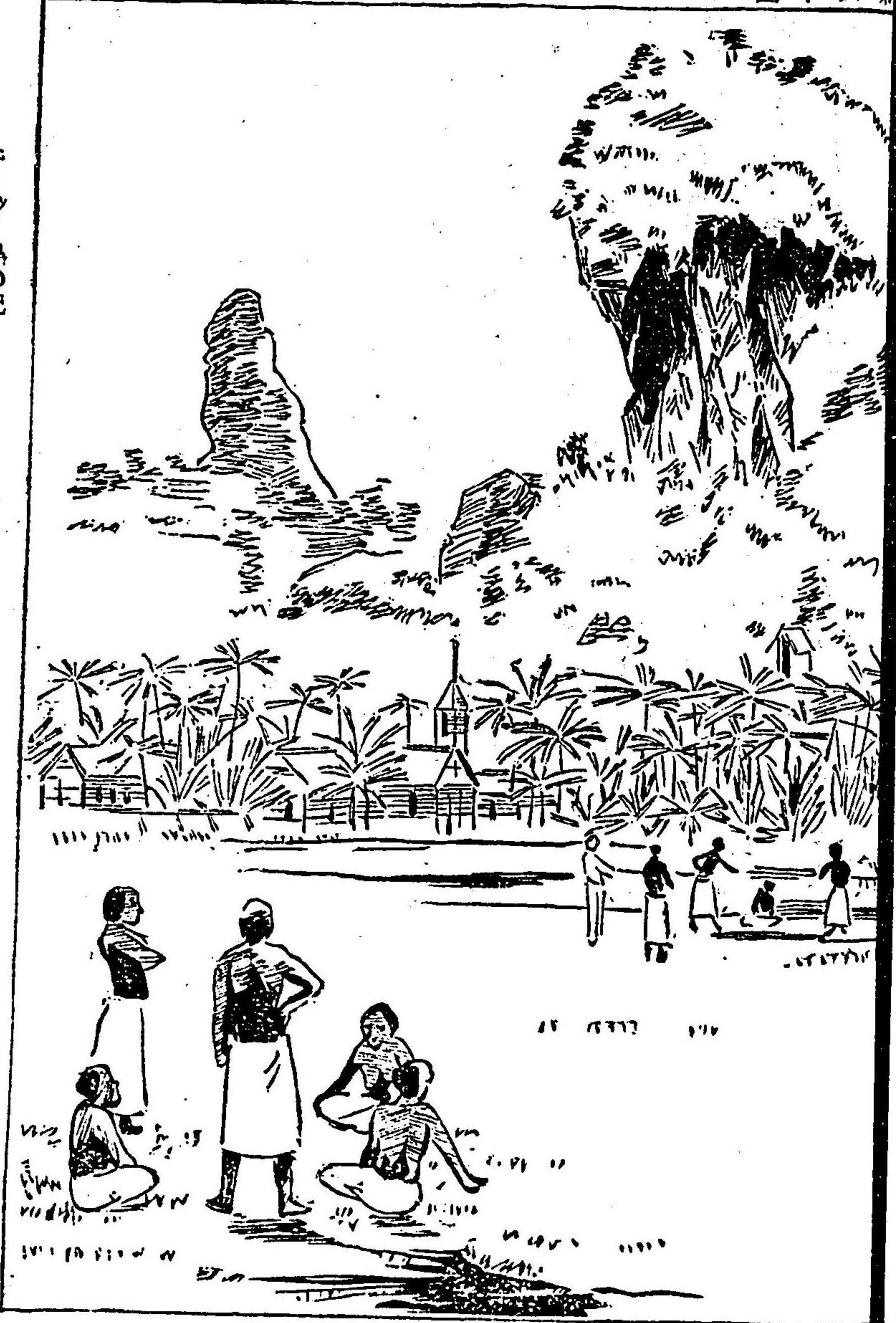
面部を黒色に塗るの禮

を以て面部を塗り居る者甚だ多し其墨は木炭を粉にし椰梢油にて靴墨様のものを作りしなり而して之を塗るに鏡を要するも鏡の未だ本島土人の手に入る極めて稀なるを以て皆水を盆に盛り之に面を寫す即ち我邦に所謂水鏡を用ふるとなり

佛國宣教師の土人を訓化せし偉蹟

余一日土人の風俗を視察せんと欲しレブカ市中を通過し山中に在る土人の住屋に入る尤も一人にての時々危険なるを推察し天主教會の教師ユルラン師と同行せり然に該村落近傍の土人の外人と接すると頗る懇切にして菓實蔬菜の類を以て饗應の意を致す其情愛すべし又一日ユルラン師の會堂に至りブレヘー師に面會す師は四十餘年來本島に布教し居ると云ふ人にして嘗て瘴烟瘴氣の中、非常の危険を犯し頗る苦辛せられしサルバード師の後任たりと云ふ齡七十二年猶ほ壯健にして能く土人を訓化し居れり該寺より大僧正ありてモンセイギヨール、ピダール師と云ひ常に同港を去る北方六哩に在るトクウと云へる村に住せり余此日レブカ教會の小艇に奴隸三名を師より借り受け帆走して同村に到り見るに只土人のみ此に住し白人と云ふは寺院の僧侶のみありし上陸して大僧正ピダール師を訪ふも師大に悦び葡萄酒等を以て饗應し自ら案内して所々を見物せしむ途上の談話よりレブカに在る

景の堂主天落部トク島トイヒ圖十四第



ヒーシュー島の記

二百七十三

ヒーシュー島の記

二百七十二

プレヘー師の佛人にして四十餘年前當地に來り傳教す今の年七十二歳已に兩鬢雪の如し
 然れども猶は健康にして馬に跨りて山野を跋涉し教諭に孜孜として怠らず師の履歴を聞
 くに初て本島の土人を訓化せしサルバード師に次ぎ頗る猛惡の土人に接し殆ど將に喰われ
 んどせしと幾度なるを知らずと初めサルバード師此地は渡來せしときは土語を學び得て土
 人に接するも土人をして外國人なるを覺らざらしむる迄となりて此地に踏入りし土人が
 師を喰いんと謀りしと數次に及べり然るに師は非常の高徳なれば天品の力以て土人を畏服
 せしむる所ありて土人の斯る策略を企る毎に叱咤一聲以て之を退けたりと云ふ遂に數十人
 の土人を僕隸として山を開き川を橋し一村落を爲す至れり時に師は頭領と穴居の土人をし
 て小屋を營ましめ自ら一ツの小屋掛を爲りて之に住したり其より土人々稼穡を教へ次第に
 人倫事理を諭して遂に一ツの部落を組織せり此の部落は即今のトクウ村なり其間師の經
 歴せし奇事珍話實に勝れて數ふべからず師のトクウを開くとき經驗したる一事ありとて物
 語りたるを聞に土人三十餘名を引連れ土功を着手せしに毎日師は午飯には小麦粉を以て煎
 餅様の物を製せしめ常に之をパンに代て食用に供せしが或日も婦女も命と右の煎餅を製せ

トクウ村開闢の事

しめ既に晝飯の時刻も来りければ師は先づ休息場に到り食に就んどせしに煎餅の饅か二枚あるのみ師の何故に今日に限り斯く少許を拵へしやと問ふは婦女等の水なしと答へたり師も空腹なれば其の二枚の煎餅を食ひつゝ婦女は向ひ水なければ何故に汲み来らざるや早く汲み来るべしと命せしかば水の在る所甚だ遠しと答ふ故に然れば彼の煎餅の何にて製したるかど問へば婦女等答へて土人の木實のみを喰ふて「パン」を喰ひざれば水を要せず唯師のみ「パン」を要するゆゑ此所に居合せたるもの、唾を聚め漸くにして二枚の煎餅を製したりと云ふ斯くて其地は水利なきを以て他處をトせんとして其より海に添ふて東する七哩の處に十回歩許なる平原の中央に一脈の流れあるを發見し茲ぞ充分の結果を得るは必定と思ひ遂に右の三十餘名の土人を相手と開拓し山に添ふて柳橋を植付け又食料に必要な菓實を産する樹木等を盛んに培養し其内に數間の茅屋を造り中央に教堂を建築して纒々村落の形を成せしが今日に至りては住民七百口家屋百餘戸あり是れ即ち前に記せるトクウ村なり其の繁盛遠くレブカ市に及ぶざるも實に本島開闢の地にして我邦の筑紫とも云ふべきなり其の地形は山を背にし海に臨み中央に一の流水ありて長さ十五六間の橋梁を架し樹木蒼鬱緑

土人の學校

陰日を遮り風清く又水淨く山には奇巖怪石凸凹起伏し見も馴れざる鳥の聲則かに聞かれ芳花甘菓の年中絶ゆることなく人豪に民朴にして余が此地に至りしときは恰も生を仙郷と得たるが如き思ひなりきサルバード師の此に在りて土民を教訓し五十餘年の歲月を経たるが遂に此地に於て逝去せしに實に千八百八十七年の秋なりと云ふ今の同村に立派なる天主堂ありて土人は皆「カトリック」教を信奉し大僧正ピタール師之を統理せり余此の教會にてピタール師より極めて懇切なる取扱ひを受け諸所見物の序で該教會附屬の學校に到り校則等を一見せり實に本島土人には適當なる教育法として教課の外に聖田稼穡の課目あり生徒百餘名の費用及び奴隸牛馬等の飼料に至る迄も耕作地の所得にて餘裕ありてレブカに在る教會に分配する程ありと而して書籍等は皆土語に翻譯せしものにて小學普通の教課書一として備はらざるのなく而して土人の性質の文學よりも算術書圖に長ずる者多きは一奇なり又余は女學校に至り女生徒の唱歌を聞きしが其音聲宛がら「オルゴール」の音と異ならず音樂唱歌は最も巧みなり次は師は地圖を披いて小女をして日本を指し示さしむ小女策を執て圖に向ひ日本を指して余を見て笑ふて曰く君の本國にあらざるやと又首府を示せと命じたるに江

戸と京都を指して何れが首府なるやと問ひたり依て彼は江戸を指して是れぞ我邦の首府ありと教へければ小女の君の名刺にある東京とい何れなるかと問へり余は二十年前江戸を改めて東京と稱うせし因由を語り聞かせしよ小女の復も問ひを起して曰く江戸は椰樹ありやと云ひ余が無しと答ふるを待つて更に本島の食料なる菓實の名を並べ是等は皆日本と産するやと尋ねしにより余は皆産せずと答へしに小女は然らば日本はロージー島の如く食料も豊ならずと氣の毒氣と言ひ出でしよぞ教師初め余等一同思はず大笑せり其後師は生徒よ日本の生活等の事を話し聞かせしよ皆々沈黙して聞き居たり余は土産の爲め風月堂の洋風に製せる菓子を一箱持参せしゆゑ之を興へたるに其喜び大方ならず生徒は日本は實に豊國なりとて急に賞賛せしも亦笑ひの種なりし總体トク一學校の生徒の宣教師の工夫にて各々一様の服を着せり男生は白く半袖の「シャツ」と青色の袴を着し女生徒は白に紺の襟袖付きたる水兵の服を上衣にし下は洋婦人の着する袴様のものを着し男女ども斬髪にして素足なり然れども常に文明國人の教訓を受け居るとなれば其舉動少しく普通の土人とは異なる所あり生徒に上下の二級ありて上等生は土語にて日々の記事又の往復文位は不都合なく書す

るを得中に佛語を通ずる者ありて人に接するも世辭追従を言ふ所の宛ながら野蠻の土人とは思ひぬ程なり只其の年齢を知らず又食するに匕箸を用ひず魚類等を得ば其儘に鱗も取捨すして食ふに至ては争はれぬものと云ふの外無し今は其より暇を告げて學校を出で耕地等を巡見し又小船に乗りてレブカ又向ふ風俄かに到るを以てタイムパと云ふ處に上陸しマリオトと云へる土人の家へ休息す時に大に雨降りたるが晴れて後ち家椰楸の並木の間を通り夜に入りてレブカの旅舎に歸り着きたり

レブカ市民我軍艦を歓迎す

我軍艦のレブカに入港するや同地在留の外國人等の艦内の參觀を乞ひて止まざるより日を期して之を許可したるも米獨英佛の各國人打ち交りて艦内を充滿し其の混雜大方ならず兩艦長共困却の体に見受けられたり又同市中に「プロテスタント」の學校と「カトリック」の學校ありて兩校の生徒は互に列を争ひ校長までが競ひて面調を乞ふに至りたるは最と笑しかりし此時同港在留の米國領事も市人の群に加りて來れるを認めければ之を艦長室に案内して丁寧に待遇し尙は同領事の爲めに例規通り祝砲をさへ發しければ領事の非常に感激して云ふ様生來未だ曾て夢想せざりし名譽にして殆ど謝するの辭を知らずと此事逸早くも同

市中に傳播しければ午後に至り獨逸領事の代理と稱して其の賓弟なる者來艦したり然れども代理人なれば領事同様の取扱ひをなすと能はず賓弟も自から愚兄の偶々不在なりしが故に米國領事と其の名譽を同うするを得ざりしは定めし遺憾あるべしと愚痴をこぼせし氣の毒千萬の事どもなりし鬼に角に外國人が何事にまれ其の名譽を争ふの情熱も富めるは感すべきの氣象よこそ而して其の翌日の在留各外國人相聯合して我が日本軍艦の爲めに醜遊會を催したり其の場所の市街を距る凡そ三哩許南に當れるトキ村にて二町四方の平原なり只見る上原より椰楮芭蕉の類叢生して翠色滴るが如く炎日を遮り其の下蔭は一面に細草菌の如く地上に密布し背に一座の丘陵を負ひ鏡を磨するが如き清灣を抱き其の風光絶佳なるの拙き筆に寫し得べくもあらず此日余等の一行の午前十時レブカに上陸し該會の發起人なるホーダー氏及びショーツ氏等の家を集ひ居りしが午前十一時頃より男女打揃ひて五百人許或の馬車を走らすもあり或の馬に乗るもあり思ひ／＼に繰り出したりしが中には多くの黒奴さへ交りて其狀世界人種の繪巻物を見ると一般なり扱て會場の模様を記さんに場内の椰楮の葉を組みて大地に敷き其上より白布を敷ひ設けの食卓に就きて或の起ち或は歩しつゝ

歡を盡せり宴酬として同港の人民總代ホーダー氏獨逸語にて日本帝國並に其の軍艦が遠洋航海の事と關して祝詞を述べ其より交る／＼起て各國語にて互に祝詞を述べたるが何れも日本帝國の軍艦が二艘までも打揃ふて來港したるの本島未曾有の盛舉ありと云ふの類多かりし最後に我が軍艦の士官も亦獨逸語にて其の厚意を謝せしよ拍手喝采大地も震動するばかり喜氣洋洋々としてレブカの天に満たりけり右擧るや餘興としてソロモン土人とピージー土人の踏舞(其の踏舞の狀は次項に解説す)を興行し更に晚餐の饗應あり夜に入りて男女手を携へ歌ひ連れつゝ月を踏んで歸途に上れり其れよりレブカ市街に入るや「ローヤル、ホテル」にて男女七八十人打交りて納涼かた／＼各邦の唱歌會を催し夜の十一時に辭して別れたるに尙ほ戀々として埠頭まで送り來り別を惜みたる者ありき

ソロモン、ヒ
ーシー兩島土
人の踏舞

ソロモン嶋土人の踏舞の他島との大に異にして婦女の踊り或は歌ふとを得ず何れも男子のみにて組み其踊り方は我邦古代の神樂に髣髴たり扮装の先づ頭に一の冠を戴く其冠の幅一寸五分或は二寸程にして室内帽の如く飾るに玻璃珠或は赤小豆程の大なる貝を以て種々の縞或は雪花様の形を綴り出し五彩の羽毛を貼け或は獸角の如く兩鬢に野雉山鶏の尾を飾

圖の舞蹈同二十四第



ヒーシー島の記

二百八十一

扮打の人土島ンモロソ圖一十四第



ヒーシー島の記

二百八十

付け之を冠り面部の赤或は黒を以て格子縞或は三角形の班を塗り付け或は鼻を赤く塗り或は腮頰などを塗り立て、異表の面体に彩り腕に幅二寸程の腕輪を穿ち其腕輪も冠同様に五彩の珠或は貝を以て綴り作れるものにて是れも雞或は山鳥の尾を立て又手首の所にも一の輪を貫く此も腕輪及び冠同様の飾あり又背及び胸部には筋違に十字形の手襟（此襟は鳥の袋毛にて縁を付け恰も我邦の馬の胸がいかに似たり）を掛け其幅の一二寸のものにして種々の飾を珠玉にて附け貝或は花を連ねたる長さ紐を手襟の上に纏ひ腹部の恰も我邦の腰剣道具の胴の如きものを着す是も同じく貝或は玉或は籠甲等にて飾り腰より下は赤き布或は更紗等の布にて腰巻又ハ相撲の化粧廻等の如きものを着し長く垂れて膝に及ぶ其上に人の頭髪にて作れる簀を着し手首及び足の甲を黒或は赤きものにて塗り踵の貝にて作れる鈴を澤山と結び付け手には貝にて作れる我邦の神樂に用ふる如き鈴を持ち耳房に籠甲或は木葉を以て作れる環を垂下し或は冠を戴かすして赤く染めたる毛の長さ二三尺もある亂髪様の物を帽子或は白毛を蒙り種々様々の出立にて人数三十人程一組となりて環状に立ち又其の中央に直径五寸程の丸さありて長さ三尺程の木にて造れる大鼓を二人にて捧げ一人歌ひ



第四十三木鼓の圖

ながら之を撃ては踊る者は其鼓を撃つ者を回りつゝ躍り舞ふ（此の大鼓と撥ハサモア島の記事に掲げたる木鐘と同製なり但本島にては其各稱を異にし大鼓を「タポア」と云ひ撥を「エブエブ」と云ふ）其歩を進むる様子と云ひ鈴を振る手付と云ひ又鈴を持たざる方の手を屈伸開閉するの所作と云ひ宛ながら我邦古代神樂の手振も異ならず其外種々様々の踊り様あれども孰れも其の体裁の前述と大同小異なれば略しぬ而して其の歌の音調は我が佛教僧侶の間に大伸讀と唱ふる經文の讀方の如く嘔聲よて長く引きて歌ふあり

又本島土人の踏舞は其風極めて粗暴にして實に野蠻猛惡の状あり其歌は大概敵を襲ひ或は敵に襲はれたるどきの事を歌ふものにして歌ふ者の悲憤慷慨の状を成し踊る者の慘憺猛鷄の氣を露す又其の扮粧は頭に草を被り腰下も青草を帯び葛藟の長さ一丈もあるものを全身に纏ひ二十餘人二行に整列し一同に大聲を發して叫號するのみ其語は人々思ひくりに



ヒーシー島の記

敵に向つて罵詈を吐くものなれば其の句調音節ある歌と云ふはなし其踊り方の戦争の時山中の深林或は海上の波浪の中を奔走浮潜するの様を爲し次第は敵の毒矢毒鋒に罹りて狼狽し遁る容子を爲す者あり或は仆れて死する様子を爲すもあり或は苦惱を忍んで敵に組付く者あり其の氣勢の烈しき目眩き程に飛廻るなど亦以て其の身体の強壯なるを知るに足れり鼓笛の無けれども手拍子と足拍子にて笛鼓よりも嘩しく此の踏舞を見てもヒーシー土人の強壯健康にして數哩の海峡を泳ぎ渡り數十里の山嶽を疾走すと云ふと信じて疑はず實に非常の剛の者に非ざれば斯る踊りを爲し能はざるべし既し踊りの終るときは身は纏ひし草葉は盡く散じて一葉だに残らず偶々残りたる葉は打叩きたるものゝ如くなれるなり又一種の踏舞あり是は男女打混じて踏舞するものなれども元とニウカルドニー島より傳來せしものにて本島固有の踊りはあらざるなりと

政廳市場及び會堂

ヒーシー島の政廳はスバ市街の東南端なる高丘(高さ十八「ヒート」あり)の上に在り其麓に土人の村落あり此村落に住する者は土人中古來の王族のみを限りしも今の零落して皆英國人の爲めは巡查及び衛兵とされるものゝみなり而して政廳の役員知事一名、書記官二名

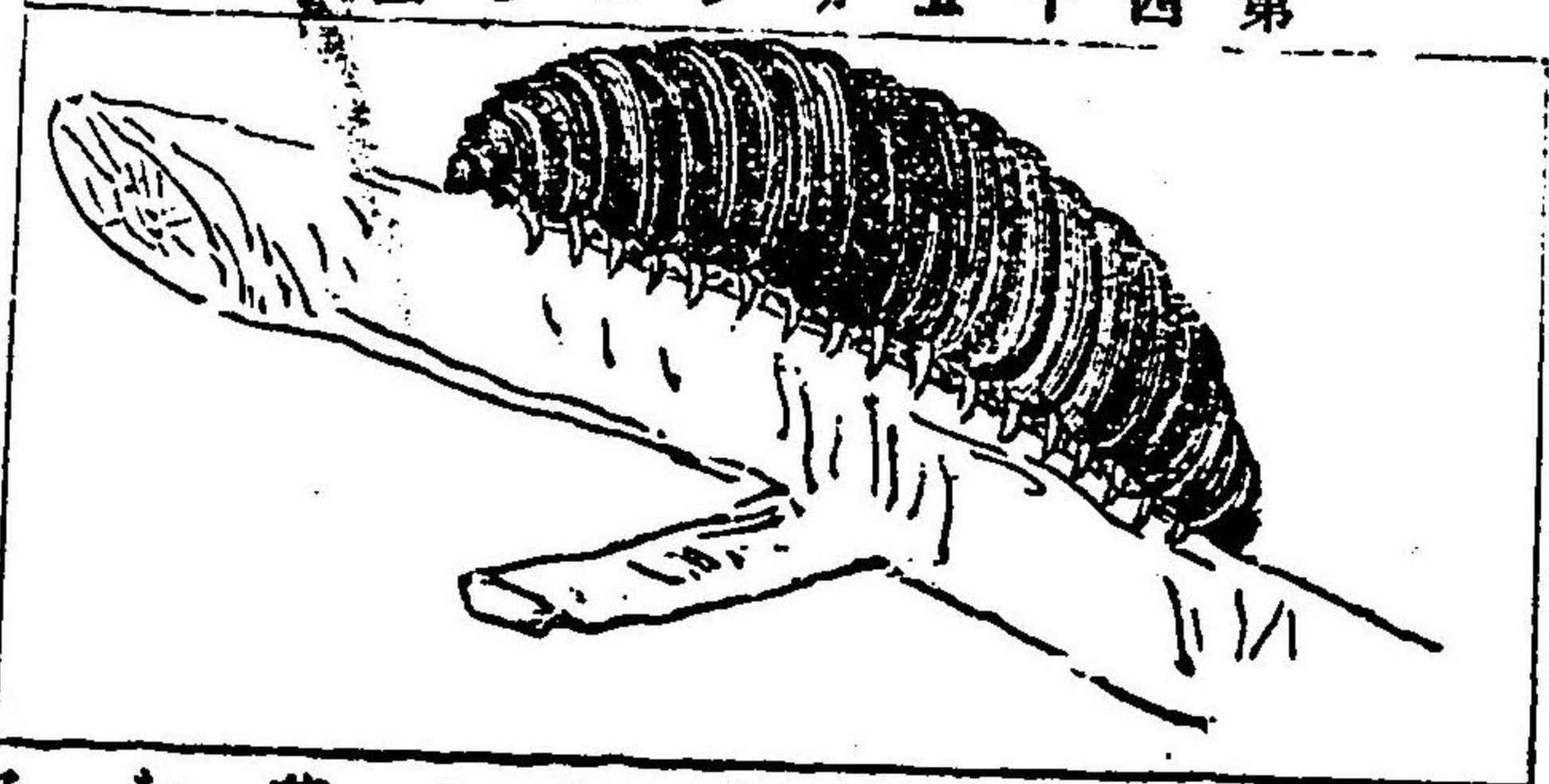
ヒーシー島の記

の外は執も勉めて土人を使ふにより土人舉げて英人の保護の下に馴服するの状あり又市場の外の海濱に在りて凡て一町四方の廣さあり元來島内の平野と河流に富み隨うて地味肥沃として牧畜も適せり印度人マニラ人毎朝群集して其の雜沓の我邦の年の市の如し又黒奴の男女打混して頭上に籠籠を戴きて賣出しに來る恰も琉球の風俗に髣髴たり右の市場より東南に行くると一町又して丘山あり其上に一大寺觀の屹立するを見る之を「ナムブカラウ」會堂と稱す即ち羅馬「カトリック」宗にて佛國宣教師ルベチー師其他二三の佛人ありて教化に盡力せり島内の人種の多さに隨うて其の信仰する所も千差万別なり之を枚舉すれば耶蘇新舊二教の外は印度佛敎回教等あり各自に教規を守りて移らざるは一奇と謂ふべし

スバ病院並に
毒蟲の話

スバ市街の東端スバ病院あり余も亦一覽せしが其の風土病の凡そ七種ありと云ふ現在の患者は癩病四、貧血症七、肺病四、皮膚病十三、水腫病三、背腫病八而して其中に最も多き者は眼病なり此の患者は皆不治の症に陥るより政廳は殊に盲人の救恤に意を用ふると聞けり試みよ其の原因を探りしに島内は一種の毒蟲ありて其名を土語に「カワス」と云ふ重よ海濱に生じ樹木の枝上に圖の如く止り居るなり其色濃紫よして一見するときは恰も黒色

第四十五カスラの圖



の如し口眼共に見えず其形我邦の「ヤスデ」蟲に以て輪と連ねたる如き數十の節ありて一節毎よ足二本を附く其足は薄紫色よして恰も鷹の爪の如く此虫長さは凡そ五六寸よして太さ拇指程あり人若し棒或は手を以て之よ觸るゝときは總身より煙草の烟の如く黄色の蒸氣を發し殆ど其烟よて彼の蟲の全体を蔽ひ滅すに至る蓋し此の黄色の蒸氣は鳥賊の墨汁を吐て已の身を藏すと同様よ護身の爲めなるべし故に伐木又ハ木枝を折取らんとするも當り此「カワス」の在るを知らずして手を其蟲よ觸るゝときは蟲は忽ち總身より彼の蒸氣を發し其の蒸氣の分子が人の眼中よ入るれば恰も煙の目よ入りたる如く痛みを覺ゆ斯くて數十日を経ざる中に其眼の物を見得ると能はざるよ至る此の療法よ就てハ衛生吏並に醫員等種々研究中なるも未だ其方を發明するを得ざる由なり

スバ監獄

スバ病院より三町程左よ向ひて進む街路の盡くる所に石造の建築物ありて最も狭き門扉を

ローラー島の記

鎖しあり是れ即ちスバの監獄なり門外にて開扉を求むべしと英文の揭示あるに依り余は其の揭示の如く呼はりしに土人の巡查出で来れり余は名刺を與へ一覽を乞ひしに巡查は直に余を導きて内へ入らしめたり進むと一町餘にして墻壁の高さ三丈許なる嚴重の一構あり巡查の監守(是も土人)を呼び余の來れるを監獄長に照會せり監獄長は英人にて其名をヘンリー、エフ、ヨルナーと呼ぶ年齢四十歳餘にして温厚の人物なり先づ第一室に入りしは黒奴四名恰も裸体にて腰は赤毛布のみを纏しものわり是れニウブリタニーより移住せし者なりと又第二室の囚徒は印度人にて頻に船材を削り居たり以上何も窃盜犯あり監獄長の談話に據れば本島の法律として初犯は當地に止め懲戒を加ふるも再犯に至りては島外へ放逐すと云へり殊に一奇事とも稱すべきは女囚に限り夜間の手錠を施して其家へ歸り臥さしむ但し囚徒の惣數百五十二名の内にて女囚は僅に十三名に過ぎざりし

土人の性質並に風俗

本島土人の一目して其の猛惡危險なるを知る顔色は恰も佛蘭の夜叉と異ならず男女とも眉稜骨高く出で目は銀杏の形して深く陥り白眼にして瞳子小く口廣く鼻大にして短く頭髪は長さ一尺餘ありて太く株欄色して四方に突き立ち肉色は紫黑色にして胸部廣く長脚にして腰下は草を纏ひ其の容貌鬼神に似たり常に毒矢と強弓を携帶し腰は牛刀或は人骨を以て作れる杖鞭を持ち首に逆戟鯨の齒を連ね懸け額に大なる白貝を連ねて向鐘巻を成すなど實に奇異の有様なり又其の聲音は濁りて大く齒牙は白くして雪の如し女子の頭髪を短く斬り草葉を被れり腰部の同じく草或は木皮を以て織り成せるものを纏ひ跳足にして炎日の下に奔走し海中に出没するは河伯の如く其の猛烈なる實に拙筆の能く盡す所非ず彼等の三十年以前までは皆深山幽谷に穴居せしが今纔に小屋を作り之に住するを知るに至れり時として軒頭に人頭の乾し固めしものを掛け人の頭毛、指甲、齒牙を以て腕或は首に掛けて以て飾とす又大樹に巢を造り之に住する者あり然どもレブカ、スバ等の市中に近き所の土民は英國政府に隷従し且つサモアと同じく「カトリック」教の訓化を受け稍と温和を貴ぶを知れり、土人生長して妻を娶る時の一戸を構へ別居す又土人は日常定りたる糧食なし或は魚肉のみを啖ふて生活する者あり或は木實のみを食して生を保つ者あり然れども烹焼の法を知らず又食するは定時なきを以て常に木實或は魚鳥を生のみ喰ひつゝ歩行し其状恰も獸類に異ならず本島に滞在せる外國人の話に土人は恰も狐狼の如く暗夜に乗じて群に

在る鶏或は鳩を盗み去て食ふとあり又山中の部落に至れば未だ人肉を喰ふの風習を脱却せざる者多しと云へり又土人の煙草を嗜み各自小屋を構ふれば必ず其屋の周圍は煙草を植ゑ喫煙を欲する毎に庭前に出で其葉を取り來て之を火爐にて炙り乾燥すれば直に「パイプ」も詰込みて喫す酒の煙草程に嗜まず却て酔漢を賤めり殊に布帛の類を貴み如何なる勞力にても布帛を得るが爲めに之を厭はず茲は奇異あるの土人が他人に向ひ其喜びを表するは尻を打つの風習なり余の始め菓物を賣りに來りし土人に其價を問へば「シルリング」と云ふ余の六「ペンス」なれば買はんと云ひし土人は之を諾し其の菓物を取りて左手に捧ぐると同時に右手を以て自ら己れの尻を打ちたり余は蠅を逐ひしとのみ思ひしに其後貝を賣りに來りし土人も同様なるより其理由を土人に質して一種の風習なるを知るを得たりき土人兒を生めば海水又は淡水に洗ひて産湯に代ふ又其兒を負ふに布或は蓆を以て兒の体を包み縋る其頭を出さしめ其包みたるまゝ繩をもて背より十文字に掛けて縛り付くるなり餘所目よの苦しみ様なれども兒は平氣にて歌ひつゝ戯れ居れり、スバ港在留の外國人は孰も土人の婦女を備ひて兒守とす其の給銀の低廉にして小兒の性を曲げざるは殊に其の長所ありと云

貿易の景況

ふ余の其兒守の婦女の醜面鬼の如く或は古來人肉を食ひし活劇を再演するやも知れずと云ひしは外國人の絶倒して誰も最初の頗る不安心なりと答へたり
 スバ港より濠洲シンドニー及びニウゼイランドへ毎月二次の汽船便あり其船の大さ八百噸あり此の本島産出の木綿砂糖椰油を濠洲在所の製造場に輸送するなり故に濠洲の大商人は本島に支店を置けり其外に十噸積前後の帆走船は十餘艘ありて絶えず群島内を巡航せり凡そローシー群島の産物の本港とレブカ港より外國人の手を経て輸出し或ひは貿易船に賣與するを常とせり

知事サーストン氏

余の一日知事サーストン氏を訪ひ談話したり同氏は余を其の書齋に導き積年蒐集せし古器魚介の類を示したり且つ同氏の植物學者なれば其庭園は數百種を培養せり余は同氏に重なる物産を問ひしに「コブラ」砂糖、珈琲、木綿其他は羊毛、牛毛、山羊等なりと答へぬ

レバ市の水道

余前日布哇に着きし時に水道の工事を見たり而して今レバ港を來りて其の水道の一層進歩の状あるに感じたり布哇の水道は家毎に樋口ありて水を要する時其栓を抜く装置なり然るに本港の水道は到る處に鉄樋を設け終日噴水せり潺湲の泉聲は熱帯地方の人民をして非

常に愉快を覚えしむ而して其の水道の源の島内の最高山あるライライワナンカ峯より引き南流せしめてナムブカラウ丘の上に至り茲に方形の一大溜池を作り「セメント」にて内部を搗き固め常に水垢を生ぜざる様日時を定めて之を掃除するにより水色淨潔にして常に鏡面の如し

「コロノビー」余は知事に面晤したる時にレワに在る「コロノビー」製糖場の盛大を聞きしにより同所への

の里程并其の行路の難易を問ひしにスバ港より航海してレワ河を溯り行くにすれば三十哩もあれども陸路より行けば僅々十三哩も過ぎず然れども時として山賊出没し又土人の爲めに襲撃せらるゝの虞なしとせず殆ど人跡を絶つばかりにして河流に橋梁の設けなく山中の荆棘叢生せり寧ろ遠くとも海路よりするの便あるに如かじと余は此事を同行の田代氏は相談したるに同氏曰く左までの困難危険はなかるべし思ふに海路より行きては土地草木等の摸様を精細に探る能はずと余も亦同氏の言に同意なれば即夜(十二月十一日)行李を調へ土地の案内知りたる佛國人ユレック氏を訪尙彼是と謀る所ありしは同氏の紹介によりて本島の動物草木類を蒐集して或る博物館へ送るを職としたる米國人ストーク氏へ田代氏

が博物學者なる旨を認めし一通の添書を貰ひ受け且つ佛語を通ずる土人の案内者一名を備ひ呉れたり此の案内者は印度ブルボン島より移りたるランゲンと呼べる男なりけり斯くて翌曉(十二日)鐘詰并びに麵包の類を携帶しつゝランゲンを先に立てスバ市街の東北に連りし山路深く分け入るに此日雨少し降りしも風動かず炎熱殊も甚しくして満身の流汗泉の如し行くと二哩許にして人跡全く絶え一線の小徑だまなし只漫然と方向を定めて肩にも及ぶべく茂りたる草菜の間を穿ち辛うじて山頂に攀ぢ上れり小憩して谷を下れば其幅十七八間ども覺しき急流行前に横われり余等直も渉りたるに其深さ腰を没したり前岸に達すれば草むらを左右に踏したぎたる人跡を認めぬ此は山中に住める土人の水を汲み來るが爲めに小徑をなしたるものなりと然れど石の滑かにして一步を誤れば忽ち倒る其の險悪なる言ふべからず又行くと數町にして深林に入りしは鸚鵡類の珍禽飛びかはして鳴くもの多し漸く奥深く入るに隨ひて樹根重く蟠り余等手を以て其間を攀ると恰も猿の如く緩に過ぐるを得たるのみ一哩餘にして又一河あり流を遮ぎる大石あり以て憩ふべし乃ち余等衣を脱して水は浴し汗を洗ひしに其の愉快譬ふるものなし再び勇を鼓して進む時に忽見る三個

の土人裸体にして頭に草を蒙り腰に藤蔓を巻き及廣の牛刀を帯して來る其狀の瘴惡なる覺えず余等の膽を冷したり土人も亦余等を見て頗る驚きたる体なりしが案内者の余等を指して日本軍艦の乗組人なりと示せしむ土人打笑ひ我等も其の軍艦と云ふものを見物よスバへ行くなりと云ふ余は始めて安堵し煙草を與へて立ち別れぬ其より行くと幾許ならずして天に聳えし絶壁は土人の家屋兩三軒恰かも燕巢の如く作れるを仰ぎ望む屋外は七八名の土人余等の一行を指して訝る体なりし行くと數歩路傍岩石の間より泉の漲るに逢ひ掬飲して湯を止め此より一條の路を得て競ひ進めば何ぞ圖らん其脚己に泥中へ没したり此の泥澤を行くと一町よして一河の流あり脚を洗ひつゝ遙かに上流を望めば水は滔々として雲際より落ち來れり是れ即ち有名なるレワ河あり河を沿ふて森林に入れば日色爲め昏く露氣肌を襲へり漸くよして森林を出れば一望曠然として滿野甘蔗ならざるはなく數條の鐵路其間に連りて見ゆ再び鐵道に沿ひて行くと三哩許トルトル村に着し佛國人コスベ氏を訪ふに不在なり余等同氏の家僕に請ひ家を借りて飲食し身体を洗ひ衣服を改め待つと數刻に及びし後ち明朝再び來訪すべき旨を告げて門を出ればレワ河の長流の渺々として空に連り芭蕉は翠

色滴るが如き間に花を開きて芳芬たり椰櫚重々叢生して際なく連山其上に横はる眞に一幅の活畫幅と云ふべし是に於て余等先づコロノビの製糖所を一覽せんと云ひしも渡場に赴かざれば船なしと聞きしより更し河流を沿ふて下ると三哩許路上に柵あり柵に頼らざれば通行するを得ず此は隣地と隣地の牛豚が互に混入せざる爲めに柵を以て界とせるものなりと余等疲れたる上に此柵を上下すると數十度頗る困難を極めしも今よして之を思へば一笑柄なりし一体此地方にては官道の外は安に牛馬を通行せしめざるの慣例なり故に此柵を設くるも亦一便法なりと云ふべし斯くて余は田代氏と共に七ヶ所の梯子を上下して漸く渡船場に至りしに小屋に坐せる婦人の容態頗る奇異にして額には菊坐様の金屬を象眼し鼻も其鼻柱と左右の小鼻に三つの輪を垂下せり其小兒を連れて出で來れるを見るに小兒の脚にも七ツ八ツ鈴を付けたる金輪を箱の歩く毎に犬猫の如く鳴り響けり又其首には一圓銀貨十二枚程を涎掛けの如く纏ひたり此婦人の夫はブルボン島の人にて佛語に通じ種々談話せり己に十二年前より移住し來りたる者にて渡守と洗濯屋を兼業し居れりと云ふ折りしも川下の方より旭日の旗章を立てたる小蒸汽船來りければ余等心嬉しく「ハンケチ」を振て之

を招きしに果して金剛艦に附屬せし小蒸汽船にて鮫島艦長井上航海長其他二三の士官乗組み居れり余の右の人々に向ひて山中を跋渉せし困難を語りしに右の人々等も亦不案内の爲め五度まで淺瀬に乗上げたりと互に旅の憂さを語り合ひて暫しが程は打ち與じぬ其より余は小艇を雇ふて河流を渡り「リーストレー」商會の棧橋より上陸せり時夕陽西に傾き河上に返照して其の光景は亦一段の眺めあり余は先づ製糖場の事務長ガフニー氏の家を訪ひ這回見物の爲めにスバより罷り越したりと告げ談話中夜に入りしかば明朝を以て場内を巡覽せんとを約して立去り河岸に至るやガフニー氏の爲めに小艇を雇してモウリム村なる「ワイマス、ホテル」まで送り與れたり抑々此「ホテル」の當地の第一等位する由なれども其實のスバの飲食店も劣りて見ゆるは是非もなし（寢臺のみ清潔にしてなか〜と心地よし）徒然あるまゝ長廊を立てレフ河の長流を眺望するに月東方より上りて水鳥の聲など聞ゆ遠く製糖場なるマナージャーの住宅たる層樓林間を隱見して漁火點々波を焦すの状は恰も隅田川の晩景に髣髴たれば絶海萬里の旅客たる身をして坐るも望郷の情を催さしめたりと黒奴來りて晚餐の成るを告ぐるより卓に就きしに彼のストーク氏の細君と

娘席を在り互に談話しつゝ刻を移して別を告げしが余等始め寢室に入るに及びて充分に跋渉の疲れを休むるを得たりと

翌朝（十三日）早起して水浴し朝食を終りてストーク氏を訪へんとて立ち出でたり先づ小艇を雇ひレフ河の支流を渡りワインカマー村に向ひつゝ獨木橋を架したる無數の溪流を涉りて行くとい哩にして小丘の上より土人風に建築せる大屋を見其の周囲に種々の花卉を植ゑたるなど何となく心ゆかしきまゝ近ければ門前の溪流に脚を洗ひ居たる一老翁あり余等と呼びかけて日本人にあらずや昨夜妻と娘の談話によりて今朝諸君の辱臨あるべきを承知せり僕こそはストークありとて余等を導きて家に入らしむ室内に全く洋風にして昨夜食卓を共せし二婦人も出來りて握手し其より本島より蒐集せし草木動物等の標本を持ち出し一々其の性質并に需用等を精細に説明したり兎角する中正午となり晝餐の饗應あり別を告ぐるに臨んで一家總々情に堪へざるものゝ如く余等も亦爲めに凄然たりし其の歸路は又小艇を雇ひレフ河を横過し製糖場の棧橋より上陸したるは午後二時頃にて余等の製糖場の縦覽を始めたり今此「コロンビー」製糖場の創業を聞くに最初英國人の本島に來りて其地の

同製糖場の沿
革井に内部の
構造

肥沃なるを發見するや最大なるレフ河の濱に於て開拓を試み土人を馴付けて甘蔗を播植せし千八百六十二年の事なりし然るに本島土人は腕力あるのみならず百度も近き暑熱をも物どもせず鞭笞を受くれば能く勞働するを以て忽ちに數万「エークル」の草萊の地を變じて耕地としたり殊も其の甘蔗の太くして我邦の孟宗竹の如く長さ三間に至る其小なる者と雖も我邦の甘蔗も稍々三倍の太さあり而して其の生長は纔に數月にして充分糖分を含むに至る是に於て假に製糖場を設け製糖に従事せしに非常の良品を得たるにより大土木の業を起して千八百六十五年も到り建築の功を終へしは即ち今の製糖場なり其の構造は幅十間に長さ四十間の建物六棟あり悉皆鉄材を以て建築したる三階造りて屋根は亜鉛にて葺きたれば日光の熱に感じ易く其内も入れれば暑氣蒸るが如し勿論四方又は屋根裏の中央よりも充分に風入れ宜き様には造りわれど機械場の如きは百四十度以上の熱度あり余等爲め満身の流汗拭ふに暇あらず扱甘蔗を運搬するの盛んなる汽車と汽船の便を利用し三十分毎も一方は沿岸より汽船にて運び一方は近郊より汽車にて運ぶと晝夜更に間斷なし又場内には七箇の大蒸鑪を据え付け汽船と汽車より直も甘蔗を機械場へ送り込み機械に掛る様にな

しあり其の機械は百六十馬力の機械二個、五百六十馬力の機械二個にて一回轉すれば數萬本の甘蔗は三寸許り切斷して壓搾機の上へ墜落するや同時に熱湯の雨の如く酒ぎ來り糖分は湯と混じて其下の溜に滴り其糖は更も第二の壓搾機にて之を絞りつゝ槽捨場へ送るなり試みに其糟を檢するに恰も松魚節の出しガラの如く絶えて一點の糖分を餘さず其乾きたると火を點すれば直も燃ゆる程にて水分までも全く盡きたるを以て日本の砂糖槽の如くに蟻の附くとは更も見ざるなり又其大溜に滴り落ちる糖汁は十六臺の大唧筒にて之を四階の上に汲み上げ其所も又一つの溜あり此溜より順次も桶樋を経て大釜に送る装置となれり又其大釜の數は九つありて順次に熱度を與へ糖汁は一々其釜を通過しつゝ蜜分は其釜の下の溜に滴り落ち水分は蒸發し去り愈々其末なる九番目の釜に至る時は悉く糖分のみとなりて殘るあり其九番目の釜より右の糖分は一の喇叭形をなしたる大上戸に充るや其大上戸の左右も滑車付き三階と四階の間に架したる二條の鉄軌を走り銅製の大桶に觸れ之を桶内に傾瀉するを忽ち他の鉄軌を回走して元位に復す又其桶の絶えず回轉すると獨樂の如く甚だ急もして十分間に凡そ五百回を回轉するものなるが其中の糖汁を冷して結晶せしむるが爲め

りと云ふ斯くて全く結晶するを度として順次其桶の回轉を止め量目一噸を十箇の「ブツク」袋に入れ人手を以て其口を縫ひ之を瀛車に積みて倉庫に收む此の如くにして凡そ一週間に平均五百八十噸を製すと云へり余等は場内を一覽せし後一人の案内者を借り甘蔗畑を見物を行きたり途中土人並に印度人等の余輩の一行を見て奇異の想をなし到る處群をなして四邊を圍繞し一々案内者を捕へて何國人にして何の爲め當地に來れるかきど聞き之れが爲に屢々進行を妨げられ大に困却したりき

余等之を製糖場の長たるジエムス、ロベルトソン氏に聞く工夫は支那人を用ひず皆印度人を役する事とせり(余の始め此所來り印度地方に於ける各種の人類群集し居る處として一の支那人を見ざるは實に奇事なりと之を訝りしが同氏の話を聞きて漸く其の理由を了解するを得たり)而して労働者並に事務員を合して人員八百名に近く毎月の給料と諸費は五千圓餘又必要の物品購入器械場等の諸費並に修繕費其他の臨時費とを除き尙は九千圓を消費すと云へり然るに之を除き去りて製糖賣上高より生ずる純益金は毎月五六千圓ありと尙は同氏は旅館まで其の精算書を送付するの約ありしも此夜余等の旅館に至らざりしが爲

めに精算書を領受する能はざりしは實に遺憾なりと云ふべし再び説く余等は案内者と共に甘蔗畑を巡覽せしが此案内者の其名をシンマハマヲと呼ぶ印度人にして少しく英語に通じ居れり余等種々製糖場の有様を聞きしに彼の談話より労働者の印度人とサモツ土人のみよて其耕作法の蒸汽器械を用ふるにより左のみ人力を勞するとなし又植付と草取り印度人の役にして甘蔗を蒔取り汽車に積むはロージー人の受持なり尤も其の甘蔗は非常大なる者なれば腕力逞しき者は非ざれば一本も容易に蒔取る能はず故にロージー人の中よても最も強壯なる男子を選び一日は五十本より六十本を蒔るを以て一人役とせり余は嘗て布哇の製糖場にて出稼の日本人が労働するに一日に四十本蒔取るを一人役と定めし由に聞きしとあり然るに本島の甘蔗は布哇に比して稍々大あるに一日に六十本を蒔取ると云へばロージー人の労働力は決して日本人の企て及ばざるものなるを知れり又場内には印度婦人の雇はれし者ありて袋の口を縫ふを業とせり其の給金の男子よて食費を給する外に一ヶ月五弗と三弗の二等に分ち婦女は一週間を二「シルリング」と三「シルリング」の二等に分ち其の休業は日曜日と土曜日の午後四時より與ふれども常に晝夜を通して卅分づゝに交替休息する

のみにて間斷なく労働せり然るも其の食の晝夜各々二食よして日中は午前十一時と午後六時又夜中は午後十一時と午前六時なり（尤も其の間に時を定めて芋を興ふる由なり）労働者皆食物の乏しきを訴ふれ其其の食料は米と牛肉魚肉等なりと云へり斯くて甘蔗畑に至れば一望更に他草木の影なく其の運搬の爲めに布設したる鐵道線路の五哩より十八哩までの者數條の多きに及び又汽船は其の積量三十噸の者八艘ありと云ふ此日余等の一覽し畢りて製糖場の側なる茶亭に憩ひ煙草と銀錢を案内者に與へて還せしに偶々印度人ペインターなる者小艇を浮べて余等を迎へて一泊せしめんと乞ふより時に取りての一興なるべしとて勸むる儘に其宅に赴きしにレワ河の岸に臨みし土人風の家なれど寢臺と蚊帳も餘り不潔ならず先づ大鉢と清水を盛り來りて面を洗ふべしと勸め洗ひ畢るや牛乳と紅茶を出す此の印度の風俗ありと云ふ少頃にして又夜食の饗應を受けたり（因に記す當地に住する印度人の家屋の孰も八坪程の堀立にて四面は小竹を編てハメ板に代へ入り口は只一方に開きあり其内部を二間に分ち一を寢室と宛て一を客室とす兩室とも床なく土上に板を敷き其上に「アンペラ」を敷詰めたり又食卓の設けなきを以て食時にハ椀皿を人々の膝前に列べ指を以て

之を食するを常とす）當家の主人は回教信者あるにや室の一隅は教祖「マホメット」の畫像を掲げたり然れども彼は其教理を通せざる者と見え其額を指して是は往昔の國王よして財寶を山の如く集め以て己を欣慕する者よのみ興ふるなりと得意に説き示したるより孰も一笑を催したり此夜月光晝の如く清風徐々來り心神頗る爽快あるを以てペインター及びランゲンを伴ひ市中を散歩せしに鼓笛の聲あるを聞き案内者に問ふ茲はカルキッタの踊を興行する所あり君若し意あらば往て一覽すべしと云ふ乃ち案内者に誘はれ往て之を見物したり其の場所は市中より三町程甘蔗の畑を通過し西はレワ河に臨み南東に椰梢の森林ありて北に遠く製糖場を望む所はカルキッタ人の村落ありトルトルと云ふ（カルキッタ人の此所は移住せし原由は彼の製糖場の持主が嘗て印度人を雇ひ來りて此に移住せしめ袋入れ等の職工に充てたるよりカルキッタ人の我もくと來住し遂に數千人を見るに至り其中に製糖所は労働するのみならず小店を開く者なり雜業、傭役、洗濯屋等種々の男女の職業出來しより今の藝人までも同地より渡來するに至りしなりと）其村の中央に歌舞の場あり夜來風涼しく風景絶佳にして人々納涼と出で歩けば熱帯地方の常なれば見物人の大入りて殆ど

カルキッタ人の踊

カルキッタ人の踊

圖の舞踊全七十

扮打の舞踊人土々ツカルカ圖六十四第



ローリーの記

ローリーの記

三百五

三百四

未定

立錐の餘地なき程なりしが案内者ランゲンは場に至り日本の軍艦より見物人來ると云ひければ在合せし人々は皆上席を譲り余等に見物せしめたり扱て其踊は稍々西洋の「コントルダンス」に近し元來此本國は中央印度の大古より開けたる國なれば歐羅巴の踏舞の却て印度より輸入したるものには非ざるかと余の思へり偕踊の場所の周圍に樹木ありて平坦なる處を選び見物人は其の周圍より立てり大概夜を以て踊を興行するに依り木綿にて製せる灯火を點す此は鏡の喇叭形の直徑五寸もある蠟燭立様の物に木綿を詰り込み之に椰槽油を注ぎて點火するものなり燭を取る者は左手に之を持ち右手は油德利を持ち火勢弱ければ椰槽油を注ぎ掛く數人此燭を持って立ち居る故に滿場畫の如し其地調子より笛あり大鼓ありて笛は右手に一本左手一本持ちて二本を一時は口で當て、吹き左手の笛は上調子を發し右手の笛は下調子を發して能く互に緩急の調を成す大鼓小鼓は相和し打て歌ふ其歌は美音の者を選びサモワ、ヒージ等の歌の如く喧しからずして耳に適せり舞妓の女二人芳紀執れる破爪前後の者にして雙々手を握りて舞ふ其の態度輕盈蝶の春風に閃くが如し服裝は金冠に珠玉を以て縁を取りたるものを戴き耳は金銀の「モール」或は金銀を以て作れる耳飾を

付け胸部腹部等へ金貨と銀貨を連ねて帯び腕も同様金銀貨或は珠玉を垂下し舞ふ毎に珊瑚聲あり又半袖の上衣紫或は赤き絹を以て造りたる者を著し袴は紅白の立褌なる腰廻裙一丈餘の者を著し其脚も金銀の飾ありて紅皮の靴を穿てり殊に胴に用ひたる帯は玉を貫て造り灯火に映じて光輝爛燦目を奪ふと玻璃製の人形と一般亦た可憐なり左右の手の織指の幾箇となく指環を穿ち其にて宛轉として歌舞する伽陵嚩伽の飛びかはして鳴くが如し一見人をして鎖魂せしむるを免れざりし又踊の一節の切れ目より嬌眸を四方に注ぎ見物人の中紳士らしき人物ありと認るや直に群集を押し分けひらくと飛來りて憑り纏頭を與ふれば其の貨幣を朱唇に含んで飛び去る其の身体の矯捷なるは蝶禽も及ぶまじく見えたり斯くて金銀貨を満口に含みながら尙は能く歌ひて飛び去る其風彩は殆ど佛畫の天女の出現を目撃するの心地せり

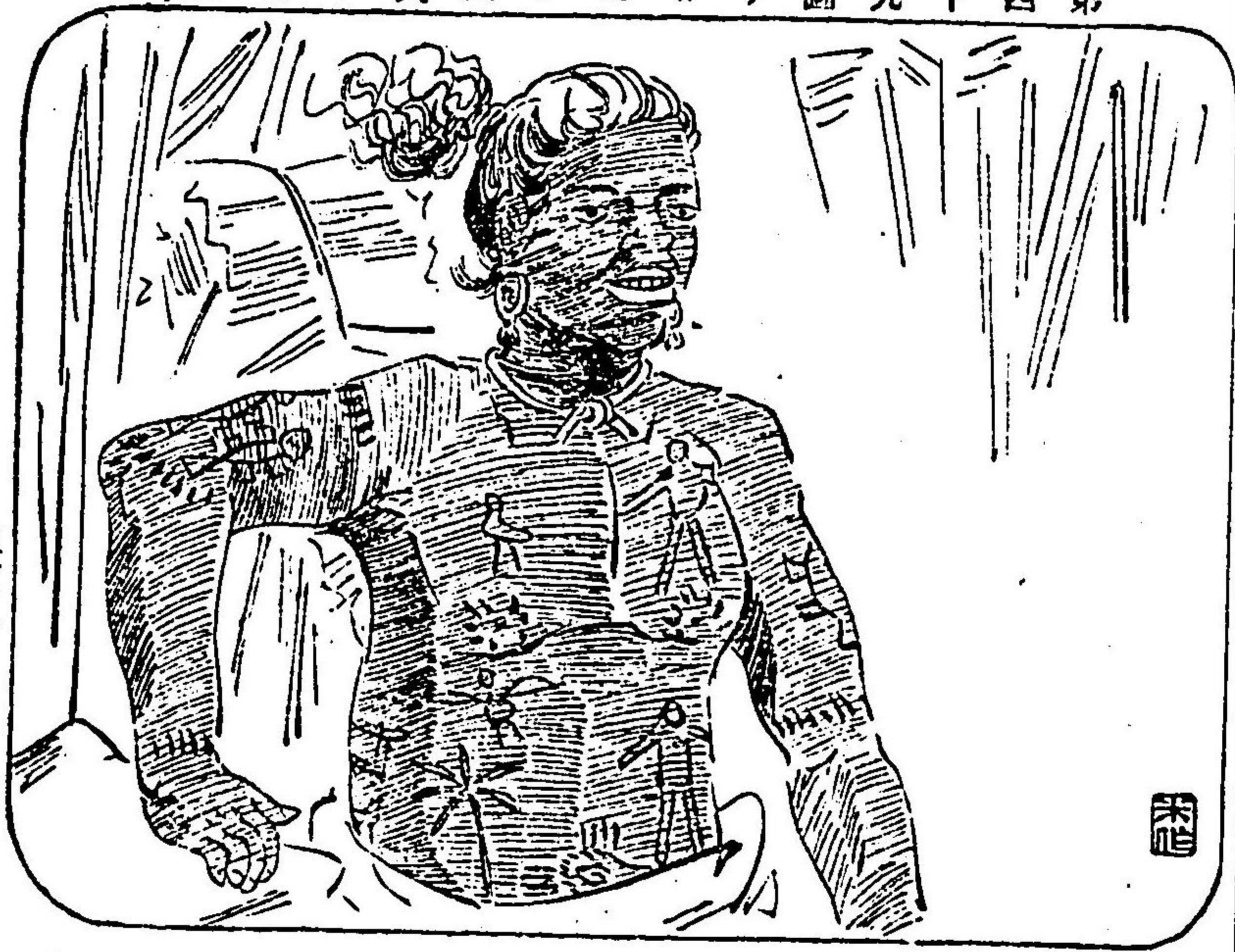
右の踊を見物し終りたるは鷄鳴曉を告ぐる頃にして天を仰げ月光既に西に没し獨り星斗の光を益して中天に輝けるを見る歸路一土人の家より少憩炬火を作り路を照して旅舎に歸り僅に一睡を催せしが間もなく夜も明け渡りたれば主人は先づ起きて朝露の準備をなし

余等の目覺めて嗽洗し終るを待香蕉椰櫚の實に紅茶を添へて侑め次で牛乳を出し更らに朝餐を供したり印度人の大食なる實に驚くべし是又依て考ふれば昨日耕地を案内せし製糖場の役夫が食事の不足に苦情を鳴らせしも無理ならぬことと思へる余は日出る頃當地を發しレワ河を上下する「ウイリヤム、ビ、スコット」會社の汽船「ロコ」號又搭して歸艦せんとせしにランゲンの水路の險惡なるを説きて切之を止むるに遂に舟行を見合せ再び陸路を経てスバに歸るに決り午前九時出發せり此時ペンターも余等をスバまで送り歸路日本軍艦を見物せんとて土人並に印度人四五人を伴ひ同行することとなりしかば余は意外に數多の同行を得て心丈夫になりたるを喜びたり此日の幸ひに好天氣ある上一行各自に本國の自慢話を持出し果ては互に己が國々の歌謡を唄ひ始め前者ヒョーシーの歌を唄ふれば後者のカルキツタの歌を唄へて之に和し一人ブルボンの俚歌を唄ひ出せば他のマルバルの竹枝を誦す余も得意の我邦俗謡數曲を歌ひて衆に聞かしめ爲めは行路の峻險なるを覺えず偶々奔流の前途に横たるあるも土人の背を依りて川越をなしたれば先の如く靴を脱し袴を棄けて自ら渉りするの勞なく且つ異禽奇鳥は深林に在て清音を弄するなど心神頗る愉快にして毫も疲勞

文藝人士ヒョーシー島圖八十四第



文藝の人士ンモロサ圖九十四第



を感せず午後七時スバの市中に安着したり斯くて余は此旅行の爲め衣類の汚れたるを洗濯せしめんと當港まで洗濯屋を營業とせる佛國人ジョゼフ氏に依托し此夜は同家に宿泊せしが翌朝に至り一着丈け洗濯出来せしかば早朝より常市に在留せる歐米人の中にて四五の學者或は博物家などを訪問し種々の古器物及び土人の製作品を見たり

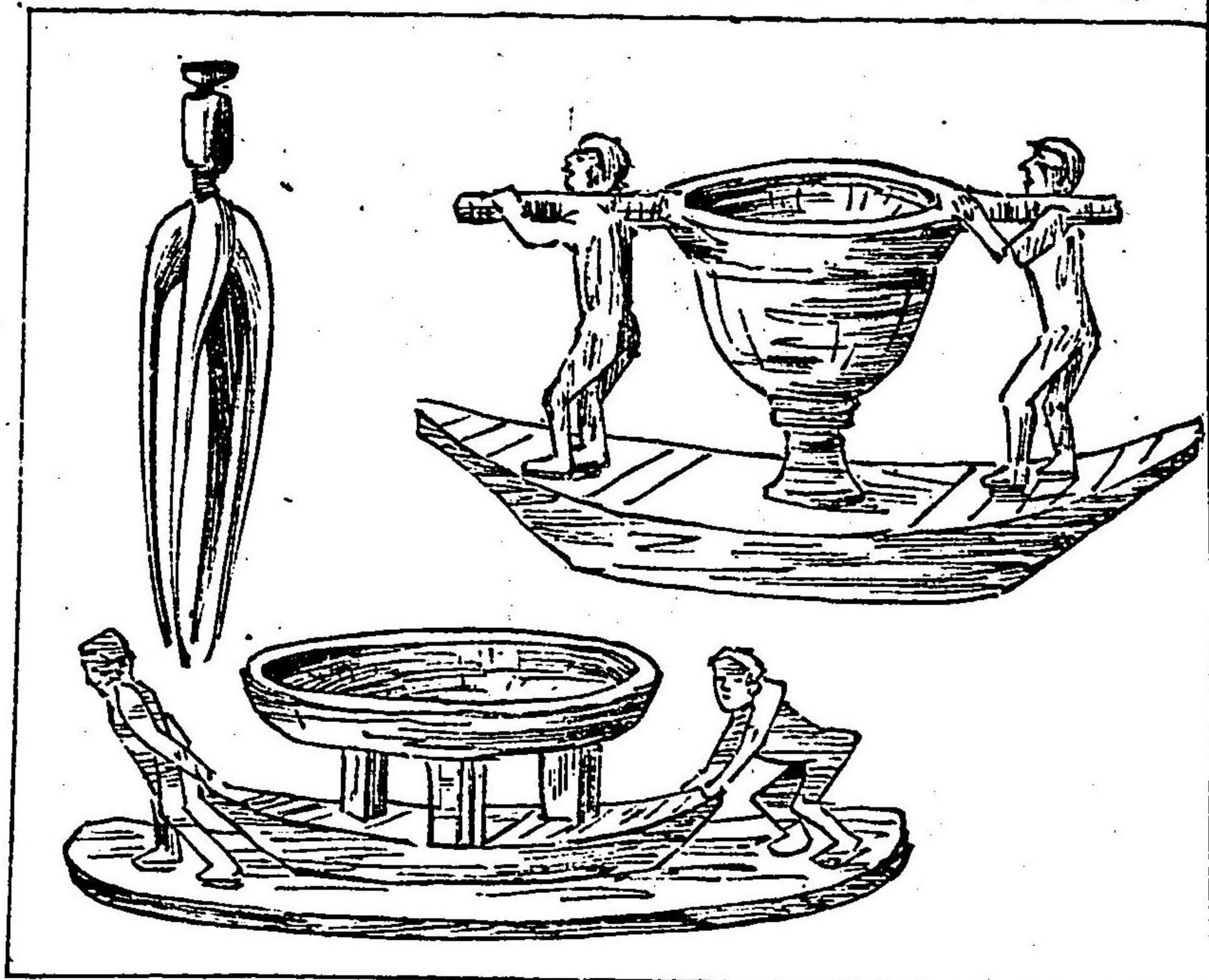
ヒーシュー、サ
ロモン兩土人
の文身

本島土人の文身の他島の土人と大に其の方法を異よせるを見る即ち圖の如く面部兩腕を始め手指に至るまで刀尖まで皮膚を搔破り種々の模様を作る其の模様は別に彩色を施さず蚯蚓の儘にて現はれしひるなり故に本島土人の文身は黥文と云ふよりも瘡の刀創と云ふべきものなり又本島にて見しサロモン島土人の文身の動物の形狀を体中に黥し人をして一見其奇に驚かしむ但滞在日數の僅少にして此の兩島土人の文身が位階を表する記號とあり居るや否や等の事を探究するに遑わらざりしは余の頗る遺憾とする所あり

人肉を食する
器具

本島を始めサモワ、サロモン等の土人が三四十年前まで盛んに人肉を食し居りし事の屢々記載したるが本島に滞留せる獨逸人レンブマン氏の如きは現に之を目撃したりと今其話を聞くに氏の今より二十年前サロモン島に渡航せしが此時同島土人は海岸の砂場に於て大饗宴

第十四圖 人肉を食する器具



ヒーシュー島の記

を開き其側に二十餘名の囚虜を繋ぎ置きて一人づゝ之を引出し生きながら其の手足或は股の肉を殺ぎ取り其虜の號泣悲鳴せるを見つゝ鮮血淋漓たる肉片を舌舐を鳴らしながら啖ふを見たりしが其の無慘虐酷の狀は今尙は眼前に映出して忘るゝ能はずと云へり此に圖する器具一二の人肉を盛る皿にして一は之を食する「ホーク」(是の鐵木にて造り四本の刺あり)なるが此器の何處の土人も古は必ず一箇づゝ所持せざるは無かりしと又本島及びサモア島土人等は孰れも食物を食ふに匕箸皿鉢の類を

用ひざるに人肉も限り何故も特に皿、肉刺を要するかと聞くに人肉の脂肪非常に多く且つ鮮血流散して木葉上などに所詮置くを得ざるを以て圖の如く底深き木皿を作り之に切取りたる肉を盛るなり又手にて之を食するは膏血の爲めに汚るゝを避けんが爲め斯の如き肉刺を製造したるものなりと云ふ

木の葉蟲

「リップ、インセクト」譯すれば木の葉蟲と云ふ此蟲は今回の航路中よての本島にのみ見られたるも他島も於て嘗て其類を發見したるとなし土人の話に據れば太平洋中にヒュージー島の外には絶えて此蟲を生ずる島なしと其狀は蟬螂と少しも異ならず然れども蟬螂の如く人に向ひ斧を振り擧ぐる勇氣なき等其の性質頗る異なり又翼及び腹部の紋理形色宛然たる木の葉よして餘程見馴れたる土人にあらざれば咫尺に在るも之を發見する能はず又此蟲は何の木にも産すると云ふにあらざり土語に「ギヂエーク」と稱する木にのみ栖息し此木の葉のみを食して生活す「ギヂエーク」樹は日本の栗に似て其葉に紋理あり只栗に比すれば稍や圓形なり本島に在留せる動物家などの土人に命じて此蟲の産する樹に就き其卵を求むる甚だ勤れども未だ之を發見せし事なしと茲に本島もマダム、サルモンと呼び蝶及び種々の蟲類

第五十圖の木の葉の蟲



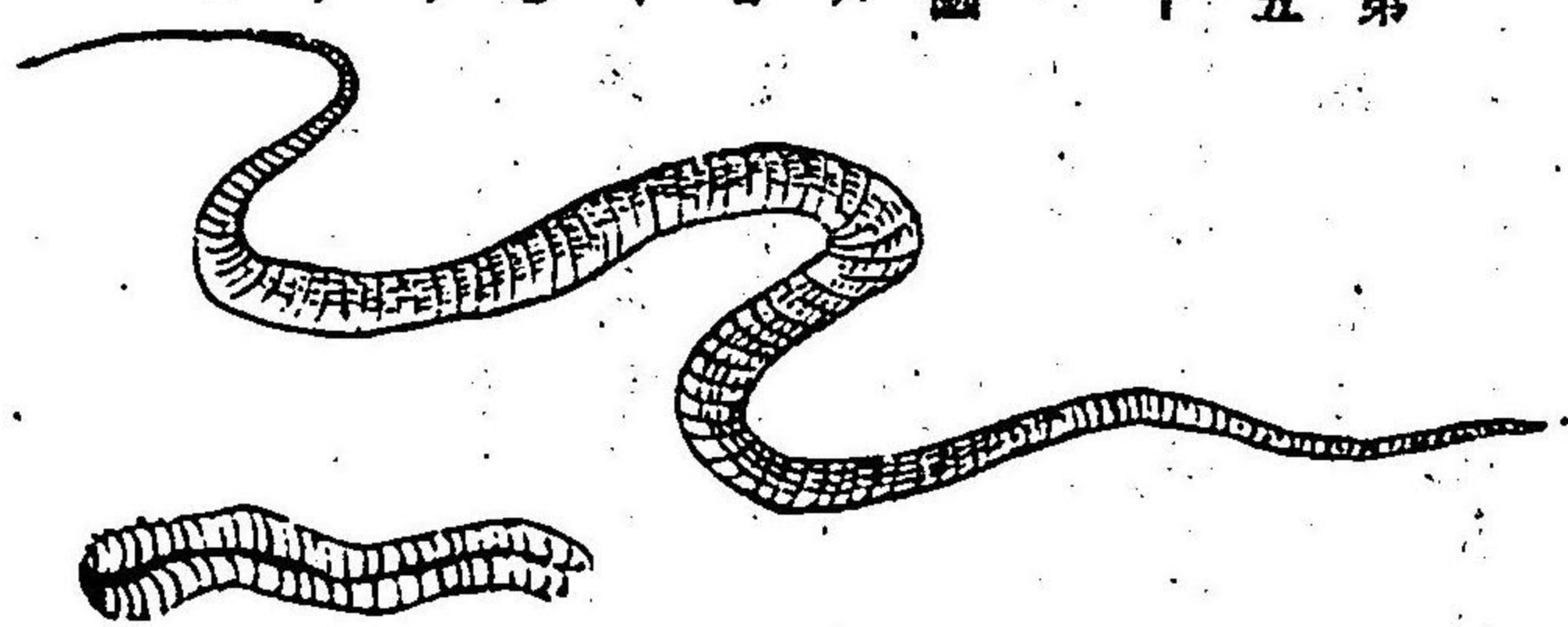
ヒュージー島の記

を集聚し居る婦人あり此の婦人の英國人にして本島に二十年も在留せり然れども未だ此蟲の卵を見ずと云へり此の婦人の説には必ず卵生のものに相違なければども卵を己の羽翼間に生み付け木或の地上に卵を落さるが故に未だ誰とて此蟲の卵を發見せざるべしと試みよ之を飼ひ置かんぞされども籠等に入れ置くときは二三日にして死す唯庭園に「ギヂエーク」の樹を移し植へ放ちて飼ひ置くを得れども常に其木の葉も紛れて認め難き程なるが故に生産の狀を詳かよする能はず其の幼蟲の海濱も生ずる我邦の船蟲の如くして翼なく亦若葉の芽立ちしと異ならず此の幼蟲を捕ふるに老蟲を捕ふるより一層認め難しと云へり總て蟬螂の類に限らず孰れの蟲も皆四翼あるものなるも此蟲に限り

兩翼のみにて上羽の下に赤或の茶色の薄き翼を持たざるは殊に普通の羽蟲に異なる所あり且つ他種の樹木に寄息する事を爲さざるに依り甲樹より乙樹に移る時より一と飛びに飛行して必ず己の生せし樹を求めて其處に止まるものなれば翼の力も他の羽蟲に比すれば遙に勝りて強きものなり之を捕ふるの法は「ギチエーク」樹の木の葉稠き處に至り下より硫黄の烟にて燻す時の植物の生葉は動かざれども此蟲は流石に動物なれば烟に咽て飛出す所を捕ふるを得るなり然るも其類甚だ少くして木毎に必ず數疋を捕ふとを得ざれば其土地も賣買の甚だ高價なり余の山中を跋渉して之を捕へんとすれども容易に之を認め得ざりしがサルモン女の盡力にて漸く三疋を得て「アルコーン」に漬し持ち歸りたり見る者其奇に驚かざるのなし同女余に蟲を贈りし時に語りけるは歐米各國の動物學者の此蟲を得んが爲に態々本島に渡來する者往々にして之あり然るに手を空うして歸る者も少なからず纒一日の内に三疋を捕り得たるは誠に意外の幸ひなりと云々(此圖は其眞形を模寫したる者なり)

「メローピリ」
「ラス」
レバ港に一奇蟲あり其の名を「パロ、ピリテス」と云ふ該蟲は同港の中へ生息すれども平時之を見し人なく又漁具等も罹りたるとなし只年々一度即ち十一月十五日の朝より晩に至る

第五十一圖 パロピリステス



迄海上に浮遊するものにして土人の之を探り捕獲して貯蓄し以て祝祭日の料理に充つる

あり祝典に際し若し該虫を料理の内に欠くときは其の禮式を欠くと同一に當るの習ひなれば土人は該虫を貯ふるに心を用ふると殆ど我國の往時より於ける端午の菖蒲重九の菊花等の如くせり其虫の形は我國の蚯蚓の如くにして只其頭部と尾端は極めて細し其色の深緑色にして試に之れを水中に放てば其水も亦た緑色に變ずる程に緑汁を散ずるなり其味は海鼠の如く淡白にして塩味を帯び且つ磯臭き匂ひを持ってり惟ふ酒の肴や用ひさば至好の珍味なるべし該島の土人の年月を數ふるとを知らざるを以て新月を見る毎に之を數へ十一ヶ月目に至れば夜に月光を見て此虫の浮き立つ當日を卜知し其日に至れば拂曉に獨木船に乗り各々器具を携帶して海上に出で以て虫の浮び出るを待つ其虫の浮び出るや殆ど青天に片雲の浮ぶが如く此に

一群彼も一群と浮流する所を網して船に取入るなり其群の大なる者は五十一メートル四方も

「マングロープ」樹の話

あるものありて當日全島の土人が其群を逐ふて之を漁する様を見る亦一の奇観なりと云ふ
 余は是迄太平洋諸島間に數次航海を試みしを以て隨て目も觸れし奇木異草も多かりしか
 ども今回此「マングロープ」樹を見るも及んでは殆んど驚倒せしむるの想ありたり其質は
 極めて堅韌にして之を輪形に曲ぐるも更も折るゝの虞なきは宛ながら銅線に異ならず其の
 皮膚の肉色にして稍々杉と類す又其枝を生ずる模様は恰も桂樹に髣髴たり而して平常の木
 と異なる所の其枝の根と幹との所を選ばずして不規則に生ずるとなり故に上に向ふて根よ
 り生ずる枝は水より下に萌すも更に延長して高く其梢とならぶまでになり幹より下は向ふ
 て生ずる枝の梢より萌せるも下降して水に入りて其儘に根となるなり故に上下互に錯雜し
 て或は上昇し或は下降して林中恰も機絲を掛けたるが如し又此木の生ずる所の陸地にあら
 ずして海上にのみ萍の如く浮生する實に奇異なる物なり此木一株海面に浮ぶときは須臾に
 蔓延して數年の内に數十里の海面に茂林を作す故に諺に「マングロープ」樹の海面は岡を
 爲ると云ふとあり今此木を見るも及んで初めて其諺の眞なるを知れり其實の長さ一尺餘一
 二寸圍りの太さありて蒂の方細く花落の方太く恰も長蕪の如し而して小枝毎に數十個の實

第五十二マングロープ樹の海に生ずる圖



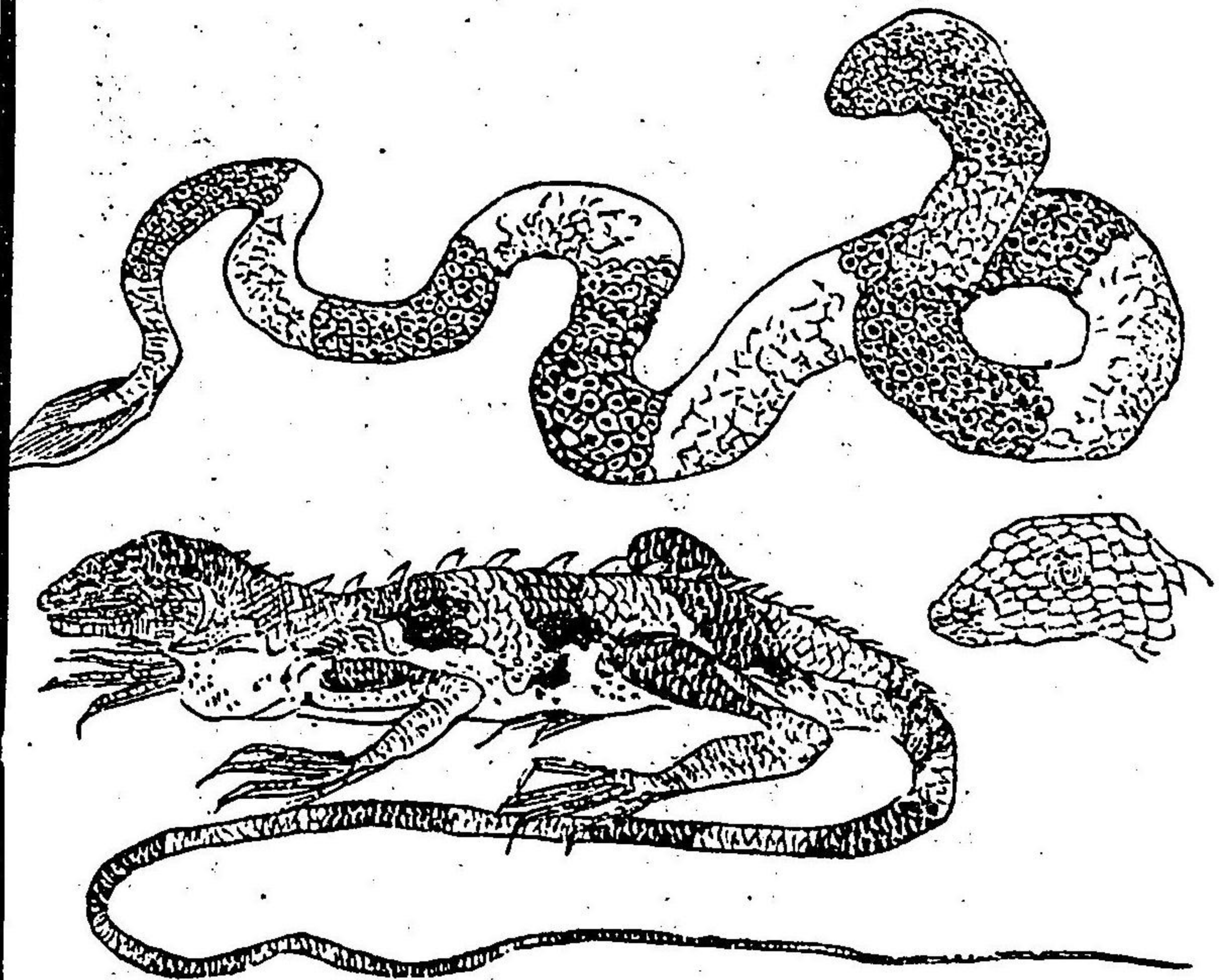
ヒージャー島の記

を結び其様は取りも直さず大根を連ね乾したる如し數月を経て此實海面に落つれば花落の
 太き方下になり帯の細き方は上に向ひ釣道具の浮標が水上に立ち浮ぶが如く浮びて親木
 の根邊に標ひ寄るなり尙ほ他木と異なる所は常の草木の實の土中に落るも發生するも當り
 倒れ上下回轉して初めて貝割の芽を萌すなり然るに此木の實は花落の下は向ひ帯は上
 向ひたる儘に枝を離れて海面に落ち其儘に花落より根を生じ帯より葉を生じて其實の
 所は其儘幹となるものなれば此實親木の根に簇々と聚り苗木となりて老樹を纏ふ加之此地
 は冬夏の別なく能く草木を繁茂し霜雪凋傷の時なきを以て其の生長甚だ早く忽ちよして苗
 木も花を生じ實を結ぶにより其蔓延の速かなる垣を結ぶに異ならず余は一日日本島内地を旅
 行せしにマムブカロウと云ふ河より海濱に添うて東北へ行くに海上一面此木あるを見たり
 然るに元來苗木の海底に根の届かざる内の海面に漂流するゆゑ河流の海に沃く處は其水も
 浮び止る能はず爲め林中は一條の水路を開き其の水路を狭んで鬱々叢生し其間を小蒸溜
 船にて通過するときは其身の正しく海上に在るを覺えざるなりマムブカロウ河は其廣さ二
 百間餘にして長さ數十哩ある大河なれども此河の兩岸に此木蔓延し兩岸を蔽ふて以て一目

六七十間の幅ある川に見ゆ流を狭む林中は美麗なる鸚鵡等の珍禽異鳥棲息して好音琴の
 如く爲めに人をして極樂浄土と遊ぶの感想を提起せしむ其樹の高さの數十丈にして根を水
 面より抽出すると四五尋なるを以て土人の其の蟠根の間に棚を架して梁を造り根下を游泳
 する魚類を捕ふる場と爲せり故に蟠根の間を舟中より眺むるときは棚架恰も蛛網の如く土
 人が游魚を釣刺し或は銛を投する様宛が猿猴が遊戯するに異ならず又本島に在留せる
 英人は此の林樹を中央より伐拂ひ樹根を以て土臺となし新道を築きたるに樹根堅く余を擁
 するを以て缺損の憂ひなく以て車馬を馳するに足れり此の新道の盡くる處は即ち橋として
 其長さは七八十間此橋の中央より海の方に向ひ眺望するときは無数の蟠根水平を蔽ひて清
 波に其影を倒映し頗る奇觀なり

海蛇と大根

本島に一種の海蛇あり其長さもの三四尺ありと云ふ余が目撃せしはレブカ港に住せる獨
 逸人ホーダー氏の所有にして「アルコーン」に漬しありしものなり其長さ二尺五六寸胴の太
 さは回り一寸五分程あり全身藍鼠の色にて細く線を取りたる龜甲形の鱗ありて背部は笛巻
 塗の如く二寸置き程は淺黄と紺色の斑をなせり又腹部は稍々黄色を帯び頗る奇麗にして恰



第五十三海蛇及大蛇圖

も絹糸にて製りし打紐に異ならず其目は鳩目にして緑白く眼精青色あり殊も奇異あるは口にして其大さ漸く一粒米を容るゝ程にして一見すれば巾着の口を振りたるに似たり故に其内部に歯牙のあるやは知らざれども外面より其口を開き窺ふも容易に歯牙を発見する能はず尾の常の蛇の如く段々細りて其先に至れば三寸程は鰻の尾の如く鰭を成せり而して海岸に上れば蛇の如くに匍匐して走るも海中に入れば忽ち游泳するに左右の鰭なく只尾端に付きある鰭のみなれば其遊ぎ方魚類の如くならず宛がら蛇の游泳するに異ならざれど

も其頭を水面に出さるるを見れば全く海中に棲息するものと知るべし然りながらエラを持たず又鯨魚などの如く含みし水を洩す所なければ常に海底に沈潜する能はざる故に海岸の岩石等の上に登り居て時々水中に游泳し好んで海草の中に入り魚類の卵子或は海草の類を食ふと云ふ故に我邦房州等の海岸其他は産する海蛇の如く人を噛み惱ます等の害を爲さず又本島の林中に一種の蠃蜒を産す其大なるもの長さ稍々二尺餘ありて胴の太き所に至れば三寸回りもあり頭と目口との有様は恰も龜に異ならず全身の眞の蠃蜒あれど脊筋も一行の逆隣あり鋸刀の齒の如くに起立し指を以て之に觸れ試むるに恰も魚の刺骨に異ならず全身に細鱗を鍍ひなし口より鋭き歯牙を持ち其の手足は野雉の足に類し鋭く細き爪を生せり又其全身の青地に深緑の虎斑を彩り腮より胸部の黄色と大赭色とを以て水紋様をなし腹部は薄黄色にして中央に薄赤き色あり胸部の下より股に至るまで一線を成せり好んで蠅其他の蝨類を食ひ以て深林に棲息し鋭爪を以て樹木に登ると恰も平地を走るが如し土人若し之を捕へんとするも緑葉の間を遁るゝとさし葉の色に紛れて認むるを得ず故に取得る甚だ稀なるを以て土人も之を捕ふれば籠中に飼ひ玻璃器に收めなどして甚珍重せり人

害を爲すや否やを尋ねしに手を以て之を捕ふるべきに能く土人を嚙むと雖も土人より彼も害を爲さざるべきに彼より土人に害を爲すとなしと云ふ其類を傳ふるの卵生なれば時々土中より此卵を發見するにありと土人若し此卵を得れば土を盆に盛りて其内より埋め樹蔭に之を置き蔽ふ網を以てすれば其孵化するを見るを得べし又之を養ふに蚊繩の類を以てすれば恰も魚兒の如く人に驚かすして永く飼ひ其成長するを見るを以て好事家或は動物學者などは頻り又此卵を求むれども稀に發見するのみ其の外蜈蚣の大なるものは長さ一尺に近く幅一寸程の者あり又其幅二分許にして其長さ一尺五六寸あるものあり又蜘蛛も大なると蟹の如きものあり孰れも其狀の異常なるに驚きたり

ヒーター島土人の話

タヒチ島の社會群島の一にして太平洋諸島中に在て外人との交際最も古き島なり同島はサモア群島のチヌチヌイラ島より少く大なり然れども其の文化の進歩に至ては頗る遅緩にしてサモア、ヒーターと著しき相違なし唯教育の普及せる點のみ他嶋よりも較々進歩せるを見るのみ土人の氣質の男女ども極めて温和にて且つ閑雅なり家屋等も矮少粗造なれども各家回らずに笆籬垣牆を以てし邸内に芳花奇木等を栽植して花園を造れり蓋し是等の

風の歐米より移住せる人々より教へられたるものなるべし、傳へ聞く今を距る二百餘年佛國の軍艦一隻は遠洋航海の爲め南洋に赴きしまゝ恰も我邦の敵傍艦の如く行術知れずなりし事ありしが其の理由は同艦の各島を経てタヒチ島に来るや土人の歡待一方ならず就中同島婦人の乗組員を遇する非常な深切なりしかば水兵士官等其情に絆されて一人隠れ二人逃れ爲めに上陸せし乗組員の歸艦せざる者過半数に及びしを以て艦中に残れる艦長始め士官等も今は如何ともせんすべく遂に乘議を以て不同意の者を殺害し物員同島より上陸して各々土人の婦女と結婚し其儘同嶋人と成り果てたり其後數十年餘を経て佛國軍艦再び同嶋に來り始めて其事の顛末を知り得たれど其時の已に處刑すべき者の大半死亡し盡し稀に生残れるも老朽の者のみなりしかば佛國政府も已むを得ず同嶋を占領して其の所屬地となし漸く結局する事となりしと往昔より艶色を以て強國の軍艦を降伏せしむる程の勢力あるを見て其の土人の性質を知り得るに足るべし余り同嶋に渡航せんと企て居ると久しと雖も未だ機會を得ず然れども其の土人に諸嶋に於て屢々出會せしとありしが性質の傳聞の如く極めて温和にして且つ愛嬌も富み毫も癡惡の風なく野蠻中にも亦斯る別社會あるかとの



ローツィ島の記

感覺を起さしめたりき却説此に載する圖は同嶋の婦女にして右方は白哲人と土人の雜種な
 り抑も同嶋の婦女は古より白哲人に接するを以て他嶋の土人よりの眉目美しき婦女多く現
 に此の婦人の如きも其一にして容貌殊々艶麗なり又左方ある婦人の純然たる土人として
 骨格顔色ともサモア人に異ならず余が本嶋のレブカ、スバなどよて見しタヒチ人の孰も此
 の如き婦人なりし此の兩人の頭髮の西洋婦人の如く四ツ打にして後部へ長く垂下し頭に花
 冠を戴けり又左方なる婦人の肩より脇に掛けて斜に帯べるもの釣草、葛或ハ藤蘿の類に
 て輪狀を作り之に香氣ある花卉を飾れるものなり又腰部の單に草葉にて蔽ふる如くに見ゆ
 れ此葉の下ハ草葉を細裂して織りたる我邦の「モッコ」樺の如きものを纏ひ其上を草
 花にて飾れり又右方の婦女の手は持てるは背部に集る蠅を追拂ふものにて棒の先に「ハン
 ケチ」を附着したるなり（因に記す南洋諸島に蠅の多きとは既にマルシヤール島の部も
 記せし如くなるが各島土人は孰も之を追拂ふ道具を作りて常に携帯せり其製は種々あり就
 中最も美麗な作れるハワイ人の作にして鳥の毛にて之を作れり又サモア人は草の葉を細
 く裂きて作る其狀恰も拂子に似たりヒーシー人の頭髮にて作る是れ亦拂子に異ならざ
 り

ヒーシー島の記

るなり)

本島土人の言 本島土人は數多の言語を有すれども之を記すべき文字なきを以て本島在留の宣教師は羅馬字を以て之を書することを教へ今は土語に書したる經典並に教課書等あり其「アルハベット」は左の如し

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z (此中LXの二字は不用なり)

又其言語の概略を左に列記すべし

ズア	一	ルア	二	トル	三
ワア	四	リマ	五	オノ	六
フズ	七	ワル	八	リア	九
チン	十	チニカズア	十一	ルア、シヤガブル	二十
ナンダラー	百	ナンド	千	タマーグ	父
チナーグ	母	タチング	兄弟	ガチナ	姉妹

タマタ	男	ヤレヲ	女	ゴチライライ	小兒
ナゴレアレア	小女	ラウヌウル	髪	ウルラ	頭
ヤンレバ	額	ワプナ	眉	ベカベカニマタ	睫毛
マタナ	目	オプナ	鼻	グスナ	口
テンベニグスナ	唇	パチナ	齒	ラメナ	舌
バルナ	臉	ダリガナ	耳	クミナ	髯
プトニウルナ	腦天	ワースナ	後腦	ドマナ	首
タニタニ	喉	バトバトレリガナ	肩	リガイマタウ	右手
リガイマウイ	左手	セレナ	胸	サリサリナ	脇
ケテナ	腹	バクナ	背	サガナ	股
ズルナ	膝頭	テモナ	脛	ヤバナ	足
スルスルバト	すね	グテグテマバ	足首	ガンガルニヤバナ	足指
ガニリガナ	爪	ボクボクニヤバナ	かゝど	ガンカルニガナ	手指

るなり)

本島土人の言 本島土人は數多の言語を有すれども之を記すべき文字なきを以て本島在留の宣教師は羅馬字を以て之を書することを教へ今は土語に書したる經典並に教課書等あり其「アルハベット」は左の如し

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z (此中Xの二字ハ不用なり)

又其言語の概略を左に列記すべし

ズア	一	ルア	二	トル	三
ワア	四	リマ	五	オノ	六
フズ	七	ワル	八	リア	九
チン	十	チニカズア	十一	ルア、シヤガブル	二十
ナンダラー	百	ナンド	千	タマーグ	父
チナーグ	母	ダチング	兄弟	ガチナ	姉妹

タマタ	男	ヤレヲ	女	ゴチライライ	小兒
ナゴレアレア	小女	ラウヌウル	髪	ウルラ	頭
ヤンレバ	額	ワブナ	眉	ベカベカニマタ	睫毛
マタナ	目	オブナ	鼻	グスナ	口
テンベニグスナ	唇	パチナ	齒	ラメナ	舌
バルナ	臉	ダリガナ	耳	クミナ	髯
プトニウルナ	腦天	ワースナ	後腦	ドマナ	首
タニタニ	喉	バトバトレリガナ	肩	リガイマタウ	右手
リガイマウイ	左手	セレナ	胸	サリサリナ	脇
ケテナ	腹	バクナ	背	サガナ	股
ズルナ	膝頭	テモナ	脛	ヤバナ	足
スルスルバト	すね	ゲテゲテマバ	足首	ガンガルニヤバナ	足指
ガニリガナ	爪	ボクボクニヤバナ	かゝど	ガンカルニガナ	手指

ロマニリカナ	掌	マタニシガ	日	アブラ	月
カロカロ	星	アワギ	風	アウア	雨
ロンロンラギ	虹	デルンギワスア	山	ロマラギ	天
ゲレ	地又の土	ブラブラ	空氣	アヌアヌ	島
ワイツイ	海水	ナカウ	木	セミカウ	花
ラウニカウ	葉	アブカニカウ	實	オホヌ	龜
タウビマサ	病	セレ	歌	ビビリ	貝
マスボフナクロウ	天主	バイ	徳利	サガ	井
タタラ	水入	ブカ	火	オワイ	海
メケ	踊	ブヌブル	埋葬	サアムブル	墓
サマテ	死去	マス	祈禱	ホサ	讀む
サイアンドラ	今日の	サンマオバアイ	左様から	サビナカ	有難う或は宜しい
サウラ	宜くない	シガイ	否	イヨ	然り

ツリヤマ	私と與へよ	ツリヤビイコ	上げませう	イコ	君
ベオイアウ	此所に来れ	ラコタニ	往け	ダルラツク	共に行く
ラコマイ	三人で行く	カナ	食する	グヌ	飲む
トルラツコ	呑み込む	ビナ	好む	セクニビナカラ	好まぬ
チロマ	コペイチイバアム君の名の	アバコンゴ	何ぞ云ふ名か	センガイサラ	信せぬ
サレブ	澤山	サレブサフ	大	ライライ	少い
ライライサフ	小	マルフ	後に	クスラフ	急ぐ
カンナタバコ	喫烟する				

十二月廿二日 本日の豫て當港を出發する事となり居たれば余の前日より其の準備を爲し本港にて新に知巳となりたる人々も別を告げて昨夜本艦に歸りたり扱本艦の午前六時抜錨し先づ針路をストロング島に定め漸進にてスバ港を出で七時四十七分半速力となり八時南微東に向ひ既にして針を南微西に折り午後二時に至り五十回轉の速力にて西北西四分の一西に航進す其より廿六日まで流走せしが同日午後一時に至り諸「ヤード」を備へ總帆を揚

け同時ニ瀛走を止めて帆走と爲す此日二時頃より天候險惡にして波浪高く船体の簸揚甚し
 かりき、本日より數日を経て南緯九度一分東經百七十度三十四分の點にて廿三年を迎ふ此
 處ハ無風帶に屬し且つ天候平穩なりしかば艦長室に兩陛下の御影を掲げ帆檣より各種の旗
 章を連ね飾り艦員一同ハ禮服を着て遙に我皇室の萬歳を祝し次に艦長室に至り新年の賀辭
 を述べたり又午後より宴を張り餘興として種々の演藝を爲し十二時頃一同歡を盡して寢よ
 就きたり、一月五日午後七時二十分東南方ニ當り非常に電光の閃々たるを見る恰も天候の
 險惡ニ變ずる兆候ならんかと配慮せしに幸ひにして何事もなかりし、同十三日午後一時三
 十分南緯二度零九分東經百六十四度十六分の處に至り鯨鯨數十頭艦体の前後に出沒して潮
 水を噴出し實に奇觀を極む美見機關長之を見て類ニ砲發せしも射殺せしや否やを知らず、
 同十五日午前六時二十分東經百六十一度五十分の處を北西二分の一北に向ひ赤道を通過せ
 り、同廿二日より廿四日までカロリン群島間を經過せしか一島をも見分せざりし
 同廿九日 此日はマリヤナ群島に近きしを以て零時五分瀛關に點火し午前六時五分より運
 轉を始め試みに六十回轉の速力にて進行せしに一時九哩を駛せたり同九時二十分總帆を收

め西北西に向け進む此時マリヤナ群島の首島なるグワム島を遙ニ船首ニ認む同十時方向を
 西微北ニ取り午後二時更に北西微西に變じて航進し三時三十分グワム島の南端なるウマタ
 灣ニ入り同四十五分右舷の錨を投す間も亦く同港の番人(該島土人)西班牙國旗を掲げたる
 小艇にて本船に來り今より四五日前貴國軍艦比叙號來り一昨日まで碇泊せしが同日サン、
 ルイス、アブラ港へ向け出帆せり其の際金剛艦來らば之を渡し吳よと依囑されたりとて一
 通の書狀を艦長に渡し依て評議の上翌朝まで同灣に碇泊し三十日午前十時錨を拔
 き午後五時にサン、ルイス、アブラに入港したり

マリヤナ群島の地形

マリヤナ群島は東經百四十五度北緯十三度半より廿餘度までの間ニ點布せる群島にして
 十二の島嶼より成り皆西班牙政府の管轄に屬しクワム島は西國の政廳ありて全島を支配
 せり
 抑もグワム島は本群島の最南ニ位する一大島にて長さ廿七里、幅員ハ廣狹一様ならず三
 里より十里に及ぶ珊瑚礁島の半面を環繞し土地稍傾斜するを見る其の東側の巖岩羅列
 して投錨するの所なく西側は多數の少砂灣を爲して許多の岩角境界を畫せるを見る而し

てサン、ルイス、サブラの本島中の良港にして西南の端に在り珊瑚礁一面に港内は蔓延し潮水之に映じて恰も藍硬沙の如く船舶は礁脈の間に碇泊するを得るなり
 本群島の地理、風俗、歴史等に就ては記述すべき事少からずと雖も余の其後再び本島に渡航することを得て更に精密の探究を遂げれば他日を待ちて詳細に記述すると爲し茲より該島記事を省畧したり讀者諒せよ

二月六日 午前四時より瀛關に點火して出帆の準備を爲し八時に至り漸進して港口を出で午後一時卅五分總帆を揚げ瀛走を止む同五時北々西四分の一西方向つて方針を取り進行す、同日午後五時北緯十六度五十五分東經百四十度一分の處にて如何ある故にや前橋の「ローフ、マスト」(檣上にある小帆柱)突然三ツに摧折したれば直之を修繕したり、同日午前七時點火し零時五分北々東二分の一東に向ひ瀛走を始む(此時總帆を收む)、同十二日午前一時四十分城ヶ島燈臺を左舷の肩に認め午後一時五十分劍崎燈臺を左舷に野島崎燈臺を右舷の正横に認め得たり六時三十五分觀音崎に向ひ八時十五分恙なく品川灣の軍艦碇泊所に入り九時三十分投錨せしかば余は直ち行李を收め上陸し同夜歸京なしぬ始め本品川灣に歸着す

艦の我邦を解纜するや明治廿二年八月十三日にして九月廿三日布哇ホノル、港に着し十月廿日同國ヒロ港を發し十一月二日ハンニング島に到れり其間九百九十二海里同月四日同島解纜同月二十一日サモア群島バンゴバンゴ港に至る其間千二百五十六海里、同月廿七日同處解纜八十五海里として翌廿八日ウボル島のアビヤ港に入り同月三十日同處解纜四百七十七海里にして十二月五日ヒージー群島中のレブカ港に至り同月八日同處解纜七十八海里として同日スバ港に至り同月二十二日同所解纜二千九百八十一海里として翌廿三年一月三十日マリヤナ群島中のアブラ港に至り二月六日同處解纜千五百三十七海里にして同月廿二日歸朝したり

南洋探檢實記終

51V28

明治二十五年七月十八日印刷
明治二十五年七月十八日出版

版權登錄

所有
版權

著者 鈴木經勳

發行兼印刷者 大橋新太郎

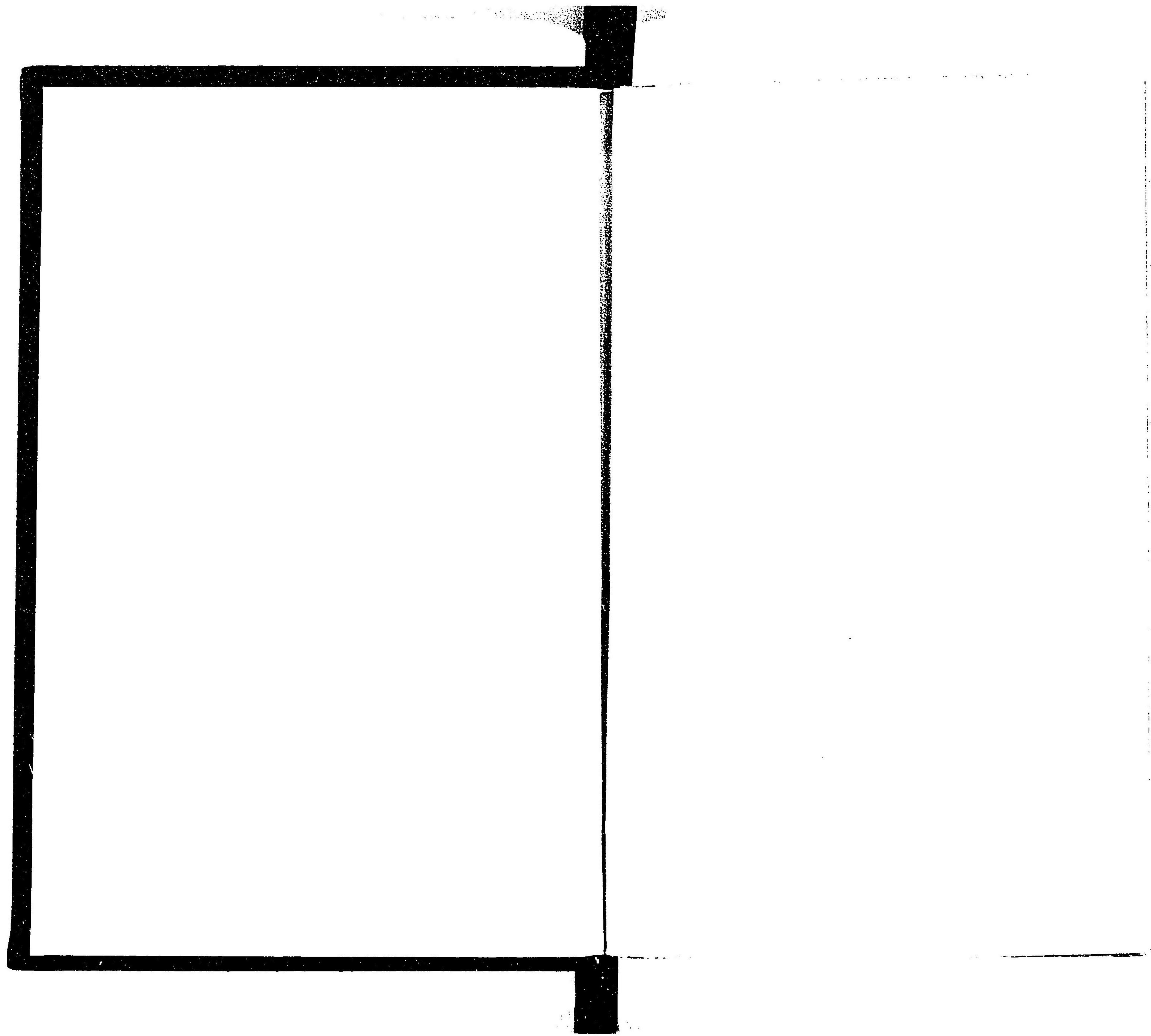
日本橋區本石町三丁目十六番地

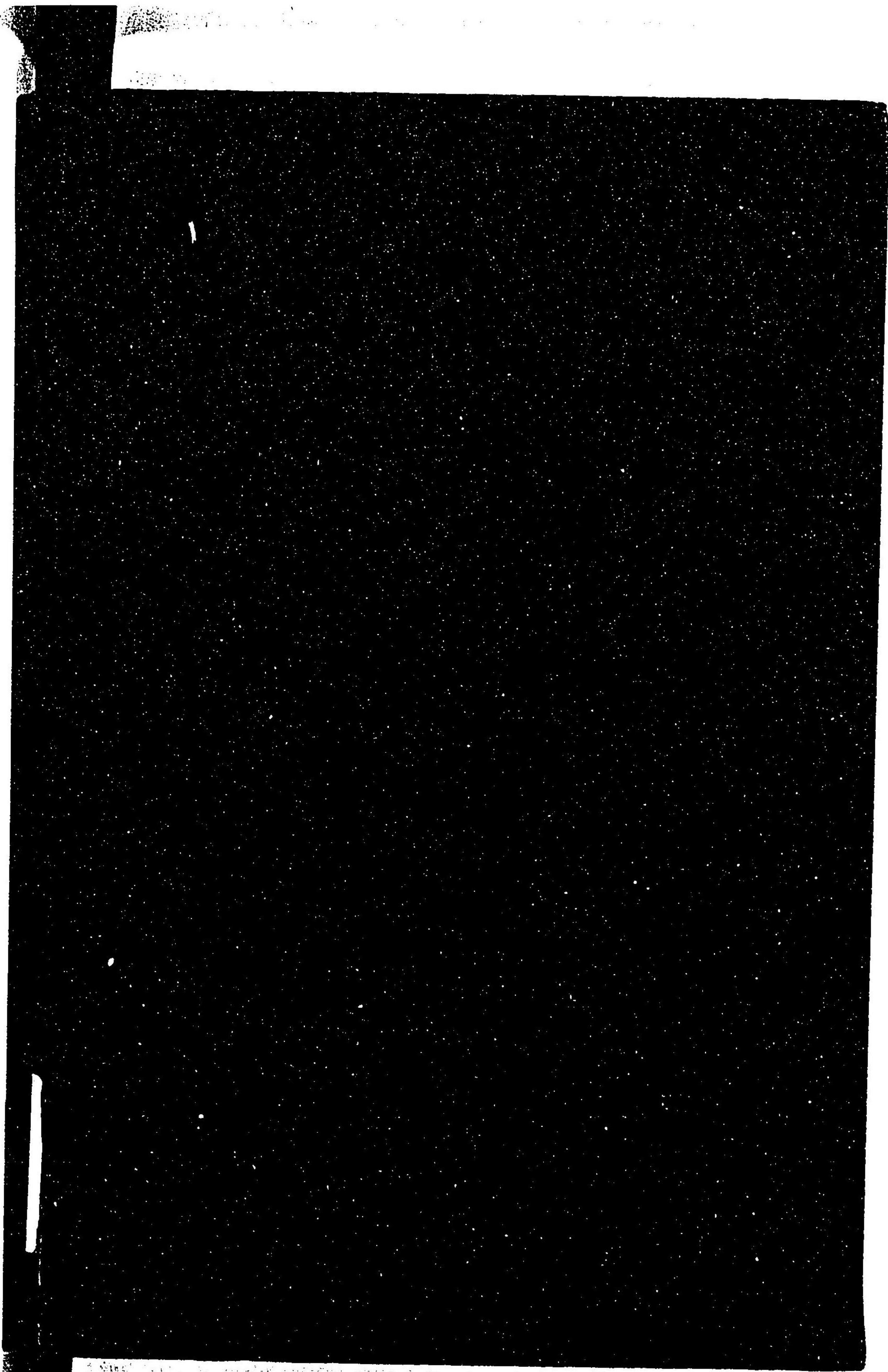
正價金三拾錢

三百三十四

東京日本橋區本石町三丁目

發兌書肆博文館





38

257

Ⓜ

026784-000-7

38-257

南洋探検実記

鈴木 経勲 / 著

M25

ADD-0485



